笹本祐一

妖精作戦

ソノラマ文庫

創元SF文庫版　2011年8月刊行開始

超能力少女、高校二年生。

歴史を変えた四部作を
一九八四年オリジナル版で贈る

カバーイラスト＝D.K
カバーデザイン＝岩郷重力＋WONDER WORKZ。
解説＝有川 浩

妖精作戦 笹本祐一　創元SF文庫

◆詳しくはこちら◆

S.C.F.
miyone

ソノラマ文庫

妖精作戦

笹本祐一

朝日ソノラマ

目次

ACT・1　早朝新宿トランスファー……5
ACT・2　スターボウ計画……22
ACT・3　誘拐デスマッチ……45
ACT・4　カサンドラ狂騒曲……66
ACT・5　硫黄海域（サルファー・ゾーン）……113
ACT・6　垂直エクスプレス……158
ACT・7　月面サバイバル……200
ACT・8　連絡船エスケープ……243
ACT・9　スターウォーズ……261
THE MAKING OF　妖精作戦……302
一〇年目のあとがき……304

イラスト／御米　椎

ACT・1　早朝新宿トランスファー

1

徹夜明けの目に、朝の日差しが痛かった。榊（さかき）裕（ひろし）は目をしばたたかせながら新宿駅東口の大時計を見上げた。電光式の文字盤は五時三十分をまわっている。

「学校へ戻って寝れるな。ふわあ」

榊は大きくあくびをして背伸びした。眠い。

「八本……じゃない、九本か……」

榊は前日の朝から見た映画の本数を数えなおした。夏休み最後の日に、見逃していたロードショーや二番館に転げ落ちた作品を追いかけて、あげくの果てにオールナイトを二つハシゴした収穫である。

「あーつかれた」

新宿アルタ正面の横断歩道をのったり渡って地下道に入る。早朝だけあって人影は少ない。

重力をいつもの二、三倍に感じながら、榊は東口改札口の路線図を見上げた。国立(くにたち)までの運賃を確かめる。

「また値上げしてるんじゃないんか、ん？」

ぶつぶつ言いながら、榊はふと隣に人の気配を感じた。

いつの間にか、後ろ手に旅行用のカバンを提(さ)げた女の子が一人、大きな目を開いて路線図を見上げていた。肩の所でそろえた髪ごと、考えこむようにかすかに首を傾けている。

行こうとして、榊はもう一度その子を見た。

同年代だろうが、その横顔が妙に頼りない。まるで自分がどこにいるのか分からない迷子みたいに――。

「……」

ぼやけた頭で、榊はしばらくその子にみとれていた。

首を傾けた彼女が、視線を感じたように髪をゆらして榊に顔を向けた。目と目がもろに合う。

ニコッとした彼女の笑顔で、榊は我に返った。

「あ、あの……」

映画を九本も見て徹夜明けの榊は、ろくに考えもせずに喋(しゃべ)りはじめた。

「どこへ行くんですかあ？」

「国立、ってわかります？」

「あ、行き先同じ」

「わあ、よかった」
女の子の声が少し高くなった。
「ここって、何度来てもわかんないんだもん」
スカートのポケットに片手を入れて何か探しながら榊に近づいてくる。
「切符の買い方、わかります？」
「切符？」
「わたし、機械って苦手で…」
「機械って、切符の販売機？」
彼女は恥ずかしそうに肩をすくめてうつむいた。

早朝でも、天下の新宿駅中央線プラットホームともなると人影は少なくない。
後尾に近い位置は、頭上の大きな南口出口のある連絡通路から斜めにさしこむ強い朝日が長く影を伸ばしている。
「今日も暑そ」
榊が東の空を見上げる。つられるように女の子も朝日に目をむけた。
「国立まで、何しに？」
榊は訊いた。女の子がまぶしそうに目をしばたたかせながら、
「転校生なんです、わたし」

「へー、学校どこ？」
「私立の星南大付属」
「は……」
榊は思わず女の子の顔を見直した。
「隣だそれ。女子部？」
「うっそー。男子部の人？」
「ほんと。へー、何年？」
「二年です。よろしく」
女の子がちょこんと頭を下げた。
「わたし、小牧ノブ」
「オレも二年。榊裕です」
二人で頭を下げてるうちに、風を巻きおこしてホームに電車が入ってきた。
車内は意外に空いていた。
自分のデイバッグと彼女の旅行バッグを網棚にあげた榊が腰をおろす。
「で、なに、機械だめなの？」
彼女は恥ずかしそうに笑うことで、それを肯定した。
「自転車くらいならなんとか」

「腕時計なんてのは？」
「してません」
小牧は左の白い腕を上げて見せた。
「電卓とか？」
「できればさわりたくない」
「どこで生きてたんですか？」
「東から来ました。……田舎じゃなかったもん」
「ふーん」
「ね、始業式大丈夫？」
彼女が榊の腕時計を覗(のぞ)きこむ。
「一時間もしないで駅着くよ。……ふあー」
超高層ビル街がシルエットになって遠ざかっていく。
隣に女の子がいるというのは、男子部の生徒にはまたとない機会である。なのに、寝不足でろくな気力も残っていなかった榊は、いいかげんな受け答えをしているうちに眠りこんでしまった。
天気は快晴。九月一日早朝、夏の暑さはまだ残っている。

2

プワ――
耳元でいきなりトランペットが鳴らされた。続いて沖田得意のラプソディ・イン・ブルーのイントロがアップテンポで始まる。
「わあ！」
突然の騒音に榊はベッドから跳ね起きた。
「やっと起きたか。始業式はあと十分ではじまるぞ」
「……耳が死んだ」
きーんとなってる榊がつぶやく。
「ムチャな起こし方しやがって！」
「はよ制服着ろ。新学期一日目ぐらい遅刻したくねェ」
トランペットのマウスピースをぬいてケースにほうりこみながら沖田が言った。榊はのろのろと体を起こして目覚まし時計に手を伸ばす。八時五十分すぎ。
「オレいつ戻ってきた？」
「七時前に夢遊病者みたいに戻ってきた。どこの酒場でうだった？」
「飲んだんじゃないよ。つーと二時間は寝たんだ。……よく戻れたな」

ふと榊がマジな顔をした。
「新宿で電車乗ってから後、何も覚えてない」
「よくゆーよ」
沖田が机の中をひっかきまわしながらいった。
「女連れで戻って来たのを真田が目撃した。あとで聞かせてもらいたいね」
「女……だ？」
榊がベッドから床に下りながら聞き返す。
「とぼけるんじゃないの。お前が女と朝帰りとはちと信じ難いが」
やっと見つけ出した生徒手帳をズボンのポケットにつっこんだ沖田が、榊に向きなおった。
「どーしたんだ？」
「あ、思い出した！　あと五分！」
腕のデジタルがいつの間にか８：５５になっていた。沖田が、
「あとでゆっくり……」
「気が向いたら。それより遅刻しちまう！」
榊はあわててタンスの引き出しを乱暴に開けた。

私立星南大学付属高校。現在では珍しくなった全寮制の学校で、敷地ごと男子部と女子部に分かれている。榊はここの二年生、沖田玲郎、真田佐助とともに宿舎の４０５号室に住みついてい

る。

本日より新学期。今日は、だっ広いだけが取り柄の講堂で始業式の後、午前中は授業だが、午後は暇になるはずなので、榊は寝不足を昼寝で解消するつもりだった。だが現実はそれほど甘くなかった。

「レポート……くくくくく」

机の上に分厚く積まれたレポートの前で榊が頭を抱えている。夏休みの宿題である。

「現国に世界史に現社に、えーと基礎解析もあったな」

その横で涼しい顔して指を折ってるのは真田である。

「ご苦労」

「不覚をとった……」

各々の得意課目に従って、夏休み前にレポートを分担したまではよかった。だが榊は一人で映画に浸っていたため、他の二人がやっておいた分をまとめていなかったのである。

「締め切り一番早いのどれだよー」

榊が元気のない声で訊く。

「明日二時間目の現国だあな。例の詩人特集」

自称十三代目戸沢白雲斎という小柄な真田が机の横の時間割りを見る。

「三限目に数学と、五限目に英B……どこまで耐えられそう？」

「……留年を考えよう。くくく」

ぼやきながら榊が新品のレポート用紙を開いた。
「えーい死んでやる！」
「あーなんまんだぶなんまんだぶ」

翌朝。405号室で徹夜の作業を続ける榊に、体操部の朝練から戻った真田が声をかけた。
「おーい、生きてっかー？」
「とっくに死んどるわい！」
「一限目どーする？　代返やろーか？」
「頼む……ついでにそこのレポート持っててくれ」
「えーとこれか、しかと承知。沖やんは？」
「食堂に出かけた。あ、オレの分もとってきてくれ」
「あいよ」

「ほー……」
ふらふら歩いて教室に入ってきた榊が目の前に置いたレポートを見て、沖田が目を皿にした。
「結局間に合った、えらいえらい」
昼休み中の2－Bの教室である。半病人か半死人といった体(てい)の榊は、完全にすわっちゃった目でにらむように沖田を見た。

「提出頼む。オレ寝る」
ふらつきながら沖田の前の自分の席にたどりつき、コンマ何秒もかけずにつっぷして寝息をたてはじめた。
「あやつ二日酔いか？」
沖田の横で後席相手にポーカーをやっている南部がゲームの片手間に訊いた。片目を閉じて榊のレポートをパラパラとやった沖田が愛用のトンボメガネを額にあげた。
「五時間でこれやったらしい。榊は単なる寝不足よ、ネブソク」
「オールナイトにはまってたって話だろ」
南部の真向かいの和田がカードを換えてストップをかけながら言った。
「若い奴だ」
「いかにも榊らしい……っと待て、ストップだと？　……なんて奴だ」
南部が二枚換える。
「勝負！」
和田は2から6までのストレートフラッシュ、対する南部はロイヤルストレートくずれのフラッシュ。
「あた……」
「んじゃ、掃除当番まかせたね」

「とゆーわけだ」
珍しく深刻な顔で榊がうつむいた。
「名前も聞いたはずだが思い出せない、電車乗ってからの記憶もない」
「情けない奴」
沖田は口元をゆがめた。
所は高校前の楡通(エルム)りと呼ばれる二車線の直線道路。寝不足をレポート提出後の二日間ぶっ続けの昼寝と居眠りで解消したはずの榊は、その日のうちに真田の買い物とやらに付き合わされて沖田ともども街にひっぱり出された。
「顔は!?　覚えてないんか？」
真田が問い詰める。榊は首を振って、
「もう一度見れば思い出すかも……」
「最悪だな」
沖田がつぶやいた。
「るせーや。で、何？」榊が真田に訊く。「おまえ、まだ女子プロレスなわけ？」
「いやー最近えっちで、うはは」
「CDぐらい、レンタルですませりゃいいものを」
「いやー、ポスターがかーいくてねえ」
「だったら……ん？」

背後から聞こえてきたローターの風切り音に沖田が振り向く。電柱で腹をこすりそうな超低空を、かなりの高速で小型のヘリが飛んで来た。

「なんだ？」

「ベルジェットレンジャー」

あっという間に頭上を通過したヘリを見上げた沖田が言った。

「自家用か？　あんなに低く飛びやがって、航空法違反だぞ」

「映画でも撮ってるんじゃねえの。え？」

榊が言ってるうちに、ヘリの飛び去った方向から派手な破壊音が聞こえた。

「なに？」

「事故った」

「墜落したか？　行ってみよう」

「おー……」

「見事……」

道路脇のキャベツ畑に部品を散らばして、小型のヘリコプターが鼻づらをつっこんでいた。黒土の上には、ちぎれた尾や積んであったらしい電子機器が散乱し、墜落のショックでスッ飛んだローターは隣の水田につき刺さっていた。

「やばいな」

墜落直後でまだ人の集まっていない歩道で、沖田がすっと息を吸いこんだ。
「爆発するぞ」
「乗ってるのどこ行った。もう逃げたのかな？」
真田があたりを見回す。人影は見えない。白いヘリの残骸の上に、ゆらーと陽炎（かげろう）がたった。内部から薄く火が燃え出す。
「ほーら来るぞ」
爆発音とともに機体が四散する。鮮やかな青空にドス黒い煙の柱があがった。
「はらー」真田が額に手をあてた。「いや絶景……」
「すごい」榊が顔をしかめた。「はじめて見たぜこんなの。ん？」
横を見た榊が、見覚えのある横顔に目を止めた。ガードレール越しに一段低い畑をながめている私服の女子高生がいる。
「えーと」つい最近見た顔である。「なんてったっけ……んーと……」
少し首を傾けたその子が視線でも感じたのか、榊の方に顔を上げた。
「あー！」
「なんじゃ、どした？」
突然大声をあげた榊に真田が訊く。榊は女の子を指差すなり駆け出した。
「なんだあいつは？」
「無理もない」天を仰ぐ沖田。「この暑さだ」

「お久しぶり、ええと、小牧……だっけ」
榊を認めた女の子が目を大きく見開く。
「あ、榊くん……だよね」
「探してたんだ、あの日ボケてたんでろくに覚えてなくて」
「誰じゃ、おい」
真田がうしろから榊をこづく。
「女子部の転校生だよ」
「こんにちは」軽く頭を下げる。「小牧ノブです」
「あ、ちわ……榊、朝帰りの相手ってこれか？」
「朝帰り？」
「駅で出くわしただけだ！　あ、これ同室の真田と沖田」
「よろしく」
「こちらこそ。……榊、こちらがその転入生か」
「そうだけど、どうしたの？」
「何か知らんが」沖田があたりを見渡す。「どーも背筋がさむい。実にわるーい予感がするんだが……」
「帰っていいよ。っかし、すごい事故だね、これ」
「ノブ、待った？」

突然あらぬ方向から聞き覚えのある声がかかった。沖田がその声に顔色を変える。
「つ……」
ゆっくりと振り向くと、Gパン姿の女の子が一人、カメラ片手に畑から歩道へガードレールを飛び越えて来た。目と目が合う。
「沖！」
「つばさ……キサマなんでこいるんだよ！」
沖田が頭をかかえる。つばさと呼ばれた女の子は榊と真田を見て、
「三人揃ってるの？　へー」
「やば、俺、出直してくるわ」
沖田がくるりと背を向けて歩きだす。その背につばさが喚いた。
「逃げんな沖。ゲンコーどーした！」
「何の話だ」人目もはばからずに沖田が喚き返す。「知らんとゆーたろーが！」
「いーまさら何ぬかす、この！」
ノブは二人のやりとりをあっけにとられて見ていた。榊がうんざりした顔でノブに説明する。
「あれ鳴海つばさ。新聞部の編集長で沖田の天敵。あーあ、新学期はじまってから静かだったのになー」
「ゲンコーって？」
「休み前に頼んだのよ、夏のバイトのレポートしろって」

「陰謀だ」と沖田。「コンパで酔っ払ったついでにだまされた」
「レポート程度で追っ払えるんなら安いと思うんだが」
「できるかボケ！」真田に沖田がいう。「一度で退学くらうわ」
「架空ルポにしたげるわよ。今年は何やったの？　ホスト？　呼びこみ？」
「水商売はやめたってゆーとろーが」
「なら書け。締め切り一週間もオーバーしてんだぞ！」
「沖田にもの書けって方が無理だと思うんだが……」
「あー」つばさが榊と真田と一緒にいるノブに気がついた。「あなたこんな連中にひっかかってたの。やめなさい、相手が悪すぎるわ」
「えらい言われよーですな。…え？　知り合いなの？」
榊がびっくりして両方に訊く。つばさがいった。
「新入りのルームメイトよ、文句あっか」

ACT・2　スターボウ計画

1

港町、初秋――。

この日、神戸の港に一人の男が降り立った。

外国帰りらしいその男は、乗ってきた貨物船から大型バイクをおろすと、通関で簡単なチェックをしただけで海浜通りへ出た。

最終型のCB1100Rの巨大な並列四気筒エンジンはセル一発で目覚めた。軽いチューンで百三十～百四十馬力にはなっているはずのエンジンは、やがてアイドリングで安定した。

オリジナルの派手なトリコロールカラーから地味なダークトーンに塗り替えられたバイクにまたがると、男は神戸の町の中へ走り出した。国道2号線を経てトアロードに入る。

やがて男は、神戸の山並みへ続く坂の途中にある喫茶店にバイクを停めた。レンガ造りの店の、古風な樫(かし)の木のドアを押して中へ入る。

「よう」
カウンターのマスターが顔を上げた。
「その顔だと仕事は成功したな」
「ついでにゆっくり休んできたよ。いつものやつ頼む」
マスターがドリップをはじめた。男がカウンターに腰かける。
「これからは？」
ジタンの最後の一本をくわえて、箱をひねって捨てた男にマスターが訊いた。
「しばらくは私立探偵業だ。大仕事はもう疲れたよ」
「そいつは残念だ」
マスターがカウンターの下から白い書類入れを出しながらいった。
「ちょうどおまえさん向けのいいのがあるんだが」
「何だ？」
男は封筒の中から書類と、何枚かの写真を取り出した。写っているのは高校生くらいの少女が一人。
「小牧ノブ……九月で十七歳!?　こんなガキのボディガードなんてみっともない仕事ができると思うか！」
「報酬、見てみな」
男はあらためて書類の一枚を見た。

「なんだこの金額は……」
「たかがボディガードに傭兵の危険任務並みのギャラ――ただの仕事にしては過ぎてる」
「何かウラがある？」
「と思って調べてみた。大穴だったよ」
勿体(もったい)つけて言いながら、マスターがコーヒーをカップに注いだ。
「契約で依頼主は信用できる人物だ、としか言えんがね。この高校生狙ってるの、どこだと思う？」
「狙われるような問題点はなしと……」
男がパラパラと書類をめくる。
「わからんね。身代金(みのしろきん)目当ての犯罪組織でもあるまい？」
「いわゆる超国家の秘密組織、数ある中で最も規模のでかいやつさ」
マスターが一段声を低くした。
「SCFだよ」
「なに!?」
男はびっくりして聞きかえした。
「確かか？」
「ブルーサーチと言い換えようか。これは確かな情報だ」
希代の情報屋であるマスターの情報は確かである。男は考えこむように押し黙った。

「ＳＣＦに新しい部隊を作ろうとする動きがあるらしい。計画のコードネームはスターボウ」
「その内容は？」
「わからん」
声のトーンをもとに戻し、マスターがいった。
「わかってるのは、ＳＣＦがこの計画のために全世界のエージェントをやっきになって動かしてるってことだけだ」
「あれがねえ」
男はコーヒーに口をつけた。
「何やってんだ？」
「民間人相手の、常識はずれに大掛かりなスカウト作戦」
「機密保持に疲れて宣伝映画でも作るのかね。……あそこもロリコンか」
男が写真片手に言った。
「で、そのスカウトからこのハイスクールの娘っ子をガードしろってわけか」
「ＳＣＦの常識はずれはおまえも知っての通りだ。最悪の場合、地上部隊との全面対決なんて事態もありうる」
「娘っ子一人にそれだけの価値があればな。……ふむ、悪くない」
男はコーヒーを一気に飲み干した。
「受けてみよう。探偵業の初仕事には悪くない」

その言葉を聞いてマスターが一枚の紙切れをよこした。小切手である。
「契約金と、はじめの一週間の分だ。依頼人への連絡はこちらを通してくれ。仕事はいつからはじめる？」
「明日……からだな」
「オーケイ。契約成立だ」
男は契約書にサインした。平沢千明。
「新宿に開業するとかいう事務所はもう完成している。ビルの二階だ。壊さんように」
とマスター。
「最後に一つだけ。スカウトの理由はわかるか？」
「わからなくもないが……」マスターが言い淀(よど)んだ。「信じる信じないは自由だ。基準はわからんが、スカウトの対象になってる人間には、ある共通点がある」
平沢は軽く眉を上げた。マスターが言った。
「ＥＳＰ、だ」

『スターボウ計画地上グループ、セクションＪ－３からの最新報告です』
衛星回線を通して個人通話用のブースにつながれた映像は、おりから活動を始めた太陽黒点のためかなりの干渉をうけていた。
「聞かせてもらおう」

双方向通信用（ツーウェイトーク）のスクリーンパネルの前で、白髪の博士アイザック・ジルベスターが答えた。約二秒のタイムラグの後、スクリーンの中のレポーターが喋り始めた。

『日本（ジャパン）における調査状況です』

オペレーターの画面が右下四分の一に縮小され、残りに男の正面と横顔の写真と、データリストが出る。

『現在、二十七名。うちスターボウ計画参加者は次の通り。

男性　セイキ・コバヤシ　C級サイコキノ　二十一歳、大学生
　　ジュン・ナガヌマ　B級予知能力者　二十歳、無職
　　マコト・ナガミ　B級サイコキノ　十九歳、無職……』

声につれて、画面が次々に切り替えられていく。

『次、女性です。

　　モモコ・タミキ　B級テレパス　十八歳　高校生
　　ユキ・カズサ　超A級テレパスあるいはサイコクラッシャー　十五歳　高校生

以上です』

スクリーン内の女性は一度口を閉じた。ジルベスターはスクリーンに映されていたデータを、最後の一枚で止めていた。

「テレパスあるいはサイコクラッシャーとはどういう意味だ？」

アジア系らしい女性の声が戻ってくるまでにしばらくかかった。画面のデータがいくつか入れ

替わる。
『調査班の報告では、能力の安定していないタイプのエスパーだそうです。ただ、クラッシャーとしての力があまりに破壊的なため、訓練はドクターが直々(じきじき)におこなってほしいとのことです。潜在能力指数はテレパスとして百三十五、クラッシャーとしては計測不能』
「わかった。報告を続けてくれ」
ややあって、再びオペレーターが口を開いた。
『第三次調査で発見された候補者に関する最新報告です。
潜在サイコキノの可能性のあったユタカ・セキグチは能力がC級と判断されたため、計画から除外されました。同様に心霊治療者(ヒーラー)のミキ・ヤシマも能力が微弱なため計画より除外。超A級テレパス他複合能力者と見られるサオリ・ミキモトについては能力指数百四十が確認されました。女性、年齢不明。現在接触中です。
一度見失われたノブ・コマキは再発見に成功、現在なお調査中です。潜在能力測定のため調査班がヘリを飛ばしましたが、計測レベルを遥かに超える力のため計測に失敗、結果としてヘリコプター一機を失ったそうです』
「……」
『以上で報告は終わりですが』
「ああ、有り難う」
オペレーターの映像が笑顔で切れ、代わりに地球の映像が映った。月の裏側にあるヘヴィサイ

ドクレーターからは、地球は見えない。だから地球とルナベースを結ぶ回線は、いつもリアルタイムの地球を映している。

「荒れとるな」

太平洋上にある、台風らしい雲の大渦を見たジルベスターがつぶやいた。

SCFルナベース司令キーラーは、ドクター・ジルベスターの報告書に目を通した後、その氷のような目をジルベスターに向けた。

「スターボウの一期生の出撃はいつになる？」

「現在テスト中のXCI－40の実戦投入よりは早くなるでしょう」

ジルベスターはメガネを取って、銀髪の司令官に顔を上げた。

「エメラルドセクションでのスターボウ一期生の訓練は、もう開始されています」

「第三次のスカウトの結果がもう出るころだな」ディスプレイのデータを入れ替えながら自身はアングロサクソン系のキーラー司令官がいった。「アジア地区はESP因子が他よりも高いそうだが、なぜかね？」

「要素がありすぎます」

学者らしい慎重な表現で、ジルベスターが首を振る。

「白色系より黄色系の人種の方が、歴史的に見て物質より精神文明に向かいやすいことはありますが、それとて……」

「では、そのアジアへ行ってみる気はないかね？」
「は？」
「日本でのスカウトがそろそろ終了する」
ディスプレイを切って、キーラーは腕を組んだ。
「しかしスターボウ部隊の訓練は……」
「君の月面滞在日数は今日で三週間だ。これくらいで地球に戻らんと、立てなくなる」
月の重力は地球の六分の一である。人間の体にかかる負担も六分の一になる。このためあまり長期間月面にいると、使われない筋肉がおとろえてくるのである。
この防止のため、ルナベースでは最低七十二時間に一度の筋力トレーニングと、一定期間ごとの地球重力下への帰還が定められていた。
「ブルーサーチからこちらへ来たのだから地球へはしばらく戻っていないだろう。行って来たまえ」
「地球へ……」
「そして、君の生徒を連れて戻ってくるのだ」

2

「ここか……」

星南大付属高の前の楡（エルム）通りに平沢はバイクを停めた。またがったままタバコに火をつけて近代的な造りの女子部の校舎を見上げる。タンクの上にヘルメットを置いて、平沢はしっかりと記憶した写真の顔と、いくつかのデータを頭の中で確かめた。

――小牧ノブ。ここの二年二組、寮生。もっともこの学校は全寮制だが。身長一五八、体重四五キロ、髪と目の色は……

そこまで考えて平沢は苦笑いした。日本人ならばそう変わった色はしていない。ここは日本なのだ。

平沢はふと外を見上げた。

微かなジェットの音が聞こえる。飛行機ならＭｅ－２６２から最新型のスクラム・ジェットまで聞き分けられる平沢も聞き慣れていない音だった。

「えーと、りみっとエックス矢印ゼロの２エックスぷらす３ワイまいなす３ぶんのエックスと……んなろ！」

榊は三階にある２－Ｂの教室で数学の授業をうけていた。席が窓際なのでサボろうと思えばサボれないこともないのだが、なにせ一学期二回のテストでまともな点がとれていない。このままでは進級も危ないので、意地を張ってまじめに授業をうけている。

「こんなんが何の役に立つっちゅーんだ……頭が死ぬ」

「おい榊」

後席の沖田が榊をこづいた。
「こいつをあーたらして、エックスをこーたらしてと。何か用か」
「外見てみな、妙な飛行機が飛んでる」
「たとえガンシップだろーと興味ない……え？」
急激なジェット機音が校舎のすぐそばを通りぬけた。あまりの接近飛行に閉じられたガラス窓がびりびり震える。
「なんだ今の!?」
思わず榊が大声をあげた。
「F－16か!?」「違う！」「なんだありゃ」「映画のロケやるなんて知らんぞお」
生徒が騒ぎ出す。窓の外を一瞥した数学教師が喚いた。
「静かにしろ」
だがおさまるはずもない。男子部と女子部の校庭上空せいぜい七、八〇メートルで旋回を続けるスマートな小型ジェットを見に、窓へ続々と集まってくる。
「しばらく自習だ」自分も気になるのか、教師も教科書を教卓に置いた。「事情聞いてくる」
「押すなー」「るせー」「見えねーぞー」「どこだどこだ」「わーいファイアーフォックスだ」「ふっるーい」「今はF－22だぞお」
「ありゃめったに見れる代物じゃねェ」
沖田が窓際に出来た人垣からぬけ出した。榊が、

「何なんだ？」
「ハイマットだ。屋上行ってくる」
「あん？　えーと、こら待て」
「つきあう」
榊と真田が、騒ぎの大きくなった教室から出ていく沖田を追った。
「ハイマットて何者だ？」
階段を駆け上がりながら榊が沖田に訊いた。
「ＮＡＳＡでテストしてたはずの高機動戦闘機のモデルだよ。Highly-Maneuverable-Air craft-Technology、略してHiMAT（ハイマット）」
「モデル？」
「ラジコンで人は乗ってない。実験用だ」
「へー、ＮＡＳＡでもラジコン使っとんの……」
真田が妙なことに感心しているうちに、一行は屋上に出た。甲高（かん）い小型ジェット特有の音を響かせ、ハイマットが陽光をきらめかせながらひらりひらりと飛びまわっている。全長六メートルほどか。
「えええスマートな飛行機やの」ひょいと手すりに座った真田が額に手をあてた。「主翼も後ろについとる……先尾（エンテ）式ってやつか？」
「前についてるのはカナード翼。どーせどっかのマニアがレプリカントしたんだろーが。え？」

沖田が思わず身を乗り出した。
ハイマットはそれまでの旋回をやめて大きく上昇し、一度は高校の上空を離れた。だがその後、反転したかと思うとミサイルか何かのように加速して一直線に建物一つはなれた女子部の校舎へ突っ込んできたのである。
「コントロールしてるのどこのバカだ！」
沖田が叫んだ。榊と真田はあっけにとられて物も言えない。
「女子部に特攻さすつもりか！」

その物体が自分を目標にしていることが分かるまで、ノブにはやや時間がかかった。
「やだ、突っ込んでくるわよ」
窓際に集まった女生徒の一人が陽気な声をあげる。ノブが反射的に目を閉じるよりも速く、脳裏にちっぽけな飛行機が映った。
「！」
わざわざ見つめるまでもなかった。それは三十八人の生徒がいる教室に正確に突っ込んでくる。
ノブは思わず両手で頭を押さえて悲鳴をあげた。頭の中でわずかに冷静な神経が、持っていたシャーペンがゆっくり落ちていくのを見ている。
声に出した悲鳴ではなかった。一瞬の後、悲鳴はイメージの中で力になった。

ノブは突っ込んできたハイマットを力まかせにたたき落とした。自分にすべてが見える、夢の中のような感覚。彼女の意識の中でたたき落とされた飛行物体は、校舎の手前三十メートルでまるで見えない壁にぶつかったかのように跳ね、そして力学法則を無視して瞬間的に墜落した。

突然墜落したハイマットは爆発して四散した。すさまじい轟音と爆風が、手すりに乗っていた真田をあやうく投身自殺させそうになる。

「何事じゃ、何が起きた!?」

バランスを失ってとっさに真田が手すりに足をからませる。逆さのまま空を見下ろし、

「撃墜されたか!?」

「戦争かおい!」

「墜落……じゃなさそうだぜ」

沖田が墜落地点を見たまま言った。

「一度空中でカウンターくらったみたいに吹き飛んで、その後一直線に地面に突っ込んだ」

「どっかからミサイル撃ちこまれたんじゃないの?」榊が雲一つない空を見上げた。「でなけりゃ自爆したのか、コントロール失って……」

「あん?」

考えながら校庭をながめていた沖田が間の抜けた声を出した。

「なんだあのバイク?」

「バイク？」
榊と、やっと屋上に戻ってきた真田が沖田が見ている方へ目を向ける。大型の、ダークブルーのバイクが楡通（エルム）りを急加速して走り去った。
「CB750F……ちがう？」
沖田がつぶやく。
「まさか1100Rじゃあるまいな」

平沢はすぐさま一番近い調布飛行場へ向けてバイクをスタートさせた。ハイマットなど日本でそう簡単に飛んでいる機体ではない。
「あれを飛ばすにはB52が必要だ。それも近距離に」
管制センターへ行けば、公式のフライトプランやレーダー記録くらいは調べられるはずである。

高校の校庭に墜落したハイマット実験機のニュースは、その日の夕刊各紙のトップに報じられた。幸いなことに人的被害が全くなかったため、実験機を飛ばしていた米軍が政府に謝罪の意を表し、学校に賠償金を払うことでカタがつくらしい。
「しっかし、冗談じゃねーなあ」
男子宿舎の405号室、榊らのねぐらで和田が持ち込んだ毎朝新聞の夕刊を読んでいた南部が

声をあげた。
「入間の航空ショーでデモフライトするやつが暴走飛行だとさ」
「墜落の多い季節だ。……南部、机から脚おろせ」
沖田がすごみを効かせた声で言った。かっこつけて沖田の机に脚をあげて新聞読んでた南部が姿勢を直し、ベッドの二階で脚をぶらつかせていた真田に新聞をほうった。
「あの実験機、どこから飛ばしたと思う？」
「改造のB52じゃないのか？」
沖田が言ったが、南部がちっちと指を振る。
「滑走路から自力で離陸したそうだ。磁気フェライト塗ったくってレーダーにも映らんとよ」
「最近は軍もはりきっとるな」
「しかし危険だ」
和田が腕を組んだ。榊が合いの手を入れる。
「確かに。そのうち月でも落ちてくるんじゃないの」
「そーゆー意味じゃないよ。航空ショーったって今度のはアジアへの軍用機のセールスだし、そろそろ自衛隊も米軍合同で大演習やるってーし、北海道の方でも中国艦が何かごそごそやってるし」
「おー、賢い賢い」と真田。「ジャーナリスト志望は違うのお」
「して、ブンヤの目から見た今回の事件のウラは？」

榊が訊くと、和田はニヤリと笑った。
「目一杯ひねくれた解釈してみようか。実は、別になんかもっと大きい事件があって、それ隠すために、わざと派手な事故をおこした」
「はあ？」「なんですかぁ？」
「だから、派手な事故ほどウラから操作しやすいだろ。実際何が起こったかってーと、原潜と空母が衝突して、伊豆あたりの海に原子炉が落ちてるとかー、そばにＣＩＡか何かの特務艦が来てるとかー……」
「和田、最近、〝それ行けスマート〟見てない？」
榊が訊く。
「わかる？」
「わかる。だいたい飛躍しすぎなんだよ」
「仮定はいいけど、もっとリアルなこと考えな」
沖田が言ったら和田は口をとがらせた。
「高校の校庭にあんなの落ちてくる方がよっぽどシュールだよ。人工衛星より確率低いぞお」

3

「来て早々、こんなデータを見せられるとはな」

伊豆沖、二百メートルの海底に潜航する超大型原子力潜水艦カサンドラの一室で、ドクター・ジルベスターがつぶやいた。

月から戻ってすぐ、連絡用のVTOLでSCF太平洋艦隊のこの原潜カサンドラに乗り込んだジルベスターは、まだ地球の重力に慣れきらぬうちに思わぬデータを日本の調査班から見せられていた。

「しかし無茶な手を使うものだな」

『どうせやるなら派手な方が世間の目もあざむきやすいんですよ』

TV回線を通して、荒っぽい手段を使うことで有名な日系三世の調査班のチーフが答えた。

『それにハイマットなら自由にコントロールできますし、デリケートだからどんな小さな力でも検出しやすいんです』

「しかし、センサーを積んだハイマットを瞬時に落とすとは……」

ドクター・ジルベスターはこれまでにない驚きを感じていた。

「ESPメーターのレベルは？」

『メーターがあっという間に振りきれました』チーフは東京から答えた。『ブレーカーも間に合いませんでね、内部回路がぶっとんじまって二度と使いものになりません。ハイマットの墜落の原因は二つ。ノブ・コマキの念動力（サイコキネシス）が機体をたたいたのと、機体全体に力が加わって空中分解したためと思われます』

「サイコキネシスの発動時間は0・05秒で完了、時速七〇〇キロの機をオーバーレベルの力で

……か」
ジルベスターはあらためてディスプレイに転送されたデータに目を落とした。
『あー、ところで、ドクターの指令ですか？』
スクリーンの中の日系三世が手元へ目をやった。
「なんだね？」
『すでに二度逃げられているノブ・コマキに対し、強制連行の指令が出たんですが』
「強制連行だと!?」
『まあ手っ取り早くいえば誘拐です。発信地がルナベース、連行先もルナベースなので、そちらの潜水艦からイエローサーチへ連れていってもらうことになります』
ＳＣＦの超能力関係のセクションは現在のところルナベースに集中している。あと大西洋とシベリアに小さなセクションがあるが、ほとんど使われていない。
「キーラーだな」
ジルベスターは〝氷の死神〟といわれるキーラーの顔を思い出していた。どうやら彼の頭の中ではすでにスターボウ部隊の増強が始まっているらしい。
「まだ早い……が、キーラーの命令ともあればそうもいかんの。了解した。任務を続けてくれ」
『わかりました。新しいデータが入りしだいご連絡します』
スクリーンが消える。ジルベスターはしばらくディスプレイから目を離せなかった。
――破壊的な能力だ。今までのエスパーとはケタがちがう……。

超心理学者（パラサイコロジスト）としてロシアの科学アカデミーのリビンスク研究所にいたころから、ジルベスターは何人もの超能力者と付き合ってきた。のみならず、ＳＣＦのＥＳＰ研究所に入ってからは超能力強化訓練のプログラムを組んだこともある。だが、これほどのデータは初めて見た。

しかし、そのレポートは同時に別の事実をも意味していた。ＥＳＰの可能性と実力を示す潜在能力指数が、日によって幅がありすぎるのである。

安定した能力を持つエスパーでも、その日によってある程度の能力の上下の幅がある。その日の疲労度、精神状態、バイオリズム、さらには月齢にまで影響されるらしいのだが、ノブ・コマキの場合、上下の幅が異様に大きい。

「まだ能力が安定しておらん」

一種の戦慄を感じながらジルベスターはつぶやいた。

「つまり、これだけの能力の幅がありながら、彼女はなお成長途上にある」

「しかし……」

西新宿、喫茶店サウザンド・トルーパーの二階に店開きした平沢探偵事務所で、平沢千明は溜め息をついた。新品のデスクとテーブル、ソファを並べた応接間でタバコに火をつける。

管制センターでの成果はなし。夕刊で一応の事態をつかむことはできた。しかし問題はその後である。

「超能力、ねえ」

本屋で手に入れた数冊とコンピューターネットからの情報はいずれもキワもので、大した役にはたたなかった。
「日本がこの手の研究に関しちゃ後進国だってのは本当だな。民間レベルじゃ、ろくな情報が手に入らん」
平沢は一応レポート用紙に整理した情報を見て、もう一度溜め息をついた。
「専門外で知らなかったが……仕方ない」
平沢は、デスクの上のプッシュホンにソファから手を伸ばした。神戸のダイアナの、うろ覚えの電話番号を押す。コール七回で眠そうな声が出た。
『はい、こちら……』
「オレだ」
『平沢、何時だと思ってんだ。今三時半だぞ』
マスターが声をイラつかせる。
「マスターでも眠ることがあるのか」
『……用件はなんだ、早くすませろ。相手(パートナー)がベッドで待ってるんだ』
「そりゃ悪かった。東京の方で、誰か超能力の専門家知ってたら紹介してくれ」
『歌舞伎町のパブにカウンター・ミラーってのがある。行ってみな、その方面のエキスパートが一人いるはずだ』
「名前は？」

『幹本(みきもと)……沙織(さおり)って名のはずだ。占(うらな)い師もどきのことをしてる』

「サンキュー、邪魔したな」

肩ごしの受話器にそう言ってメモを書ききらないうちに電話は切れた。

ACT・3　誘拐デスマッチ

1

「……しかし」
学校の横の専用駐車場に部品を散らかして一台のバイクのそばにかがみこんでいる沖田に、榊がつぶやいた。頭の上で手を組んだ真田が、
「よーやるわ、ほんま」
「もーすぐ完成だぞ、この750SS」
「こっちもだ、CB750……」
その隣では南部が、これも一台の古めのバイクをいじりまわしている。
「何やってるかと思えば……」マニアである沖田ほどメカに強くない榊が溜め息をつく。「夏休み一杯それにかけちゃったんだろ」
「苦労したんだぞー」

正式名称よりは暴走部の方が有名な自動車部の部長(アタマ)をあみだでやる羽目になって半年近い南部が、エンジンのオイル注入口をしめながら言った。
「スクラップ屋と中古屋まわって、我がCB750は四台で済んだけど、沖田のH2は七台だぞ七台」
「その七台の部品かきあつめて合成したってわけ？」
真田があたりに散らばる部品を見回した。
「スクラップあり事故車あり廃車あり。エンジンは苦労したぜ」
「そろそろ骨董品のやつだからな」
「よーしオッケー、完成」
キャブをいじっていた沖田が、ドライバー片手に立ち上がった。
「こっちも、だ」
バッテリーを接続した南部がシートを閉じる。
「では早速試運転だ。榊、そこのガソリンタンクをとってくれ」
沖田が榊の足元の十八リットル入りポリタンクを指さした。
「重そー」
「真田、そこのオイルカン」
「あいよ」

一人で街に出るのは初めてだった。
放課後ひさしぶりに暇ができたノブは、散歩がてら学校を出てみた。
まわりの住宅や電信柱がなければ、映画『第三の男』のラストシーンのような楡(エルム)通りである。
ノブは一人でのんびりと、駅前の方向へ歩き出した。

「ふむ」
平沢はくわえタバコのまま道の反対側を通り過ぎた女子高生を目で追った。人待ち顔でバイクにもたれてつぶやく。
「彼女、だな」
ガードすべき相手を目の前で見るのは初めてだった。写真で記憶した小牧ノブに間違いない。しかし……。
「あのSCFが狙うタマとは思えん」
彼女の後ろ姿を見送りながら、平沢は短くなったタバコを少し離れたダストボックスに投げ捨てた。

「どうだ？」
アクセルをちょこちょこと動かしてカワサキ750SSの二スト三気筒エンジンの吹けを見ている沖田に、南部がタコメーターを覗(のぞ)きこむ。

「最高（ベスト）！」

最終型のKH500から、かっぱらって来たタコメーターの針は、ぴょこぴょこ跳ねている。

「これならガンマだろーがRVFだろーが負けないぞお」

「この煙なんとかならんのかよー」真田が、ちょっとアクセルを開くだけですさまじい白煙を噴き出す排気管（マフラー）から目をそむけた。「火事屋がくるぞ」

「調子良い証拠なのだ、これが」

沖田が、やにさがりながらいう。榊が続けた。

「逃げるとき煙幕張る必要ないね、これ。南部の方は？」

南部がK0からK7までとりまぜて再生したCB750はメインスタンドで立ったままアイドリングを続けている。

CB750といってもDOHCのモデルではない。日本初のSOHCのエンジンを積んだクラシック・バイクである。750cc（ナナハン）として名高い、ホンダ

「こっちもいいぜ。いつでも走れる」

「ナンバーどったん？」真田が、一応両車についているナンバープレートを見る。「それも再生かや？」

「中古車屋のおやじに話（なし）つけて、フレームごともらってきた。もっともCBはあと三カ月、俺のSSは一月半で車検切れだけど」

「またカネかかるな」

南部がスロットルをあおってエンジンを軽くレーシングする。
「テスト走行いくか？」
南部が言った時、突然、道の方からかすかな悲鳴らしき声が聞こえた。
「……助け……」
聞き覚えのある声が途中でぶった切られる。南部を除く三人が顔を見合わせた。
「今の確か」「小牧の」「ノブちゃんそっくり」
駐車場の前の楡（エルム）通りを、バカでかいアメ車が猛加速しながら通りぬけた。唖然（あぜん）として見送った榊が、「今のに乗ってた」と言ってから気がつく。
「誘拐か!?」
「榊、乗れ！」
沖田がひらりと750SSにまたがり、サイドスタンドを蹴（け）とばした。
「おお！」
榊がタンデムシートに乗るのも確かめず、アクセル全開でクラッチをつなぐ。
「おわあ！」
かのマッハⅢ直系のキチガイじみた加速でSSが駐車場から飛び出す。ギアを次々にかき上げていくが、強烈な加速とテールヘビーのため前輪はウィリーなみに上がりっぱなしである。
「なんなんだよー」
必死でバイクにしがみつく榊に、沖田が、

「舌かみたくなけりゃ黙ってろ！」
スタートで出遅れた南部のCBも後を追って加速する。その横を、一台のダークトーンの大型バイクがすーっと追い越した。
「なっ、なんだ、あのバイクは」
大型バイクはウィリーしっぱなしの沖田のSSをも軽く抜いて前に出た。
「CB1100R！」
沖田が叫ぶ。輸出用のモンスターバイクだ。
「ま、負けるものか」
「バカな気おこすな！　オレたちノーヘルだぞ」
後ろの榊があわわと喚いた。風がすごい。髪の毛ごと後ろにひっぱられるようで、目から涙が出る。
アメ車――リンカーン・コンチネンタルとの差は少しずつ縮まってきた。しかしリンカーンは交通量が少ないのを幸いに、黄色の中央車線も無視して一般車をよけながら、大パワーにものをいわせてまだじわじわと加速している。
「追いつけねーんか」
後ろから喚く榊に、すでに五速全開の沖田がスピードメーターに目を走らせた。こういう風圧の中ではメガネは得である。
「クソッ。ただの車じゃねえ。リンカーンのくせにホットロッドみたいなエンジン積んでやが

る」
追う平沢もあせりはじめていた。交通量の多い20号線や街道に出られると面倒なことになる。国道に出る前に始末をつけなければならない。
追われるリンカーンの男どもも同じことを考えたらしい。後席でどうやらノブを間にはさんで乗っていた二人の男が少し妙な動きをしたかと思うと、窓からサイレンサーもなしに小型の機関銃を乱射し始めた。
「どわわわわあ」
仰天したのは後追いのSSの榊である。無理もない。機関銃の弾丸(タマ)に狙われるなんて経験をしたことはない。
「うわ本物か。映画だろ。いや、これはマンガだ」
「黙ってろ！」喚きながら沖田はカンに頼ってバイクの蛇行(だこう)をはじめた。「振り落とされんな！」
「おりる！」「るせー」
平沢はしょうがねえなと思いながら、ジャンパーの奥の357マグナムに左手を伸ばした。特殊合金製のカウルが鋭い音をたてて機銃弾をはじく。平沢は体を低くしたままスクリーンごしに左手一本で狙いをつけた。両側のサイドウインドーの小型機関銃へ向けて二連射する。
二丁のウージーらしい軽機銃はマグナム弾の直撃をくらって吹き飛ばされた。
「なんて腕だ、あの1100R」
後ろのSSの沖田が目をむく。

「さて、あの車どうやって停めるか……」
ただでさえチューン――それも排気音からしてターボチャージャーらしい――されたエンジンの大型車が、並のことで停まるはずがない。平沢はつぶやいた。
「バズーカでも調達しときゃよかったな」
SCFの仕業なら、タイヤも防弾であろう。
平沢は、腕を低くしてぶっとい排気管に狙いをつけた。
「うまく停まれよ」
トリガーをひく。反動を手首で逃がしながら、平沢はスピードをあげて逃げきろうとするリンカーンから目を離さなかった。
ややあって、リンカーンのボンネットが鈍い爆音とともに開いた。黒煙を振りまいてスローダウンする。
ほどなく停まったリンカーンの右で、平沢は1100Rを停めた。コンバットマグナムを車内に向けたまま、右手をジャンパーの中に入れる。
「素直に出てくるか、車ごと手榴弾で昇天するか、好きな方にしな」
リンカーンの中にはノブ以外に白人二人と、日本人が一人いた。平沢もそれを承知で弾丸を三発残している。
「早く！」
しぶしぶと、三人が車内から出てきた。

「おーっと、手は頭の上だ。余計なことしようってんなら、命と引き換えにやってみろ。そこの日系、中の女の子外に出しな」
言われた男が、のろのろとノブを車内からひっぱり出した。クロロホルムでも嗅がされたのか、ぐったりしている。
「よーし、それでいい。君たちの今日の任務は失敗だ。帰って上司に伝えろ、ＳＣＦの敵に壊し屋のレッドバグがまわったってな」
その名を聞いたとたん、三人が顔色を変えた。
「それと、ここは駐車禁止だ。早く消えな」
三人があたふたと駆け出した。
「なんか、とんでもないことになってきたねえ」
沖田が横からしゃしゃり出てきた。榊が車のトランクに背をもたせかけてぐったりしているノブを恐るおそる抱きおこす。
「やっぱ誘拐未遂ってとこか？」
「さあね……あ、待て」
沖田が急発進気味に走り出したＣＢ１１００Ｒに喚いた。平沢は無視して加速していく。
「んなろ、逃がすか！」
道端にエンジンをかけたまま停めてあった７５０ＳＳに飛び乗った沖田が、
「榊、あと頼んだぞ！」

喚くが早いか前輪を大きくあげて甲州街道方面へ消えたＣＢ１１００Ｒを追う。
「死ぬなよー」
後ろから来た南部が、壊れたリンカーンの横にＣＢ７５０を停めた。真田が喚く。
「どーした訳や？」
「オレに訊かないで」
「おいすごいぞこのエンジン」南部がボンネットの開いたリンカーンのエンジンルームを覗きこんだ。「Ｖ８の七リッターにＫＫ製のツインターボ、他にもいろいろ……八百は出てるぞ、もったいねーったらあらしねえ……やられてんのはクラッチ系か、あとでエンジンだけもらってこーかしらん」
「それより、ノブどーするよ」
抱き支えたものの、それ以上何もできない榊が言った。
「しばらくそのまま喜んどれ……ってのもシャクだね。つばさにでも引き取りに来てもらったら？」

2

沖田は夜になってからやっと戻ってきた。
「くくく……」

これがその第一声。４０５号室にいた南部と和田、それに本来の住人である真田と榊がそれに反応した。
「どした？」「結果は？」「ノーヘルでケーサツつかまったろ」「燃費どの程度？」
「完璧にまかれてしまった」
ベッドにどさっと腰掛けながら沖田がつぶやいた。南部がさもありなんという顔をする。
「百十五馬力が相手じゃなあ。Ｈ２は七十四馬力だもんなあ」
「それだけじゃねェ」
沖田が元気のない声で額をおさえる。
「フレームがやわすぎる、サブフレームでなんとかなるか……ニコバッカーあたりのどっかにねェか？」
「何語だ、それは」
榊が訳のわからない顔をしている。
「リッター八キロしか走らねェのも問題だ。おかげで金ぶっとんじまった。１１００Ｒには調布まで行かないうちに置いてかれるし、オレは自信なくしたよ」
「ＣＢ１１００Ｒ相手だと、逆輸入車かレーサーか……リッターバイクなんてあれば楽だねえ」
「Ｈ２Ｒ用のパーツ手にいれたる。くそ！」
「メカの話はやめい！」
真田が喚いた。沖田が顔を上げる。

「了解。何の話してたんだ？」
「ＳＣＦって、沖、知ってっか？」
榊が訊く。
「ＳＣＦ？　すごいＣＭフィルムか？」
「あの改造バイクのおっさんの話だと、彼女さらおーとしたの、それらしいんだ」
「正体はなんだ、情報屋」
「聞ーたことないね」
沖田の机の上に散らかしたレポート用紙をまとめながら和田が答えた。
「無茶苦茶、話が飛べば、その手の組織につながらないこともない。えーと、前に米空軍のスパイ組織調べた時の……これだ」
和田が、取り出した一枚のレポート用紙を沖田にほうった。
「プロジェクト・ブルーブック？」
「その筋には有名だけど」
「あっ、知ってる」天文部にちょくちょく顔を出してる榊が声をあげた。「アメリカ空軍のＵＦＯ調査機関…え？」
「そ。一九六八年、ＵＦＯは実在せずとして解散したけど、その後メンバーがそっくりＮＡＳＡ経由でメンフィス計画に編入されてる。以後最高機密扱いで不明だけど、七三年にはメンフィス計画中止の正式発表があった」

「メンフィス計画とやらって何？」
「不明。問題はね、これうわさなんだけど、その手の機関が全部一つの組織に吸収されたらしい」
「それがＳＣＦか？」
「毎朝の外信の先輩にちらっと聞いただけだけどね。そんな巨大組織があるらしいって」
「誰かさんの話以上に、飛躍の激しい話だな」沖田はわざとらしく榊に横目をくれた。「すると何か、ＳＣＦってなＮＡＳＡの親戚筋か」
「わからんゆーとろーが」と和田。「だけどなあ、調べてみると高校生の女の子を誘拐するような組織にゃ見えないんだな、これが。他のＳＣＦか、人違いしてんじゃねー？」

「今度は早かったわあ」
ノブは小声でそうつぶやいて笑おうとした。
午前一時。夜型人間が揃っているここ女子部寄宿舎も、一応の静けさを保っている。
ノブは初めてここに来た時と同じ旅行用のバッグを提げて、宿舎を見上げた。いくつかの顔が頭の中に交錯する。
「これで最後、ね」
ノブは目を閉じた。
「バイ」

口の中で小さくつぶやいてから、ノブは歩き出した。

「しかし……」

駐車場横の、自動車部が航空研、ボート部などと共同で使っている大ガレージ、通称格納庫である。深夜だというのに一カ月以上先の文化祭にかこつけて、沖田は750SSをいじっていた。

付き合わされてる榊があきれ顔をしている。

「どーして、そー執念を燃やすわけ？」

「こいつでなんとかしてCB1100Rぶちぬいてやる」

「いかん、目がすわっとる」

こちらも付き合わされてる真田がつぶやいた。

「前後キャストにしてAVDSとカウル、チャンバーとキャブくらいやれば……」

「南部、今の訳して」これも付き合わされてる南部に、榊が助けを求めた。「訳わからん」

「それで正常だ。沖ィ、レースでもやるつもりか」

「水冷用のパーツがありゃいいんだが……」

どこで手に入れてきたのか、コニーのエアサスをつけながら沖田がいう。

「付き合わされる身にもなってみろ！」真田が喚いた。「みゆきのオールナイト聞き逃すではないか！」

「暗いやつ……そこのレンチとってくれ」
「またバカでかい……」
よっこらしょっと真田が沖田にモンキーレンチをほうった。沖田はそれを片手で受けようとして、目測を誤ったか、コンクリートの床に落としてしまった。
「悪い予感がする」沖田がぼそっとつぶやいた。「キャッチし損なうなんてひさしぶりだ」
「こっちにいない!?」
「わっ出た！」
突然かけられた声に、沖田は反射的に飛びのいてレンチを拾いざま構えた。
「つばさ！　こんな真夜中に何の用だ」
「別にデートしに来たわけじゃないわよ」
ジョギパンにTシャツという、この季節の典型的な寮生姿のつばさが格納庫を見回した。
「いないようね」
「人捜しかい？」
CBのメインジェットを交換していた南部が立ち上がる。よせばいいのに沖田が言う。
「男に逃げられた」
途端につばさはサンダルを蹴り飛ばして沖田にヒットさせた。
「ノブが消えたんだって」
「ノブ？……小牧？」

「いないんでしょ。他あたってみる」
「付き合う」
榊が立ち上がった。片足飛びでサンダルをとりにきたつばさが、
「あたしゃ学校の中覗いてみるから、表頼むわ」
「トイレとかでねーの？」
「荷物持ってトイレ行くと思う？」
「荷物がない？」沖田がサスペンションのボルトを締めはじめた。「となると、悪い予感あたっちゃったかね」
「とにかく探して」

「こんな時間にどこ行こーってんだ」
自転車置場から愛用のアラヤのMTB（マウンテン・バイク）を引っ張り出した榊は、通用門から出ようとして一度自転車をとめた。
「なんだ？」
何かの轟音が空の彼方から聞こえてくる。
「……うそ!?」
星のきらめく夜空をバックに、見事な三機編隊を組んだヘリコプター軍団が飛んでいた。
「また墜落するんじゃないだろーねえ」

いかにもヘリという感じの丸っこいのが一つ、左右にはダーツのような細身の機体に申し訳程度の翼をつけた鋭角的なヘリがついている。見る人が見ればわかる、ベルUH－1イロコイとシーコブラ。

「ターゲット視認」
暗視（ノクト）ビジョンを装着した、イロコイのナビゲーターが言った。
「0時の方向、三〇〇メートル」
「作戦開始」
キャビンのチーフの命令で、パイロットは急降下を開始した。残りのシーコブラは空中で待機している。

「軍用ヘリ!?」
一度外に出た沖田が顔色を変えた。しかも一機は降下している。沖田はあわてて格納庫にとって返した。
「南部、バイク出すぞ！」
「そらかまわんが、どした？」
「昼間の続きらしい。今度は軍用ヘリだ！」
「ぬあにい!?」

沖田が750SSのエンジンを力一杯キックする。三気筒は別々に目覚めた。
「ワイも借りっぞ」
言いながら真田は、南部が普段使っているRZ350Rのエンジンをキックした。
「こら無免許！」
「榊じゃないわい！」
「先行ってるぞ！」
格納庫の中からエンジンを全開にして、沖田が飛び出した。
「わっ待て！」

悲鳴が聞こえた瞬間、榊はMTBのペダルを力一杯ふみこんでいた。
「ぬわ!?」
楡通(エルム)りに出てたまげる。ノブがゲリラみたいな男に腕と口をつかまれてもがいているのはまだわかるとして、その背後ではヘリが一台、ローターを振り回したまま着陸していた。
「ブルーサンダーかよ。んなろ！」
榊は後先を考えずに、自転車ごとヘリへまっすぐ突っ込んだ。
「うわっ」「キャッ」
「逃げろ！」
――榊くん！

もつれた腕の間からノブが榊を認めた。頭の中で何かがスパークしかける。
「構わん、飛べ！」
数名がもつれあってるキャビンの中から、コクピットへ誰かが叫んだ、続けてサイレンサー付きピストルの鈍い発射音が二つ聞こえた。
「う……」
肩へチクリとかすかな痛みを感じるなり、全身がしびれていく。麻酔弾を撃ちこまれたらしい。
上昇するヘリコプターの中でぐったりと眠りこんだ二人を見下ろして、日系のチーフが言った。
「一応は作戦終了だが、余計なのがまじってしまった」
ナビゲーターがごろんと榊を転がして顔を見た。
「まだガキだ……チーフ、どうします？」
「着陸しているヒマはない。どこからあのレッドバグが出てくるかわからん。予定通りカサンドラへ飛べ！」
「くっそお！」
上昇したヘリコプターの真下にブレーキングターンをかけた沖田が、イロコイの腹をにらみつけた。
「遅かりし……」

続けて来た真田が、かぶっているフルフェイスヘルメットのシールドを上げてつぶやいた。沖田は二スト三気筒のエンジンをふかした。

「どこへ行くつもりかはしらないが……」アクセルターンでバイクの向きをヘリに合わせる。

「陸(おか)の上走ってる限りは見逃しゃしねェぞ」

「沖田、ヘル！」

真田が南部から預かってきた沖田のヘルメットを投げた。走り出していた沖田が片手でそれを受け止める。自慢のジェット戦闘機用のヘルメットである。

「真田！」

沖田が叫ぶ。楡(エルム)通りから脇道に入って、低空で編隊飛行をはじめたヘリを追いかけて加速する。

「危(やば)いと思ったら後からまともな道で来い。素人にゃ、ヘリコプターの尾行なんか無理だ」

「十三代目戸沢白雲斎をなめるでない」

RZRでついてきた真田が喚き返す。

「お前一人にえー格好させっか！」

ベルUH－1イロコイの最高速度は時速二六〇キロに達する。もしこの速度で飛べば、たとえカンナム用のモンスターレーシングカーをもってしても、空中対市街地では追いつくことはできない。

沖田駆る750SSの最高速度は二〇〇キロ以上、真田操るRZ350Rの最高速度も南部お得意の改造で二〇〇キロは出るはずだが、イロコイには遠く及ぶべくもない。ましてや、追跡など不可能である。

道は選べなかった。信号無視はもちろんのこと、四車線の国道から自転車も通らない私道まで走って、沖田と真田は追跡を続けた。

そしてここにもう一人、不可能を承知でヘリの追跡をする男がいた。平沢である。

「低空飛行でスピード出せないってのが不幸中の幸いか……」

今夜の平沢は、愛用のクラシックオープンスポーツカー、モーガンプラス8に乗っていた。ダッシュボードのTVスクリーンには追跡用のレーダーが道路地図に重ねられて映っている。

「それでも平均は百二、三十か。きついな」

レーダーの有効半径はいいとこ十五キロである。その範囲からヘリを逃すわけにはいかない。

「しかし、まずったな」

時速二〇〇キロをオーバーする速度で川崎街道をとばしながら平沢はつぶやいた。

「まさかあんな派手な手を使うとは……」

まる一日剃(そ)っていないためザラついてきた顎(あご)をなでる。

「このままさらわれたら仕事がパーだ。逃がしてたまるか」

ACT・4　カサンドラ狂騒曲

1

横須賀港、臨海公園。
肩で息をしながら、沖田が遊歩道ギリギリに横滑りさせて750SSを停めた。遠い海面をにらみつける。
あとから真田が急ブレーキでRZ350Rを停めた。こちらも息を切らしながら、
「例の奴は？」
「あそこだ」視線を動かさずに沖田が言った。「潜水艦らしい」
「せんすいかんー!?」
沖に停泊しているらしいが、巨大な司令塔らしいものがぼんやり見えるだけである。
「どこのだよ！」
「アメリカ海軍しかねェな」

「自衛隊じゃないの!?」
「日本にゃ、あんな大型艦はねェ。……帰るぞ真田」
「え!?」
ぎょっとして、真田は沖田の顔を見た。
「榊と彼女あの中だろ、見捨てんのか!?」
「だからだよ」めんどくさそうに沖田がバイクをUターンさせた。「今のままじゃ何もできねェ。一度帰って作戦練る」
「あの潜水艦がいつまでもここに停泊してるとは思えんのだが……」
「エモノ一つないのになぐりこみできるか!?　帰ってから和田経由でマスコミ沙汰にしてもいいし……」
二台のバイクは、来た時と対照的にゆっくり走り出した。

「よりによってえらいもん持ち出しやがった」
モーガンの運転席で、スターライトスコープを目にあてた平沢がつぶやいた。
「SCF原潜アンドロメダ級……太平洋にいるのはカサンドラかナウシカか……あの娘(こ)があれを出すほどの大物だったとはね」
スコープをダッシュボードにほうりこみ、平沢は再び走り出した。国道に出る途中で二台のオートバイを抜いて、高速道路へ向かう。

「ん？」
沖田が目をこらした。追い越していったのは日本では珍しいモーガンである。しかも運転者の横顔に見覚えがあった。
「真田、先帰ってアクアラング調達の準備しといてくれ」
「あや、沖は？」
「前の車尾けてから帰る」
「に？」
「運転してたの、リンカーンにマグナム撃ったお兄さんだぜ」
言いざま沖田は真田を置き去りにして加速した。

「こいつだな」
新宿、平沢探偵事務所。戻ってくるなり資料をひっくりかえしはじめた平沢は、ファイルの中から目的のデータをみつけ出していた。
「SCF原潜カサンドラ。アンドロメダ級四番艦。日本近辺に出ばって来るならこいつだ。四年前フィラデルフィア造船所で建造、一昨年就航、迎撃型潜水艦。VTOL戦闘機十五、CF－22が二十機他……潜水空母だねこれは。武装は核ミサイル、長距離狙撃用レーザー他多数、おーこわ。全長三五〇メートル、基準排水量八万トン、限界潜航深度一〇〇〇メートル。……いつ見ても非現実的なデータだよ」

平沢はソファでしばらくファイルをながめていたが、そのうちそれをデスクへほうって足をテーブルに上げた。
「助け出すなら今のうちだが、原潜の中から人を助け出すなんてことは……」
無意識にタバコを取り出す。しばらく天井をにらんで考えていたが、やがて平沢はデスクのプッシュホンに手を伸ばした。受話器をとると、その手でボタンを押しはじめる。

沖田が国立の星南高校に戻ってきたのは、一時間目の授業がはじまってからだった。結局一晩乗りまわした750SSを格納庫に入れて、重い足取りで宿舎へ向かう。
405号室には、先に戻ったはずの真田がそのままの服装でひっくりかえっていた。
「オラ、真田起きろ」
ヘルメットを二段ベッドにほうり上げた沖田が、寝ている真田の耳元で喚く。
「……ああ？」
「二時間目教室で対策会議。起きろ」
「……ねむい」
制服のスラックスにはきかえながら沖田が、
「授業中の居眠りはお前の特技だろうが」
「るさいのお」ぶつぶついいながら真田が起き出す。「今何時だよ。まだ十時にもなってないじゃないか、ろくに寝とらんぜえ」

「寝てりゃ上等だ。完徹だオレは」
「沖田は特別だ」
ぶつぶついいながら真田がカバンに教科書とノートを詰めこむ。
「途中で何か飲んでこう」
「賛成」

「あ、生きてた」
一時間目の休み時間に教室に入ってきた沖田と真田に、南部はマンガ本から顔を上げた。
「無事？」
「無事だよ。あー、南部」沖田が自分の席に腰をおろしながら、「おまえ、もし潜水艦に忍びこめってったら、どーする？」
「んー、潜水艦に忍びこむだ？」
南部がゆっくりと沖田の顔を見た。
「そりは新手の冗談かや？」
「一応本気だ。ポラリスか、それ以上のやつに……」
「ちょっと待てちょっと」南部が沖田の机まで来た。「いったい何やるつもりだあ？　ヘリコプター追っかけてったんじゃなかったっけ？」
「そのヘリがばかでかい潜水艦に降りたの。さあ、どーする」

「どーするって言われてもなあ」
南部が考えこんでしまう。沖田は今度は和田に声をかけた。
「調べもの頼まー。これだ」
沖田がポケットからメモ帳を出して一枚破り、やってきた和田に渡す。
「自動車のナンバーと、住所？」
「車の持ち主と住人は同一人物だと思う。何でもいい、ありったけ教えてくれ」
「いきなり言われても困るけど……」
「情報屋だろ、ブンヤ志望」
「何やるつもりさ」
「榊と、女子部の小牧ノブって娘がまとめてさらわれたの」
自分の席でさっさと居眠りを始めた真田を横目でにらみながら、沖田が説明した。和田はぶったまげた。
「誘拐？　営利誘拐か？」
「わかるか！　だけど……」
「引き受けた。後の授業の代返頼む。夜までには戻る」行きかけた和田が立ち止まった。メモをひらひらさせる。「で、これ犯人？」
「じゃないとは思うが、いっつも出てくんだよ、そいつ」
「わかった」

和田が教室から飛び出していった。
「榊の代返やった？」
沖田が考えこんでいる南部に訊いた。
「病欠届、保健のセンセ拝み倒して出しといた。長欠にしときゃよかったな。女子部も鳴海女史が何とかしてるはずだ。警察には？」
「あそこ好きじゃねェ」
「潜水艦は浮上して停泊中のやつか？」
「一応そのつもりだが……」

「どっこ行っくの、わーだ君？」
私服で学校から出ようとした時、和田は後方から声をかけられた。
「そ、その声は……、へ、編集長……」
鳴海つばさが門柱にもたれて腕を組んでいた。
「沖、戻ったんでしょ。結果くらい教えなさい」
「まずい……のにみつかった……編集長二時間目は？」
「あいつがバイクで戻ったの見えたから、ぬけてきた。あたしにも知る権利あると思うけどな」
「こっちだって知ってるわけじゃ……」
新聞部のやとわれ部員（ライター）の和田としては、編集長のつばさには逆らえない。仕方なく歩き出しな

から、和田はつばさに沖田から頼まれたことを話した。
「ふーん。で、どーするつもり？」
「とりあえず新宿区役所と陸運局……」
「品川ナンバーね」スリまがいの手先で和田からとったメモを見たつばさがうなずいた。「車の方やったげる。そっちどれくらいかかる？」
「え、あ、そー？　楽は楽だけど……一時間あれば何とか」
「じゃ、新宿で待ち合わせね」

昼休み、学食で南部らヒマ人集めて作戦を練っていた沖田は、いるはずのない姉からの電話で事務室に呼び出された。誰からの電話かいなと首をひねりながら、沖田は事務室の窓口で事務員から受話器を受け取った。
「はい、沖田ですが」
『元気？』
ぞぞーと背筋を凍らせて、沖田は気がついた。
「て、てめー、つばさ！　何の用だこの……」
『そこで喚いて大丈夫？　ならいいんだけど』
「……何の用だよ」
『あたしゃ、今新宿でね。これから平沢探偵事務所になぐりこみ』

「どっからその話聞きやがった。……和田だな。たらしこんだのか、このヤロー」
『たらしこんだとは何事よ！』
新宿西口の喫茶店ラムのカウンターのカード電話の前で、あたりかまわずにつばさがどなり返した。隣の和田が、
「そーだ、たらしこまれたんだ」
『バカ言ってないで戻って来い。調べたんなら相手がどんな奴かわかってんだろが』
「たかが私立探偵でしょ。わってるわよ、そんなの」
『でかいバイク乗りまわして、マグナム片手撃ちするんだぞ。いくらてめーらでも歯のたつ男じゃない』
「少佐だってマグナム片手で撃つわよ。教えるの教えないの!?」
『教えるかバカ！』
乱暴に電話が切れた。つばさがぶつぶつ文句言いながら受話器を置く。

「ひょーっほっほっほ」
沖田が下品に笑いころげている。
「振られてやがんのハーッ不在だって」
「わるかったーねえ」
その前でぶすーっとしているつばさ。

「場所はみつけたんだから……」
「サウザンドなんとかいう喫茶店の二階だろ、それくらい割れとるわい」
「じゃ、資料いらないね。捨てる？」
途端に沖田が笑いをやめた。
「苦労したんだけど、ムダだった？」
「和田！」
つばさから顔をはずさずに沖田が呼んだ。
「へーい、わりィ」ベッドに腰かけてた和田が片手で沖田を拝む。「全部編集長にとられた。平部員ってつらいの」
「うふふ」
瞬時にして立場が逆転する。
夜の405号室。名物〝つばさと沖田のどつき漫才〟を特等席で見物しているのは和田と真田である。
平沢の事務所に行ってみるといって沖田を仰天させたつばさは、平沢不在のためあえなく戻ってきた。が今度は、沖田と真田が学校から消えており、つばさがやっと二人をつかまえたのが消灯寸前の十一時である。
「……しゃあねえな」沖田が両手を上げた。「この際、てめェと遊んでるヒマない。悪かったよ」
「そーそー。はじめっから素直にしてればいいのにさ」

「く……く……」
「耐えろよ、耐えるのじゃ沖田」
と真田。つばさはメモの束をひらひらさせた。
「で!?」
「平沢千明、二十五歳」
「ちあきだって」また沖田が笑い出した。「あの兄ちゃん、そんな名前かい」
つばさはかまわずに続ける。
「国籍日本。ただし四歳でアメリカに行って十八までそこにいたあと、世界中飛びまわってる。中東、中南米、アフリカ……」
「やばい所だらけだな。あの探偵、もとは傭兵か?」
「似たようなものね。フリーの、多分、工作員」
「ほーか」
「でね」つばさが一枚のメモを出した。「こんなの役に立つ?」
「なんだ?」
「あの探偵さん意外にドジでね、戸締まりしてなかったの」
「一応止めた」と和田があさっての方向を向く。「やめろってのに不法侵入……」
「やったのか!?」沖田が思わず腰を浮かす。「失敗して警察ひっぱられりゃよかったのに」
「でね、テーブルに置いてあったデータ写して来たんだけど」

「よくばれなかったもんだ。何とってきた？」
「よー、アクアラング調達できたぜ」
ボンベその他を抱えた南部が、４０５号室のドアを開けた。
「中古だけど十分つかえる……あれ？」
沖田ら四人のいる部屋の中は妙にシーンとしていた。
「つばさまでいる。何があったんだ？」
「潜水艦の正体わーったぜ」
深刻な顔でつばさのメモを見ていた沖田が、メモを南部へ投げた。ボンベ二本を床に転がして受け取った南部が、メモを見て口笛を吹いた。沖田がうんざりしたように、
「気違いじみたサイズのふねだ」
「原潜カサンドラ？　これか、忍びこむ予定の潜水艦て？」
「らしい」
「アメリカの原子力空母の全長って、どれくらいあった？」
「三三〇ちょいだ。潜水艦はオハイオ級（クラス）で一七〇メートル」
「香典ははずんでやるからな」南部はあきらめ顔で手を振った。
「明日の晩だ」
「決行って何よ？」
「決行はいつだ」

「あれ、言ってなかったっけ」沖田がとぼけた。「この潜水艦に榊とノブちゃんをさらったヘリが降りたんでね、取り返しに行くの」
「うっそー」
つばさが両のこぶしを口にあてた。
「残念だけどホント。早くしないと潜水艦出てっちゃうからね」

2

「といったその夜に出てくんだかんなー」
横須賀の波止場に停めた750SSのタンデムシートから、リュック背負って降り立った真田がぼやく。
「こーでもしないと、他の連中が来るだろ」
沖田が目立たないように倉庫の陰にSSを入れながら言った。
「訳のわからん組織相手にするんだ、おもしろがってまぜろくらい言い出すぞ」
「だけどなー」倉庫の陰でリュックと荷物を開きながら真田が言う。「どーせ今宵は徹夜になるだろ。寝だめしとくべきだった」
「エモノは？」
「あるよ。けど最新兵器にどれだけ歯が立つか……」

できれば拳銃くらい欲しかったが、手に入るわけもない。放課後駆け回って集めた忍び込み用七つ道具入りの袋を真田が出した。

「中に入っちまえば、こっちのもんだ」

アクアラング用のボンベとマウスピースを用意して、沖田が上着をぬぎはじめる。

「お、寒。道具は？」

「あるよ。けど、ジェームズ・ボンドにくらべて役不足だの」

「レーザーだの毒ガスだの手に入れてるほど資金がない」

ボンベを背負い、海パン姿になった沖田が立ち上がった。

「行くぞ」

メガネをはずし、服や脱出道具を入れたビニールの口をしっかり閉じる。

「あいよ」

真田が足びれをぴたぴたさせながら歩き出した。暗い水面を覗きこむ。

「うへ、水が緑色してる。汚ねー」

「東京湾だぜ、ここ」

沖田が水中メガネをかけて、水音がしないように水面におりた。

「……ったく気持ちが悪い」ボンベを使わずにのんびり泳ぎながら真田が言った。「帰ったらシャワー一番」

「どーせなら黙ってろ」と沖田。「カサンドラとかいう原潜は、夜間だけの浮上停泊のはずだ。

多分ソナーやレーダー動かしてる」
「ソナーって何だ？」
「うーんと性能のいいマイク」
「あっそ」
遠くを、伊豆七島へ行くらしい定期船が灯火をつけて航行していく。波が二人をゆらした。
遠く前方に、気をつけなければ見過ごしてしまうような低い船体の潜水艦が浮上している。
「カサンドラか……」沖田は低い声でつぶやいた。「トロイの木馬のヒロインだったか。真田！」
「あいよ」
「潜水開始だ。いいか、息は深くゆっくり吸わないとすぐ空気がなくなるぞ」
「合点承知」
「GO！」

「起きて、ねえ……早く起きてったらあ」
「うん？」
女の子に起こされる夢を見ていた榊は、それが現実の声であることに気づいてはっと目覚めた。真っ先にノブの、どアップが目に入る。
「よかった、大丈夫？」
「うへ」

焦点（ピント）を合わせなければならないほどの近距離の美少女に、榊はあわてて跳ね起きた。
「ここどこ？　なんでまた」
寝覚めの悪いのと現状認識能力不足のために、榊は頭を混乱させている。
「わからない」
四畳半くらいの白い部屋である。天井に無機的な間接照明があるくらいで殺風景この上ない。
「ごめんなさい」榊のわきに座りこんだノブが首を落とした。「巻きこんじゃって」
榊は肩をすくめて溜め息をついた。
「いいけどね……」
「ごめん」
「いいって」榊は立ち上がった。「気にすんな。それより逃げよ」
「逃げる？　逃げられるの？」
「やるだけやってみよー」
歩き出した榊が部屋のすみで立ち止まった。
「これは本格的だ」
「なに？」
「見てよ、これ」榊は天井のすみを指した。「やだね、全部覗かれてるよ」
「カメラ……なの？」
「それにマイク。せっかく二人きりになれたってのにヤボだねー」

「やだー」
ノブが少し笑った。その時だった。
『カサンドラへようこそ』
いきなりスピーカーから女の声が聞こえた。二人がぎくっとして声のした方向を見る。空気の抜けるような音がすると、それまで壁だと思っていた所が分厚いドアになって開いていた。
「艦長（キャプテン）とドクターがお待ちです」
榊とノブは顔を見合わせた。外にいたのは淀（よど）みのない日本語を話す金髪女性だった。
「キャプテンにドクター？　おたく、何に誘拐されたの？」
あわててノブがぷるぷると首を振る。
「知らない、しらない」
「どうぞ」
きれいなブロンドが部屋の外へ二人を招く。
外には、メカニックな通路と分厚い区画ハッチが続いていた。
床は滑り止めのカーペットのようなものでおおわれている。
「どうぞこちらへ」
猫みたいにしなやかな身のこなしで、ブロンドが先に立つ。突起部分はラバーで保護され、
ったまま喚き出した。榊は一度頭を振ると、その場に立
「てめーら何者だ、どーしてオレらを誘拐した？　さあ答えろ、ここはどこだ？」

「お急ぎ下さい」
少し先で立ち止まったブロンドが、聞こえていないように繰り返した。
「んのやろ」
頭にきた榊は身を低くしてブロンドに突進した。
「ひ！」
ノブが小さな悲鳴をあげた。榊は訳のわからないうちにブロンドに投げ飛ばされていた。
「あた……」
クッションで覆われたパイプにぶつかって、床にしたたか尻をぶつけた榊が顔をしかめる。
「お急ぎ下さい。艦長（キャプテン）が待っています」
投げた姿勢も見せず、再びブロンドが歩き出す。ノブが駆け寄ってきた。
「大丈夫？」
「大丈夫……ざまないね」
痛くないふりをして榊が立つ。

「でけー」
目立たないように立ち泳ぎしながら、至近距離からミディアムブルーの巨大潜水艦を見上げた真田がつぶやいた。
低い船体と司令塔を水上に出しているだけで、イルミネーション一つ点（つ）けずに夜空に化け物じ

みたシルエットを浮かび上がらせている、認識番号も書いていない巨船。後尾は遠すぎて見えない。

沖田が、上がるぞと言うように潜水艦へ向けて親指を立てた。甲板上から入るところがないか目をこらしてみる。

「……！」

誰もいないと思っていた艦上に、人影があった。ライフルらしいものを持った姿はまぎれもない警備兵――。

「やば…」

沖田はあわてて真田をつっついて警備兵の所在を教えた。手真似でゆっくり潜るジェスチャーをする。真田がうなずいて水中に身を沈めた。

沖田は水中メガネだけ海上に出して様子をうかがった。ボンベの空気が上がってきたのを見て真田を蹴とばす。

「息するなバカ！」

警備兵はのこのこと船首に歩いて来た。

――サーチライトがあるわけでもなし、これだけ暗けりゃ……

そこまで考えた時、沖田は自分の誤りに気がついた。振り向いた警備兵は、小型のメカのついたゴーグルのようなものをつけていた。

――赤外線アイ！　やべー。

はっと身を硬くする。光でなく熱を見る赤外線アイなら、いかに水中にいても見つかってしまう。

んな所でつかまったら水の泡だ――アホなことを考えながら、沖田はゆっくり水中へ沈んだ。警備兵が再び船尾に向かって歩き出した時、沖田はほっと胸をなでおろした。

「行く？」

横に浮上した真田が訊く。

「早いとこ済まそう。心臓に悪い」

水音を立てないようにゆっくり潜水艦に近づく。断面が円に近い流線形の船体のほんの上部だけを洋上に出して浮上しているため、甲板に上がるのにさしたる苦労はなかった。

重いボンベと足ひれ、水中マスクをまとめると、ビニール袋に入れてきた一式を出す。

「たー気持ちわるー」

東京湾の水をタオルでふく余裕なんか見せつつ、真田がおぞましげな声を出した。

「ふいたくらいじゃだめだ、拙者風呂を所望する」

「急げっての。警備兵戻ってくるまであと何分もない」

ダークトーンでまとめた服を手早く着ると、沖田はリュックを背負い、武器代わりのバカでかいモンキーレンチを持った。

「そっちの投げナイフの方が早い。いざって時は頼む」

「まさか実戦に使えるとは思ってなかった」真田が得意の戸隠流一文字手裏剣に視線を落とす。

「ま、行ってみよう」
電波吸収塗料を塗った甲板をスニーカーで走り、ビルほどもある司令塔に張りつく。
「安定翼は水の中か」
「何じゃ？」
「普通の潜水艦ならドアはここらへんについているのだが……」
言いながら沖田が司令塔ぞいに目をこらす。
「どこだ？」
二十メートルも離れたところに、突然光の線が見えた。それがゆっくり広がりはじめる。
「まじィ！」
沖田が素早く甲板に伏せた。光はやがて内部の照明に照らし出された耐圧ハッチになった。誰か出てくる。
「女性兵士（ウェーブ）が潜水艦乗ってんのか!?」
シルエットはスカートをはいていた。中から出てきた警備兵と二言三言英語で何か喋ると、中へひっこむ。警備兵はゴーグルを額から目にさげながら艦尾へ歩いていった。
「何人いやがる？」
動こうと思ったら、次の警備兵が出てきた。こいつもうまい具合に艦尾に向かう。
「行こう」
「バカ、よせ！」

さっと前に出た真田が、司令塔に張りついたまま移動をはじめた。半分開いたままの、金庫室のドアみたいなハッチの中を覗きこむ。

目が慣れるまでにしばらく時間がかかった。内部は隔壁のある通路になっていた。明るい照明に照らされた内部には、見た限り誰もいない。

「ようこそ」

軽快な夏服風の軍服姿の大柄なアメリカ人が、たどたどしい日本語で言った。

「ノブ・コマキとヒロシ・サカキか。とにかく、我々は君たちを歓迎しよう」

「ぬあにが」小声でつぶやいてから、榊は語気を荒くした。「おたくがここのボスか！」

「オルコットだ」

司令官用の執務室らしい。大きなデスクが正面にあり、まわりにはディスプレイや彫刻、風景画までかかっている。機械類がなければ書斎だと思うだろう。

「そちらがドクター・ジルベスター」

「よろしく」

デスクの横の、小柄なマッドサイエンティスト風の白髪メガネが英語であいさつした。

「まあかけたまえ」

入った所でつったっているノブと榊に、オルコットが椅子をすすめた。

「で、何なの？」意地で立ったまま、つとめておさえた声で榊が言った。「おたくらがＳＣＦ？」

「ほう……」オルコットが驚いてみせた。「我々の名前(コードネーム)まで知ってるのか」
「トボケンナ。どーゆー理由であんなアメリカのアクション映画もどきの派手な仕掛けまでしてオレらさらってきたのか、もちろん聞かせてもらえるんでしょうねえ」
「我々は君を誘拐しようとはしていない」変わらぬ口調で、オルコットが答えた。「君は勝手にまぎれこんだのだ」
「は……」
「目的がわたしだけなら彼は関係ないはずでしょう」それまでうつむいていたノブが口を開いた。「彼は帰してあげて下さい」
「そういうわけにもいかんな」
オルコットは太い首を巡らせた。
「経過がどうであれ、彼はSCFの存在を知ってしまっている。まだ我々はその存在を公(おおやけ)にするわけにはいかん」
「話がかみあっとらんな」榊が額にしわを寄せた。「それじゃあ、せめてSCFの正体と誘拐の目的だけでも教えてもらおーか」
その時、デスクの上のインターホンがピーと呼び出し音をたてた。
「ちょっと失礼」
オルコットが片耳用のヘッドホンマイクを耳にあてる。
「なんだ、……なに!? ……わかった」

オルコットはヘッドホンをはなして、榊とノブに目を向けた。
「君の仲間は大したものだな」
「は？」
「見ろ」
それまで壁だと思っていた右の白壁に、突然映像が出た。
「沖と真田!?」
榊が唖然として声を上げた。通路をモニターに捉(とら)えられているのも知らず忍び歩きしているのは、間違いなくあの二人である。
「すまないが協力してほしい」
オルコットが、ワイヤレス型のマイクをインターホンから引き抜いた。
「彼らに、この部屋へ来るよう呼びかけてくれたまえ」
「やだよーだ」榊はあっさり断った。「ご自分でどーぞ」
「対人レーザーや毒ガスを使ってもいいんだがね」ぞっとするようなことを平気な顔でオルコットが言った。「選ぶのは、君にまかせる」
「……」
「どうするかね」
「わあったよ。マイク貸せ」

『おーい、沖やんに真田選手よ、聞こえっかー』
突然通路の中に聞き覚えのある声を聞いた沖田と真田は、びっくりしてあたりを見回してから顔を見合わせた。
「何だ今の？」
『……ったく何しに来たんだよお』
「榊の声だ」
「そう聞こえるけど」
『とっくに見つかってんだよ、おめーら。ぜんぶ、こっちに見えてるし、聞こえんだ』
「榊か!?」
沖田が大声で応えた。どこから聞こえるのかはわからない。
『そだよ。元気？　何やってんの？』
「あのな……」沖田が頭を抱える。「おまえらが誘拐されたんで助けに来てやったんだ、少しは感謝せい」
『ありゃま、そりゃ悪かった。あ？　あー、今ゆーよ。あのな、ここのボスが会いたいってさ』
「情けねェ」と沖田。「小牧さんは無事か」
『無事だよ。今、かわる』
『あ、もしもし……じゃない、聞こえますか？　わたし、です』
「二人とも生きてんだな？」

『はい、大丈夫。だけど本当にどうして？』
「どーやってって訊いてくれ、せめて」沖田はレンチを杖代わりについた。「こんなアホなばれかたするとは思わなかった」

3

「どこの船なわけ、これ」
迎えに来たブロンドの女性乗組員についてとてつもなく長い通路を歩きながら、沖田が訊いた。
すでにかなりの数の乗組員とすれちがっているが、驚いたことに白人から黒人までバラエティに富んでるうえ、軍服を着てるようなのがいない。
「民間の船ってわけじゃないだろうが、これだけ人種がばらけてると……アメリカか？」
「公式にはどこの国の船でもありません」
流暢（りゅうちょう）な日本語で、ブロンドが答えた。
「なら、どこの造船所でこんなデカ物（ブツ）造ったの？」
「船体はロシア、電子機器は日本、原子炉はフランス、内装と組み立てはアメリカです」
「なんつー……」沖田が一瞬絶句した。「じゃ、誰がこんなの造らせた？」
「これ以上の質問は艦長に直接して下さい」

「軍事機密の壁ってわけか」
「軍事ひみつなんぞ、どーでもえーから」真田が口をはさんでくる。「あとでシャワーかなんか貸してもらえん？　気持ち悪い」
「こだわるな、おまえも」
「用意しておきましょう」
「感謝！」
「どうぞ。艦長室です」
耐圧ハッチみたいなドアがすっと開く――や否(いな)や、真田が体を横にして目にも止まらぬ速さで中へ滑りこんだ。正面の一番偉そうなおっさんに見当をつけ、デスクごと飛び越えてバックをとる。手裏剣を逆手にのどもとへつきつけて、
「動かんでよ、ケガすっと痛い」
ほとんど同時に痴漢じみた手つきでブロンドの胸に手を入れた沖田が、ショルダーホルスターのピストルをひきぬいて部屋の中へ飛び込んだ。壁際のスイッチを適当に動かしてドアを閉じる。
「さすが猿飛！」榊が声をあげた。「真田あんたがヒーロー！」
「声援感謝。で榊、この御仁(ごじん)誰や？」
真田がナイフをつきつけてる当人を顎(あご)で指す。オルコットはあわてる様子もない。
「うわさに聞くニンジャかね？　わたしはカサンドラ艦長のオルコットだ」

「艦長さんね」
沖田が安全装置をはずしたルガーを、右手一本でオルコットに向けた。
「なら話が早い。さっそく外へ出させてもらう。ここからでも命令出来るはずだ」
「出るのはかまわんが」まったく動じずに艦長が答えた。「こがどこだかわかっているのかね？」
「え？」
沖田は悪い予感を感じた。まさか……。
艦長が背後の真田に少し首を巡らせた。
「ちょっといいかね？」
「あ？」
艦長はインターホンのボタンを押した。
「ブリッジ？　こちら艦長室だ。現在位置を知らせてくれ」
『現在位置は浦賀水道海面下七〇メートル。二〇ノットで南西へ航行中、異常ありません』
「あちゃー」
沖田が声を上げた。
アメリカ海軍のオハイオ級潜水艦は一万八千トン、ロシア海軍の超大型戦略潜水艦タイフーン級は三万トンといわれている。そしてそれらを遥かに凌ぐ最大排水量十万トンの巨大潜水艦カサンドラは今、海底のヘドロを飛行機雲のように巻きあげつつ、東京湾から太平洋に出ようとして

いた。
「こちらとしても手荒な真似はしたくない」落ち着き払った口調で、艦長が言った。「素直にこのナイフをひっこめてくれないと、火傷(やけど)をすることになるが」
「とにかく浮上してもらおう」真田が手裏剣に力をこめた。「こちとら学生での。金ばっかかけたスパイ映画に付き合ってるほどヒマでないの」
「しかたない」
艦長が言った次の瞬間、天井の隅からかすかなうなりとともに赤い光が一筋のびた。途端に真田がナイフを取り落とす。
「うわっち！」
「レーザー!?」
かすかに金臭い匂いを残して、再び壁の中へ格納される細身のTVカメラのようなメカを見た沖田が叫んだ。
「熱かった。何だ今のは？」
真田が手裏剣を持っていた手を押さえる。艦長が真田の落としたナイフを拾い上げた。
「おもしろいナイフだな。シュリケンという種類のものか？」
それを見て真田はぞっとした。刃の部分が融解して形を失っている。
「攻撃用のレーザー？」
沖田がつぶやいた。ライブの効果に使うレーザー光線ならともかく、金属片を瞬時に溶かすほ

どのレーザーなら、かなりの高電圧が必要になる。
「元来はタバコのライター代わりだがね」
艦長はデスクのシガーボックスから葉巻を一本取り出して、その先を天井の隅に向けた。一瞬だけレーザー光線がきらめくと、葉巻に火がついていた。
「便利なものだろう。ところでオキタ君……といったね、ルガーを返してもらえんか？」
「……」
その時、インターホンのコールがかかった。今度はスピーカーから声が聞こえる。
『お話が終わりでしたら、シャワーの用意ができましたが』
これで東京湾を泳いできた二人は戦意を完全に喪失した。
オルコットがノブに目を向けた。
「ノブ・コマキ――残念だが、今君にここまで来てもらった理由をわたしが話すわけにはいかない」
ノブのこわばった視線が艦長に返ってくる。
「しかし、これだけは約束しよう。我々は君にふさわしい場所をあたえられる」
ノブの肩がびくっと動いた。ゆっくりうつむく。
「君たちについては」艦長が男ども三人に目を移した。「現在、上層部に照会中だ」
「コンクリート詰めなり、銃殺なり、早いとこ決めてもらいたいもんだね」
沖田が人差し指でルガーをくるくる回しながら言った。

「殺しはせん。必要ならとっくにそうしておる」
「どーだか」

「最後のセリフがにくったらしい」
そう言った真田が艦長の口調を真似た。
「――回答が来るまで、艦内では自由に行動してよい。もっともモニターで二十四時間監視されているがね」
「それがどういう意味かわかるか？」
沖田があたりを見回しながら言った。一応の調度品は揃っている、さして広くない一室である。二段ベッド二つに、机、ソファ、棚。狭いビジネスホテルといったところか。
「どーゆー意味って？」
沖田は榊に答えずドアと反対側の壁をじっと見つめた。
「つまりな、好きなようにやってみろ、おまえら程度じゃ何もできまい、わっはっはって訳だ」
「最後の〝わっはっは〟は、どうかと思うが」
「監視装置はあれだけか？」
沖田が正面の壁に組み込まれたレンズやマイクの口を指して言った。
「とりあえずあれだけしか見えないね」
「二十四時間体制か。ノイローゼになるわ」

「いざとなりゃ目隠しでもすりゃいい。……しかしほんと頭くるなー。この船シージャックでもしたろか」
「それいい」と榊。「どうやる？」
「わかるか。いつまで乗せられてるのかわからんが、それまで中うろついて案練るしかねェだろな」
「だけどこの船どこ行くんだ？」
何げなく真田がいった。ノブはふと不吉な胸騒ぎを感じて上を見上げた。
「わかるか」沖田がベッドに体を倒した。「しばらく寝よう」

「結局あの連中行っちゃったわけか……」
同室の三人が揃って病欠で自宅療養中――という言い訳で主人(あるじ)のいなくなった405号室で南部がつぶやいた。和田が、机というよりは物置と化している榊の机の上をひっかき回しながらぼやく。
「届を出すの冷や汗もんだったよお。同室の三人が揃ってだもんなー」
「生きて戻ってくるのかね」
「葬式の準備でもしとくか」
「香典がもったいないわ」言いながら南部がポケットからタバコを引っ張り出した。「ところでつばさのアネゴが何かやってるって？」

「特ダネって騒いで飛び回ってる」と和田が手を出す。「この前行った平沢とかいうの張ってるらしい。あの私立探偵……」

「ヒマちゅーか、アクティブちゅーか」

ガードすべき人間を目の前でかっさらわれた平沢は、なんとかノブを取り戻すべく頭をひねっていた。新宿の探偵事務所には、一両日かけて集めた資料や小道具が散乱している。

「カサンドラに潜り込むしかないか……」

もう何度目になるかしれない同じセリフを平沢は再び繰り返した。潜行中の原潜に潜り込む方法が、そうあるわけがない。

『やはり、アメリカ海軍をひっかけるしかないか』

つぶやくセリフが、そっくりヘッドフォンから流れてくる。階下の喫茶店サウザンド・トルーパーの一画に陣取ったつばさは、前日仕掛けた盗聴マイクが拾う音に一心に耳を傾けていた。目の前のココアはとっくにさめてしまっている。

「意外に役に立たないのね」つばさはつぶやいた。「音だけじゃ何やってるのかわかりゃしない」

しばらくすると、何か活動的な音が聞こえはじめた。どこかへ出掛ける準備をしているらしい。

つばさはココアを飲んで、立ち上がった。代金は伝票が来た時にもう置いてある。

平沢が自動車やバイクで移動するくらいは調査済みである。つばさは外に駐めておいたスクー

ター――通称〝必殺トレーシー〟のエンジンをスタートさせた。
もとはヤマハの125CCのスクーターだが、エンジンをDT一〇〇のものに替えてあるので、ただでさえクラス最速のスクーターがほとんどジャジャ馬になってしまっている。改造に手を貸した南部も、これだけは乗りたくないというキチガイスクーターである。

――えらく初歩的な盗聴マイクだな。
出る用意を始めていくらもしないうちに、平沢はマガジンラックの中からつばさの盗聴マイクをみつけていた。
しばらくマイクをつまんでいた平沢は、思い直して元の場所へマイクを仕掛けなおした。それから、部屋の一方を占領している無線機やビデオ、コンピュータやディスプレイなどと接続してあるコンポステレオに、かねて用意のカセットをセットした。タイトルは「雑音」――部屋の中の雑音ばかり録音した二時間テープである。
平沢はデッキのスイッチを入れたまま、余分な音をたてないように外へ出た。
つばさはスクーターのエンジンをアイドリングさせたまま、じっと盗聴マイクに耳を傾けていた。平沢はまだ中でゴソゴソやっているらしい。

横須賀方面への一般道路を、平沢は幌をかけたモーガンプラス8で走っていた。目的は現在横須賀港に入港中の強襲揚陸艦コロラド。偽造した通行証その他一式が助手席のスーツケースに詰

めてある。そして――。何台か間を置いて、つばさの銀のスクーターがモーガンにつかず離れず尾行していた。

「妙な仕掛けでだまそーなんて甘いのよ。こっちだって素人(しろうと)じゃないんだ」

事もあろうに平沢は堂々とガレージ正面から出て来たのである。もっとも盗聴してる本人が下で待ってるとは思わないのが普通であるが。

「……にしても、どこ行くつもりだあいつ。――まさか基地の中入るつもり!?」

平沢の動向を見ていたつばさが、遠目に平沢のモーガンを見ながらつぶやいた。

「まさかね。でも、それじゃどーしてここまで来たんだろう。やっぱ……」

平沢は本気らしい。基地のそばの道に車を停めて準備をしている気配がある。

「ほお」つばさがスクーターを停めてヘルメットをとった。長めの髪が流れ落ちる。「となれば逃がすわけにはいきませんねえ」

偽造パスであっさりゲートを通過した平沢は、岸壁に横づけされたずんぐりしたコロラドの船体を見上げた。

揚陸艦の後甲板のヘリポートに、シートをかけられたヘリコプターらしきものがある。ベル社が支援攻撃用に開発した新型高速ヘリ、UH－7SBの新型エンジンのテスト用に日本に来た機体である。公称最高速度は可変サイクルジェットエンジンにより四八〇キロ。乗用ヘリに戦闘機の機動性をあたえたといわれる新型機は、メインローターを反転(コントラ)ローターとして二つ揃えてい

た。通称ツタンカーメン。
そして、情報に間違いがなければ、ＳＣＦが同タイプの機体を連絡用に使っているはずだった。
「問題はいかに騒ぎを起こさずにあれをかっぱらうか、だ」
原潜カサンドラは、その巨体を夜明けの太平洋に浮かべていた。西の空はまだ夜の暗さを残しているが、東からはもう太陽が顔を出している。
「どこだ、ここは」
暇つぶしに甲板に上がってきていた沖田がつぶやくと、少し離れた所で双眼鏡を目にあてていた艦長が答えた。
「北緯三〇度、東経一三七度。鳥島の西二〇〇キロといった所だ」
「えらい離れちまったのお」日本のある北へ手をかざす真田。「泳いで帰るつーわけにはいかんか……」
どうしてカサンドラが浮上しているのか、沖田も真田もそんなことは知らない。ただ、居候の待遇で自由行動ができるのをいいことに、朝の散歩がてら甲板上に出てきただけである。
公海上のためか、警備兵はいない。そのかわり司令塔の後ろにあるヘリポートが大きく開かれて、そのまわりで乗組員が何やら作業している。
「しかし気違いじみた船だ」

沖田がもう慣用句になったセリフをはいた。
司令塔の下にあぐらをかいて肘をついた真田が、
「今度は何だ？」
「ヘリポート見てみ。潜水艦なんだから素直にミサイルでも装備しときゃいいものを、戦闘機まで用意してやがる」
ヘリポートの甲板の隙間から、船の中央部あたりにある格納庫が一部分だけ見えた。証明に照らし出されているのはヘリコプターのローターに、戦闘機のものらしい高い尾翼である。
「スーパーシルフでもあるのかね、ん？」
かすかなタービン音に、沖田が水平線へ目を上げた。
「なーんか飛んでんぞー」真田が目をこらす。「ヘリかい？」
「ジェットヘリみたいな音だが……お、速い」
ずんぐりした機影はみるみるうちに近づいてきた。
「ヘリだ」
のんびりつぶやいた沖田が、何か思いついたのか片方の眉を上げた。
「しっかし暑くなりそー」真田が太陽をにらみつける。「南に来てるだけのこたあるの」
「船の中はクーラーがあるぜ」
「わーってら。こんな船でなかったらわざわざ鉄の甲板に出てくるもんか」
「鉄じゃない。フィラメントワウンドプラスチックだ」

「なんでもいいよ。ひと泳ぎすっかなー」
真田は黒に近い濃いブルーの海の色と、見事にコントラストになっている白い波頭をながめていた。沖田がヘリから目を離さずにいう。
「後にしろ」
「へ？」
「真田、彼女どこだ？」
「彼女ってのはおまえがひっかけたブリッジの？　それとも……」
「おまえに、んなこと訊くか！　榊と小牧のノブちゃん、どこにいる？」
「まだ寝てるんでない？」
「探して連れてこい」
「探す!?」それまで海を見ていた真田がびっくりして沖田を見た。「バカみたいにでかいんだぞ、この船」
「急がんと逃げられんぞ」
「しかと承知」
その一言で納得した真田がさっとハッチに駆け出した。
「間に合ったかなー」
上空で空中停止（ホバリング）を始めた見慣れないヘリを見たまま、司令塔にもたれた沖田がつぶやいた。
「着陸するまでに来なかったらアウト……」

『ノブ・コマキさんとヒロシ・サカキさん、至急甲板においで下さい』
普段は英語の艦内放送（インターコム）にいきなり入った日本語を聞いた沖田はものの見事にずっこけた。
『繰り返します、ノブ・コマキさん……』
「あんにゃろ、堂々とインコム使いやがった」
しばらくして、眠そうな榊を先頭に三人が上がってきた。沖田がさっそく真田にくってかかる。
「艦内放送使おーってな、どーゆーつもりだ」
「探してるほどヒマじゃないもんで」
「少しは立場わきまえろ。これからやろーってのに！」
「なにを？」
ふあーっとあくびしながら榊が訊いた。
「ズ・ラ・か・る・の！」
一音節ごとに区切って沖田が喚いた。ノブがやっとわかったって顔をする。
「あー、それで……ね。何やるの？」
「あれ乗っ取る」
沖田が上空のジェットヘリを指した。
「あいかわらずムチャ考えるなー」
「着陸してドアが開いたところで突っ込む。小牧ちゃんがいれば発砲もされないだろう」

「誰があれ運転する？」
真田が例によって手持ちの手裏剣を数えながら言った。
「パイロットおどす。……なに、いざとなればヘリの操縦くらいしてやる」
「いちぬけた」榊がくるっと背を向けた。「沖田操縦のヘリなんぞ危なくて乗ってられるか」
「貴様、命が惜しくないとみえる」
真田の手裏剣をすりとるなり、沖田が榊の背に刃をつきつけた。
「あーこいつ本気（マジ）だ」榊は思わず両手をあげた。「へーへ、やりますよ。やりゃーいーんでしょ」

ばかでかい耐圧ハッチが司令塔のすぐ後ろで船の両側に開き、大型の輸送ヘリでも離着陸できそうなヘリポートが出ている。その上に適当に分散した四人が、いかにもヒマそうな顔で降下してくるジェットヘリを見上げていた。
「しかし見たことのない型だ」
整備員のたむろするそばのコンプレッサーに腰かけた沖田がつぶやいた。
「メインローター（コントラ）に二重反転ペラ使ってるなんて、ラジコンじゃあるまいし。おーお、アメリカ軍マークなんかつけちゃって」
格納式の車輪を出して、ヘリコプターが着陸態勢に入った。ヘリポート上に二重ローターの巻きおこす激しい風がたたきつけられる。ヘリは同心円の中央に、大した修正もせずに一度で着陸を決めた。

ローターの回転が目に見えて落ちてくる。さして大きくない横開きのドアにとりついた整備員の一人が、ドアを開きにかかった。

「せーの！」

沖田がだっと駆け出した。

「どけィ！」

ヘリのドアの所にあらわれたパイロットを突きとばして沖田が機内に飛び込む。内部（キャビン）を見回して武器になりそうなものを探しながら、早口の英語で喚いた。

「ボケてないで早くコクピットへ戻れ。すぐ離陸だ！」

次々に残り三人が駆け込んでくる。ドン尻の真田が力まかせに半開きのドアを閉じた。機内は意外にせまく、乗っていたのもパイロット一人だけらしい。

「てめーぶっ殺されてーか！　すぐ離陸しろ！」

沖田がバイザーをおろしたままのパイロットを怒鳴りつけた。パイロットは蹴とばされて無理にシートに押し込まれると、真田に手裏剣を突きつけられたままエンジンのスロットルを開けた。

「またやりおった」

一部始終を甲板上で見ていた艦長は頭を抱えた。ヘッドフォンからマイクを引き出して、ブリッジに叫ぶ。

「スタンバイ中の戦闘機二、三機出して連れ戻して来い！　必要ならツタンカーメンの撃墜も許可するがケガはさせるな！」

「わりとあっさり成功したね」

窓から、遠ざかるカサンドラを見た榊がいった。真田が、コ・パイ席についてむずかしい顔をしている沖田の肩をたたいた。

「誰だってこんなバカやるとは思わないもんなー、沖田」

「まったく」

聞き覚えのない声がわりこんできた。はっとした全員がパイロットに目をむける。

「これほどムチャやる奴らとは思っていなかった」

「誰だあんた？」

パイロットは、スティックを膝（ひざ）で操作しながらヘルメットをとった。

「あー！」「どっかで見た」「探偵！」

「知り合い？」

ノブがキョトンとして訊く。沖田がうんざりした顔で、

「最近よく出てくるんだよ、こいつ。こんな所まで何しにきた!?」

「仕事でね。詳しい話はあとだ」

ひょいと後ろを見た平沢がいきなりヘリを前のめりに加速した。

「しつこいのが上がってきた。怪我したくなかったらどっかにつかまれ！」
「ヘリで逃げきれるかね？」
備品の双眼鏡で後ろを見た沖田が、キャビンの榊にほいと双眼鏡を投げた。
「対空兵器フル装備のハリアーだ。ま、どーやって逃げるか見せてもらいますか」
「空中戦？」
真田、榊にノブが蒼くなった。
「いっいやだ！」「降りる。停まれえ」「わたしまだ死にたくない」
「甘い！」
平沢がヘリを急旋回させた。後ろでどたばたしていた三人が吹っ飛ばされて窓に張りつくと、その目の前を曳光弾の光を引きながら機銃弾が飛んでいった。
「ウホ……」
横Gのため顔をべったり防弾ガラスに張りつけた榊が目を丸くする。壁に寝返った真田が、
「威嚇射撃だ、今のうち降伏しよう」
「そんな可愛いもんかよ」
コ・パイ席の沖田がのんびり肘をつく。
「本気でエンジン狙ってるぞ」
もう一連射を、ッタンカーメンは今度は左に急旋回してかわす。反対側に体をもっていかれた榊の上に、ノブが落ちてくる。

US NAVY

「むぎゅ」「あ、ごめん……」
続いて急降下。今度は後ろの壁に押しつけられた三人が、やっと作りつけの椅子に手をかけた。その鼻っ先を、右から左へ流れ弾丸(だま)がつきぬけた。右のガラスが弾着のショックで真っ白にひび割れる。
ヘリは海面ギリギリの超低空でジグザグ飛行に入った。その後を追うように機関砲が水柱をたてる。
「頭っ来たぞー」
逆上した真田がキャビンの後ろにあった武器ケースの中をひっかきまわした。イスの背もたれをしっかり握った榊が覗きこむ。
「おまえ、使えんの？」
「こんなもんはな」M16ライフルを出してハッチ式の小窓をこじあけた真田が、斜めに突っ込んできたハリアーにライフルを構えた。「引き金ひきゃいいんだ！」
「怪我だけはするなよ」
沖田のセリフを聞き捨てて、安全装置(マニュアルセフティ)レバーを解除した真田がモデルガンみたいなつもりで引き金をひいた。
「うわ！」
レバー解除のついでに全自動(フルオート)にセットしていたからたまらない。真田はあっという間に反動で銃口を跳ね上げながら、キャビンの反対側に背中をぶつけた。

見物してた沖田が案の定という顔で言う。
「シロートが手ェ出すから」
「やかあしい！　ライフルやめだ。そこにバズーカみたいのあるだろ」
「かえって危険だよ」
榊が止めようとするがまったく聞かない。
一方ハリアーも本気になってきたのか、次々と空対空ミサイルなんぞを撃ちはじめた。
「うわ」
ツタンカーメンはほとんど垂直に機体を倒しながら、急ターンに次ぐターンでなんとか逃れている。
「えーいキリがない」パイロットの平沢が声を上げた。「上昇して振り切るぞ！」
その横で、のったり腕時計をながめていた沖田が目を閉じた。
「時間切れ、残念」
途端にみじめな音をたてて、エンジン出力がなくなる。
「なに!?」
「ガス欠だよ」
言われた平沢が燃料計に目を走らせた。針はE（エンプティ）を振りきり、デジタルもきれいにゼロがならんでいる。
「どっから来たのか知らねェけどさ、燃料補給もしなかったのがミスだな」

「補給もしないうちに飛び込んで来たのは誰だ！」
「おい、オレたちどーなんだよ」
あわてる榊に、沖田は足元を指してみせた。
「墜落」

ACT・5　硫黄海域（サルファー・ゾーン）

1

「まったく」オルコット艦長は顔にたて線を走らせて頭を抱えた。「とんだトラブルメイカーを乗せてしまったようだな」

「どーも」

艦長室のソファにゆったり座った一同が、笑いを押し殺しながらいった。

「しかも、ミスター平沢！」

「イエッサー」

平沢はさっと立ち上がると、わざわざデスクの前まで来て海軍式の敬礼をした。それから艦長に手を出す。

「お名前はかねがねうかがっております。ＳＣＦ潜水艦隊で一、二を争う最終防衛率を記録しておられるとか」

「あの乱十郎氏の御子息だな。この前にヨーロッパで騒ぎをおこしてからの噂は聞いとらんが」
艦長はじろりと平沢をにらみつけてから目をそらした。握手を無視された平沢はその手で、
「一本もらいますよ」
と、シガーボックスから葉巻をぬいて、その先を肩ごしに後ろにむけた。壁からのレーザーが火をつける。
艦長はたまりかねてデスクをたたいた。
「なぜ君が我々にその首をつっこんでくるのだ!?」
「お互い、仕事でね」
葉巻の煙をうまそうにはき出しながら、平沢が答えた。
「なに、今回の仕事はあなたたちに正面切ってたてつこうって話じゃないから、そんな怖い顔しなさんな」
「今回の依頼人は誰だ!?」
艦長が顔を真っ赤にして訊く。平沢はやんわり笑ってみせる。
「悪いが、知らん。それも契約のうちでね、仲介を通して来た仕事なんだ」
「失せろ!」とうとう艦長は喚き出した。「今すぐにでも太平洋の海の底に沈めてやりたいが、それだけはがまんしてやる。いいか、カサンドラをなめると承知せんぞ!」
「おーこわ」
「おまえたちもだ!」

艦長は学生四人をにらんだ。
「以後艦内での行動は慎(つつし)んでもらう。イエローサーチに着くまでは外出禁止だ」
パプア・ニューギニアから千キロほど東進した赤道直下のアレキサス諸島は、世界でも珍しいくらい活発な火山群島である。付近の海は硫黄で黄色に染まり、二十年以上洋上でその形を保った島はないという。
国際法で船舶の航行が禁止されている航行危険海域のため、航法装置を持たない、遠い島の原住民のカヌーでもなければ船が入ってくることもない。いつ火山弾が降り、海が沸騰(ふっとう)するかわからないような海である。無茶をすることで有名なアメリカの調査船でさえ近づかない。世界で最も危険な海域の一つである。
その黄色い海を、慎重に航路を選びつつ、カサンドラはゆっくり進んでいた。
「水温三〇度、地熱、基準より二〇パーセント上昇」
「速度十二、維持」
「C－3からB－4へ進入、サントール・ギョユー通過」
「潜航開始」
宇宙船じみたブリッジの艦長席で、オルコットが命令した。
正面スクリーンが水面下に入ると、映像はコンピューター処理されたワイヤーフレームの海底地形図になった。

「基地入り口（ゲート）確認」
レーダーオペレーターが告げた。
「0時の方向、二〇キロ」
コンピューター映像の一部が、赤く点滅をはじめる。実景では見えない、基地の入り口である。

「しかし、なんつー所だ」
どこからか手に入れたズタ袋に身のまわりの物一式を入れてカサンドラの甲板に上がってきた沖田がつぶやいた。続いて出てきた榊がまわりを見回す。
「スターウォーズや007どころの騒ぎじゃないね」
カサンドラと同じ大きさの船があと二隻は優に入る、海底ドックである。超近代的な造船所を二つ三つまとめた感じの場所で、恐ろしく広い。天井も高く、球場のナイター設備みたいなライトが何セットも輝いている。
「知らされてなきゃ海の中とは思えんの」
真田がほうと目を丸くする。
「夢の話だと思うよ。くそ、カメラでも持って来りゃよかった」
「オールロケでB級映画の二、三本、楽にできるの」
「それいい、貸してもらおー。文化祭の映画、まだカメラ回してないだろ？」

「誰かさんの脚本がまだあがってないからな」横目で榊をにらみながら沖田がいった。「ったく軽薄に、ブームに乗って自主映画つくろーなんて言い出すから」
監視兵に続き、沖田らは水を抜いたドックの、カサンドラの横のキャットウォークにおりた。
「……話題を変えよう。オレらこれからどうなるんだ？」
「ここで釈放とも思えんな」
ノブや、さらにその後ろの監視兵をごっそり引きつれている平沢を見ながら、沖田が言った。
「……となると、アレだ」
「アレ……ですか」
真田が首を平手にひいて白目をむいた。
「沖田、今度は何やんの？　潜水艦かっぱらってトンズラする？」
「そうぽんぽん出てくるかよ。俺は誰かさんと違って現実性のあることしか思いつかないんでね」
「どこがだ、この」
四人は、ドックの入り口に来ていた小型のコミューターに乗せられた。二台目には監視兵を引きつれた平沢が乗り、幅の広い通路を走り出した。
ブリーフィング・ルームのような部屋に、平沢を含めた五人は案内された。簡単な椅子が並んでいる以外は、殺風景で窓一つない。
「ガス室にしちゃつくりがいいな」

沖田が椅子の材質をたしかめるようにたたいてみる。
「何が始まるんだ？」
「さあ」
「探偵さんよ、知ってるんだろ？」さっさと椅子に座った平沢に、沖田が話しかけた。「ここどこだ？」
「太平洋地区のＳＣＦの本拠地さ」
目を閉じた平沢が腕を組んだ。
「見ての通り、特大規模の研究要塞だ。ここらへんは活発な火山島が多くてな、その地熱をエネルギーに使って潜水艦の補給から宇宙連絡までやってる……メナシー島やイエローサーチにもう一度来るとはな」
「詳しいな」と沖田。「それじゃもう一つ、ＳＣＦって何だ？」
「まさかと思うけど、世界征服をたくらむ悪の秘密結社とか……」
「そんなもんじゃない」幾分低い声で、平沢は答えた。「Sol Cosmic Force ……太陽系宇宙軍……超国家規模の宇宙軍だ」
「うちゅうぐん？」
つぶやいてから、榊は強烈な睡魔におそわれた。
「……あれ？」
「しまった！」平沢があわてて立った。「催眠（さいみん）ガス使いやがった！」

無色無臭らしく、どこから噴出しているのかもわからない。
「やっぱ……ガス室じゃねェか……」
大あくびしながら沖田が言った。
よほど強力なガスだったらしい。最後の平沢が眠りに落ちるまで三分もかからなかった。

そしてその日の夜半――。
乗組員がすべて下船し、Aモードの整備態勢に入った超大型原潜カサンドラから全航空機が航空専門の2ndセクションに移されていた。平沢が強襲揚陸艦から持ち出し、燃料不足で海に落ちて回収されたヘリ、ツタンカーメンも修理台に載せられているが、まだ修理は始められていない。
深夜のため休止中のその整備工場で、光度を落とした照明にツタンカーメンが浮かびあがっている。その全開になったスライドドアから一人の人影がするりと飛び降りた。
「どこだ、ここは？」
どうやってか、ヘリに潜り込んできたつばさである。
墜落の際のショックでそれまでの居眠りから目を覚まし、思いきって出ようかとも思ったが、出た途端に捕まってもおもしろくないので、パッキングの効いた荷物用のキャビンで様子をうかがっていた。
「どこなんだここは……」

独りつぶやきながらあたりを見回す。一見して飛行機の工場だが、それ以上のことはわからない。

ヘリで飛んだ距離からして日本からは相当離れているはずである。日本国内としても関東じゃないだろなーなどと考えながら、つばさは歩き出した。

常夜灯程度の照明しかついていない。目に入る表示はすべて英語らしいアルファベットであるところを見ると、やはり外国か。

つばさはライト付きの腕時計を見た。午前二時。

「やっぱり早まりすぎたかなー」

出口らしい方向に、取材道具を入れたバッグを肩にかけて歩き出す。

「どこだか全然わかんないもんねー。欠席届一週間分しか出してないけど、戻れっかなー」

つばさは人気のない工場から、トラックでも通りそうな広いトンネルに出た。

「さしあたりうろついてみっか。地理がわからないと情報(ネタ)の探しようもないし」

酒を飲み過ぎたあとの、体が覚えている不快感で榊は目を覚ました。二日酔いである。

毎度のことながら、もう酒なんか飲まないぞと考えながら、榊は体を起こした。

「よう、起きたか」沖田が声をかけた。「おはよ」

「おはよう……どこだここ？」

「知らんよ……眠らされてほうりこまれたらしい」

「精神病患者用の病室だ」
声のした方を見ると、平沢が壁にもたれて座禅を組んでいた。
さして広い部屋ではない。四畳半に毛がはえた程度の広さしかなく、インテリアの類(たぐい)は一切ない。色はまたも白、全面が弾力のあるウレタンのような材質でおおわれていてドアの場所もわからない。
「壁に突進してもケガしないようになってる。監視装置もあるし、まあ脱出は不可能だな」
「さよか。……あた」
榊が重ーい頭を押さえた。
「二日酔いだろう」
「よくおわかりで」
「催眠ガスにアルコール系の使ったらしい。趣味のいい連中だよ、まったく」
榊は重い頭をめぐらした。真田が安らかに寝息たてて眠ってるが、ノブの姿は見えなかった。
「頭いてー」
「耐えな」こちらも暗い顔してる沖田が言った。「酒には自信があったんだが」
真田が頭を抱えて起きるまでに、そう時間はかからなかった。
「なんなんじゃあー」
今年のゴールデンウイークの馬鹿騒ぎで、前後不覚左右無知の超ド級泥酔状態から翌々日にわたる三日酔いを経験して以来、断酒を公言していた真田が恨めしげな目つきをしている。

「催眠ガスのせいだと」
「催眠ガス……くそ、ここにまた一つ恨みが増えた、覚えてやがれこんにゃろ」
「さて」平沢は高校生三人を見た。「君たちはこれからどうするつもりかね？」
「黙ってたらどうなるのか、知ってから考えよう」
真田は頭を押さえた。
「おとなしくしていれば帰れる」
天井に巧妙にカムフラージュされた監視装置を気にしながら、平沢がいった。沖田が冗談だろうという顔をする。
「ただし、記憶の部分消去の処置をうけてな」
「何、それ？」
「早い話、最近一週間くらいの記憶喪失にされるのさ」
「冗談じゃねえ」
がばと沖田が跳ね起きた。とたんに二日酔いの余波の頭痛に顔をしかめる。
「記憶消去？　断固拒否だ」
「素直に記憶消されようって奴はいるか？」
平沢が訊いた。他の二人もそっぽを向く。
「上出来だ。さて、どうするか……」
「彼女、どうなってるかわかる？」

榊が訊くと、平沢は上を指した。
「？」
「あまりにも非現実的なのでどう説明していいかわからんが、恐らくここからだとルナベースへのシャトルに乗るな」
「ルナベース？」
「月の裏側の有人基地だ」
「……海底基地の次は月基地ね」沖田が天井をうんざりと見上げた。「ここホントに現代の地球かよ」
「探偵さんはなぜここにいるのでしょう」
「仕事だ」平沢は肩をすくめた。「君らの同級生のガードを引き受けたんだよ」
「なんで⁉」
「それが仕事でね」
「依頼人（スポンサー）は……知らないって言ってたっけか。ガードマンねえ」
「じゃ」榊がごろんと床に寝っころがった。「もし彼女が月に連れてかれちゃったら、仕事どーすんの？」
「契約不履行の違約金を払うような経済的余裕はない。仕事をやめるのも主義に反する。となれば、月まで行くしかあるまい」
「どーやって⁉」榊が跳ね起きた。「ＮＡＳＡのスペースシャトル乗っ取ったって、月まで飛べ

ないよ」
「だから、彼女を乗せたシャトルが動き出すまでに、なんとか手を打たねばならん」
「どーだ、探偵さんよ」
壁にもたれて座っていた沖田が頭の後ろで手を組んだ。
「後のことはともかくとして、協力しないか？　こっちもあの潜水艦に自力で忍び込んだくらいの腕はあるが」
「巻きこまれたんじゃなかったのか」
平沢が三人を見た。沖田はニヤリとして、
「攪乱戦法のオトリくらいできるぜ」
「はん……素人と一緒に仕事ができるか」
「そんなこと言っていいの？」と沖田。「この際味方は多くしといた方が得では。どーせ探偵さんほどの有名人が素直に帰れるはずもない……」
「言われんでもわかっとる！　私が君らを日本に連れて帰る契約でも結ぶのかい？」
「彼女救出のアシスタントに探偵さんが俺たちをやとう契約なんてどーだ？」
沖田が指を三本立てた。
「一人頭こんなもんで」
「ちょっと待て」
いきなり立ち上がった平沢が壁に耳をあてた。

2

「何がどーなっとるのかわからんなー」
つばさは考えこみながらイエローサーチ基地の通路を歩いた。まわりの様子と今までの出来事や情報から考えて、ここがＳＣＦとかいう組織の地下かどこかの軍事目的の基地だろうと推理したまではよかった。
それに、つばさのカンでは、この基地内にあの探偵や小牧と榊、そしてひょっとすると行方不明の沖田と真田もいるかもしれない。
しかし、つばさが目的をもった行動に出られない致命的な理由があった。中の様子がまるっきりわからないのである。規模からして新宿と梅田の地下街を合わせたより広いようだし、その内容ときたら皆目不明である。
「ほーんと、どーなってんだろ」
ウインドーショッピングでもしてるような足取りで、つばさは読めない表示を見上げた。
基地そのものは二十四時間体制で昼も夜もなく活動を続けている。しかし、現在は深夜なのと、最前線の基地ではないため、最低限の機能しか働いていない。つまり、スクランブル要員と監視その他の少人数しか起きていなかった。これがつばさに幸いして見咎(みとが)められずにすんでいる。

訳のわからぬまま気の向くままにうろついているうちに、つばさはやたらメカメカしい機械の並んでいる部屋に入った。

「頭痛おきそうな部屋だな」

偏執狂の部屋みたいに、メーターやゲージ、レバーやダイヤル、スイッチ類が、天井から床までぎっしり壁を埋めている。

「なんだここは？」

つばさは部屋の外に首を出して、ドアの上に書いてあった文字を読んでみた。

「えねーじー……せくちょん…めいんこんとろーる？」

英語は苦手だが、一応の見当はついた。基地内のエネルギー調整室らしい。

「あ、そーだ」

メカの羅列（られつ）を見ているうちに、つばさはろくでもないことを思いついた。このスイッチ類をムチャクチャに動かして、基地内の反応を見てみようというのである。

「2ndセクションの地熱発電システムが異常稼働しています。原因不明」

真っ先に異常に気がついたのは深夜番の総合司令室のオペレーターだった。

「2ndセクション？」当直のチーフが聞きかえした。「あそこはこの時間誰もいないはずだろう？」

「原因出ました」

しばらくキーボードをたたいていたオペレーターがいった。
「２ｎｄセクションのコントロールルームです。誰かが勝手な操作を行った模様……」
「どこの夢遊病者だ、ムチャしおって」
チーフがモニターに映像を出した。コントロール盤に誰かが取りついている。
「寒いからって温度あげるつもりかね。誰だあれは」
インターコムのスイッチを入れて、コントロールルームに回路をつないだ。
「何のつもりか知らんが危険だ。やめてくれ。２ｎｄセクションが爆発するぞ」
モニターに映っていた女性がぎくっとしたようにカメラを見た。と同時にオペレーターが声をあげた。チーフが顔を向けた。
「識別信号なし、未登録。あれ部外者よ！」
「なに!?」
チーフがあわててモニターに目を戻した時、もうそこには誰もいなかった。
「２ｎｄセクション、イエローゾーンに突入。エネルギーシステムが危険状態です。三十分以内に爆発の可能性一四パーセント」
別のオペレーターが伝える。
「２ｎｄセクションに修理班を回せ。全セクションのパトローラーにスクランブル、あの部外者を捕らえろ！」

いきなり英語らしい言葉で話しかけられたつばさは、心臓がのどから出そうになる感覚というものをはじめて味わい、しかる後、すぐ逃げ出した。

「ドジしちゃったなあ、TVカメラみたいのまであった……警備用の機械が動いているくらい当然なんだ」

つばさは盲滅法に走り出した。

「熱源体、フロア32－CからDへ移動！」

ワイヤーフレームの構造図の中を移動していく赤い点から目を離さずに、オペレーターが告げた。点滅を続けながら移動していく赤い点――それがつばさである。

「間違いない、基地の中のエネルギー量が急増している」

平沢は壁から耳を離した。

「この壁の中に伝導パイプでも通してるらしいな。潮時だ」

「何の？」

「そこの二人！」

「は？」

榊と真田が呼ばれた。平沢は天井の一点を指した。

「そこの所に監視カメラとマイクがある。何とかして壊せ」

「あいな。榊、肩貸せ」
「おお」
小柄な真田を肩車して、榊が立ち上がった。平沢に指示された場所をいじりはじめる。
一方平沢は上着をぬぐと、シャツの前を開いた。
「ストリップでも始めるつもりか？」
と、筋肉質の平沢の体をつまんなそうに眺めていた沖田に平沢が声をかける。
「初仕事、やってもらおうか」
「口の中まで身体検査されたんじゃないのか？」
「これが何だかわかるか？」
脇の下に手をつっこんだと思うと、茶色の塊をひっぱり出して沖田に投げた。一見して粘土に見えるそれを握りながら、沖田は答えた。
「プラスチック爆弾!?」
「正解、そいつを正確に四つに分けてくれ」
言いながら、平沢は髪にをもぐりこませた。
「探偵さんアデランスでもお使い？」沖田が訊く。
「なに？」
「髪の毛とみせて点火線だろ？」
「頼んだ仕事は終わったのか」

「あいよ」
沖田がダンゴぐらいの大きさにしたプラスチック爆弾を見せた。ＴＮＴ火薬をプラスチック粘土に練り合わせたものである。そのままでは文字通りパテ以下の代物だが、使い方次第では強力な武器になる。
「おまえら宗教は？」
やっと見つけたドアらしい所へプラスチック爆弾を仕掛けながら平沢が訊いた。
「無神論だぜ、オレは」「家は法華経だが」「迷信くらいなら気にしてもいい」
「このさい何でもいい、監視が動き出すのがなるべく先になるよう祈っててくれ」
平沢は点火線の先をピッと抜いた。
「すみで縮こまってな。一発でドアがぶちぬけなけりゃ、肺の一つくらいの覚悟はしとけ」

司令室のモニターの一つが、脱走を示すＥＳＣＡＰＥのレッドサインの点滅をはじめた。
「昼間カサンドラが連れこんできた平沢の一味か」
チーフは苦い顔をした。オペレーターの一人がチーフに向けて、
「脱走者、４ｔｈセクション方面へ逃亡中。脱出に使われたのは……爆発物です」
チーフは喚いた。
「２ｎｄセクの侵入者との関係は!?」
「不明」

「く……」
一度歯を喰いしばってから、チーフはシートから立ち上がった。
「2nd、4thセクションに集中警備態勢モードⅢを発動！　全通路を封鎖しろ！」
「了解」
非常時の警備態勢モードⅢとは、イエローサーチ基地の各セクションを封鎖して、他ブロックへの影響拡大の防止、あるいは逆に防御とする態勢である。
二つのセクションに高音のサイレンが鳴り始めた。――が、いくらもしないうちに4thセクションの赤外線モニターのスクリーンが突然空白を示し、消えた。
「あ…？」
オペレーターは思わず絶句した。横からモニターを覗きこんだチーフがチッと舌打ちした。
「奴ら、4thの情報ケーブル切りやがった。非常回路へ！　モニターに切り替えろ！」
直ちに司令室のオペレーター全員がモニターの映像に見入った。一人が五つずつ受け持っているディスプレイが五秒間隔で切り替わっていくが、何もない。
「フロア40、スキャン終了、異状なし」
「フロア39、異状ありません」
「フロア35、侵入者いません」
「消えた……」
信じられないという顔で、チーフがメインスクリーンの構造図を見上げた。

「赤外線モニターは」
「反応ありません」
「識別コンピューターには!?」
「反応ありません」
「対人レーダーは、生物探知は」
「すべてクリアーです。非常回路に切り替わる十数秒の間に消滅したとしか……」
「すべてのセンサーの情報によれば、どのフロアにも侵入者は存在していません」

――まわりは完全な闇。光というものが存在しない。
飛び降りそこねて尻を打った榊は、顔をしかめつつ立ち上がり、そして突然暗所恐怖症に襲われた。
「くらいよせまいよこわいよー」
「何を言っとる」
先に下りた平沢が、途中で寄った倉庫からかっぱらってきた小型ライトをバッテリーとつないだ。光が周囲を照らし出す。
「どこだここは」
「イエローサーチの最下層の下だ。床下といった方がわかりやすいかね」
上は金属パネルが複雑に重なり合っている。その下にいくつもの鉄骨が縦横無尽に駆け巡って

おり、下は溶岩質のような洞穴がまわりにひろがっている。先は暗くてどこまであるかわからない。

「地下墓地だねまるで」榊はつぶやいた。「……暗い」

「床下だ？」

「ブロックごとに造られた基地の基底部――基礎工事部分だ。中で働いている連中はこんなのがあるのも知らないだろう」

「だろーなあ」真田がうなずいた。「長居したい所じゃない。物の怪でも出てきそうだ」

せかす平沢の言うままに、エレベーターのドアをこじあけて、シャフトから一番下まで下りて行き、最下部のパネルをはずして飛び降りたらここだったのである。

「歩きながら、これでもかじってろ」

平沢がスティック状の固型食糧を三人にほうった。自分もくわえて、平沢が先に立って歩き出す。沖田がライトを持って行き先を照らしながら訊いた。

「これからは？」

「今度上に出たら、たちどころに監視の網にかかる。すぐに警備システムが動き出すか、警備兵が飛んでくる」

「くわしいね」

「だから、一発勝負に出る」

「2ndセクションより報告」
「つなげ」
『侵入者を捕まえました』
司令室へ警備兵の一人が連絡してきた。
『ガキのくせにあばれるもんで、少々てこずりましたが……』
報告してる当人の顔にもひっかき傷がある。
『日本の中学生（ジュニアハイスクール）のようです』
「適当な所にほうりこんでおけ！」
チーフが直接マイクに喚いた。
「問題は平沢どもだ！　雑魚（ざこ）は後回しでいい！」
『了解しました』
「なんだってのよー！」
訳のわからん英語で喚かれたつばさは必死で抵抗したものの、あっさり取り押さえられてしまった。多分警備兵だろうが、早口で喋り散らすので、シャラップもホールドアップも聞きとれない。
「レディファーストも知らんのか、おまえら！　ライフルがこわくてこんな所乗り込むか！」
両手両足を大男の警備兵につかまれて、どーっと運ばれる。泣こうが喚こうが警備兵は無視である。

「はー」
岩盤の暗がりの中で電気工具一式をひろげてマイクロヘッドホンに耳を傾ける平沢に、三人が感嘆している。
「おたく電気屋にでもなったら？」沖田がいった。「コンピューター回線に携帯電話まぎれこませるなんて並のワザじゃない」
「狂ってるといいたいんだろう」
片目を閉じて、ダイヤルをゆっくり動かしながら平沢が答えた。
「少し静かにしてくれ。目的の回線が見つけにくい。もう一人侵入した奴がいるらしいな」
平沢によれば、現在位置は4thと3rdセクションの境目あたりだそうである。もっとも迷路の如く入り組んだ岩盤と基盤の間を歩きまわるのにライトが手元に一つだけでは、榊たちに方向感覚が残っているはずがない。
しばらく、ヘッドホンからもれる雑音じみた声だけがかすかに聞こえていた。やがて平沢はヘッドホンをはずした。
「作戦は決定した。……聞いてみるか？」
「聞いてみる」
沖田がヘッドホンに手を伸ばす。
「基地内通信（インターコム）だ。英語はわかるか？」

「バカにすんなよ、こちとらアメリカ育ちだい」
沖田がヘッドホンの片方だけを耳にあてた。
「一度しか説明しないからよく聞け。失敗は許さんぞ」
「へーへー」
「小牧は3rdセクションのどこかにいるはずだ。ところがシャトルは2ndセクションからの発進になる。この二つのセクション間の交通機関は、基地内用のモノレールか通路(ストリート)だが、まさか歩いてシャトルまで行くはずはないだろう。モノレールは貨物用と旅客用が二系統ある。ただし今日のシャトルはエンタープライズ型だから、上層の旅客用を使うはずだ。当然警備兵もついているが、彼女専門の学者も一緒のはずだ。ここまでで何か質問は？」
一同声なし。
「モノレールのまわりの警備システムは、セクション間で最も手薄になる。そこでここから時速六〇キロのモノレールに飛び降り、学者先生を人質にとって彼女を取り返す。――以上だ。何か質問は？」
「成功するんけ？」と真田、「ま、やってみませう。ところで沖田どのは何をむずかしい顔をしておられるのかな……と」
真田が、沖田のヘッドホンのあいている側に耳をつけた。やたら早口の英語が聞こえている。
「うわ、FENキライだ」
「探偵さんよ」

沖田が顔をあげた。苦虫をかみつぶしたような顔をしている。
「悪いけど俺、別行動とらせてもらう」
「許さん」平沢があっさり拒否した。「なぜだ？」
「何かもう一人、俺たちと別口の侵入者がいるっていってたろ？　今そいつが捕まったらしくてね、簡単な尋問やってんだが、非常に頭にくる結果が出てやがるんだよお！」
それまでやっと抑えていた沖田が、とうとう喚き出した。
「なんであのバカがこんな所にいやがるんだ。目の前にいたら絞殺して撲殺して虐殺して手ごめにしてやるところだ！」
「なんだ？」「さあ？」
真田と榊が訳のわからない顔をしている。沖田は平沢にたたきつけるようにヘッドホンを返した。
「つばさだ！　あんバカがここに来てとっ捕まってやがんだよ！」
「うそ……」
榊と真田の血の気が失せる。
「なんであやつがこないな所に……」
「こっちが知りたいわ。えーい、ここの連中が奴の息の根止めてくれりゃ万々歳なんだが！」

3

「はたして生きて帰れるのか……」
沖田の後ろに続く真田が自暴自棄につぶやいた。
「現代日本のヒーロー真田の運命や如何に!?　これにて一巻の終わりィ」
「何を口走ってる。静かにしろ！」
基地内に網の目の如く張りめぐらされた通気筒の中である。3rdセクションはダクト内にまで対人レーダーがあるが、もちろんそれを承知の上での行動である。
「黙ってたって見つかっべー」沖田のあとから四つ足で来る真田がわざとなまらせていった。
「同じことだがよー」
「気が散るんだよ。ダクトの中だろーがパイプの中だろーが、そのうち警備兵が出て来るんだから」
「エイリアンだねまるで。後ろから飛びかかって来ねーだろーな」
「そしたら犠牲者はおまえだあ」
「あー沖、そーゆー魂胆(こんたん)でわしを後にしおったな」
「ん……」
いきなり沖田が動きを止めた。

「来たの、か？」
人間のたてる音ではないらしい。低いモーターのような音。
「な……に？」
確実に大きくなってくる、電気モーターのうなり。何かが近づいてくる。
「何の音じゃ？」
「上だ！」
「え？」
「急げ！　上、逃げろ！」
つい今しがた越えたばかりの上下方向へのダクトへあわてて二人がとって返す。一辺が幅一メートルの正方形の、足場もついていない金属製の通気筒である。真田が上へ登り、続いて沖田もダクトに足を突っぱった。
「何じゃいったい」
「見てりゃ、わかる」
沖田の言葉が終わらぬうちに、つい数秒前まで二人のいた通気筒の中をモーター音をたてて何かが通り過ぎた。ドップラー効果で音が数段低くなる。
「ネズミじゃなさそうだ」
と思ったら、またそれが戻ってきて二人の下を高速で通過する。
「何じゃありゃ」

「まさかとは思うがな」ひょいと首だけ下に出した沖田がいった。「とんでもないもん使ってやがる。ありゃ、車輪付きのミサイルだ」

「ミミミサイル!?」

真田が悲鳴をあげた。

「どーせ対人用だから、殺傷能力はやわなもんだろーが……こん中に警備の奴入れると動きが鈍くなるんで、あんなの使ってやがるんだ」

「ミ、ミサイル」

「どっかでコントロールしてるんだろ、ネズミだねまるで」

「おい沖、あの音」真田がわなわなと震えながら別の音が聞こえてきた上を指した。「あれもネズミか?」

「ん、うわ!」

上から飛んでくるというよりは落ちてくるという感じで、さっきと同じような小さなミサイルが見えた。

「ひええ」

二人があわててダクトの両側に飛び降りる。間半髪くらいのタイミングで、一メートル近い葉巻型のミサイルが落ちていく。

「ちょー!」

妙な声とともに飛び上がった真田の下と、とっさに広げた沖田の脚の間を一発目のミサイルが

一直線に通り抜けた。
「し、心臓に悪い」
「んなろ」
沖田は一八〇度向きを変えて、すぐに舞い戻ってくるはずのミサイルに身構えた。
「退がってろ！」
「何やるんじゃ」
前方からうなりをたててミサイルが走ってくる。
「見てやがれ、この」
「うわっ、バカ、よせ、何やる気じゃ」
ぶっ飛んで来たミサイルに、沖田が素早く手を伸ばした。むりやりつかんで持ち上げる。モーターの回転音が負荷を失って急に高くなった。
「死ね、この！」
沖田は体を反転させて、縦坑に磁力タイヤを張りつかせてあがってきた二発目のミサイルに、手持ちの一発目をたたきつけた。
「うわ！」
爆発が四方のダクトを吹き抜ける。とっさに伏せて爆風を避けた沖田がゆっくり起き上がった。
「近接信管は使ってないようだ」

「キチガイ！」爆発のショックで横に頭をぶつけた真田が喚いて声を反響させた。「んな所で爆発なんぞ起こしおって！」
「文句は全部つばさに言え」ダクトを先に進み出した沖田がドスを効かせて言った。「あんバカが手ェ出してこなけりゃ、こんな所うろつかなくてもよかったんだ」

「ダクトミサイルはまたコントロールアウトしました」
司令室のオペレーターが伝えた。
「ダクトミサイルは計四機がコントロールアウトしています。侵入者、未だ健在」
「役に立たん武器だ」チーフが腹立たしげにコンソールをたたいた。「対人レーダーの反応は二人だけか？　脱走したのは四人のはずだ。残り二人は!?」
「どのセクションにも反応ありません」
別のオペレーターが答えた。
「ダクト内の二人の目的は」
「不明です。ミサイルを相手にしているのと、多分、３ｒｄセクションの構造を知らないのでしょう。分析できるほど行動に統一性がありません」
「ミサイルの発射はまだ続けますか？」
オペレーターが訊いた。チーフは少し考えてから答えた。
「この際、多少の被害はやむをえない。侵入者のいるダクト内半径五〇メートルの循環系を停止

させ、ダクトミサイル連続発射。コンマ五秒ごとに十秒続けろ。今度こそ動けないようにしてやる」

軽やかな電子音のチャイムが、ジルベスター博士を思索から現実に引き戻した。3rdセクションの研究室である。

博士はメモとフロッピーの散らばったデスクの上のインターホンに手を伸ばした。

『シャトルへの乗船準備をお願いします』

「もうそんな時間か。眠り姫の様子はどうかね？」

『よく眠っています。催眠剤を追加しましたので、ノブ・コマキが目覚めるのは衛星軌道上になるでしょう』

「わかった。すぐ行く」

『現在イエローサーチ全域にモードⅢの警報が出ていますので、警備兵がおむかえに上がります。シャトルはCHC－73ワルキューレです。良い旅を（ヴォン・ヴォヤージュ）』

「今どこらへんだあ？」

「知るか！　大体ミサイルから逃げてるおかげで、現在位置とっくにわからねーんだよ」

通気筒内を移動する真田と沖田である。

「もうそろそろあのバカの上あたりのはずなんだが、ん？」

「なんじゃ？」
「なんかすごい音がするな」沖田がつぶやく。「連中頭に来て、ダクトん中にＩＣＢＭでも発射したか？」
「なんじゃ、そりゃあ？」
「まずい真田、逃げろ！」
「え？」
沖田は素早く上下左右を見回した。
「さっきのネズミが団体で来るんだ！」
「じょ、じょーだんでしょ？　じゃ、この音、あれの音かよお」
前後から、はっきりと磁力を帯びているらしいタイヤ付きミサイルの音が聞こえてきた。
「先、行こう、先……」
「うわ、前後だけじゃねェ！」
左右上下にもダクトがつながっている六叉路で、ターンしようとした沖田がブレーキ代わりのスライディングをかけた。こともあろうに、ミサイルは左右からも突進してきているらしい。
「ど、どーすんだよ」
「俺が知るか」沖田が四方に視線をとばしながら喚く。「忍者なら消えるくらいのことしてみせろ」
「き、来たァ」

「えーい飛び降りたれ！」
縦坑の中に上下も考えずに沖田が飛び降りた。続いて真田が頭から飛び込んだ。間髪を入れずにミサイルが束になって落ちてくる。

「ったく変な所に閉じこめやがって……」
つばさは着のみ着のまま荷物ごと、ろくな身体検査もされずに物置か倉庫みたいなほこりっぽい部屋に閉じ込められていた。部屋の真ん中にあぐらをかいて、ぶつぶつ文句を言っている。
「フテ寝するベッド一つ置いてないんだから。そりゃ、バストイレ付き用意しろって方が無理にしても、少しくらいはもてなし方考えろってんだ」
壁にパイプが走っているような、地下室みたいな部屋である。
「っかし頭くんなー。あんヤローども、何言ったって無視しやがんだから。どーしてくれよう、ん？」
何かの音に気がついて、つばさは天井を見上げた。
「うわあ！」
天井の通気筒の金網のまわりの枠ごと天井の一部を道連れに、上から何かが落ちてきた。
「えー!?」
両手両足をついて飛び降りた二人の薄汚れた人影は、床を転がるようにして壁に張りついた。
続いて落ちてきた何かの束がすさまじい光と音とともに盛大に爆発する。

「ひ……」
爆風に煽(あお)られたつばさが、突き飛ばされたように何かにぶつかった。背に何かの破片があたる。
きーんとする耳を押さえ、一度息をついてから、つばさは恐るおそる振り向いた。爆煙と砂ぼこりが、もあーっと余波に乗って舞っている。妙にひずんだ誰かの声が聞こえた。
「沖いー、成仏(じょうぶつ)したかあ？」
「死んだ……」
すぐ背中から、二人目の声が聞こえた。煙の向こうに人影がゆらっと立つ。
「おかしな所に出たの」
「え？」
自分の後ろにあるのがもぞもぞと動き出したので、つばさは思わず飛びのいた。何度もまばたきしていると、すぐ目の前に誰かが立ち上がる。二人は同時に声をあげた。
「あー！」
「沖田、なんでこんなとこいんのよ！」
「つばさ、てめえ、よくも人をクッションにしやがって……」
「あいやしばらく、しばらく」ほうっとくとつかみあいのケンカになるので、真田が二人の間に割って入った。「ケンカしてる時じゃなかろー」
「止めるな真田、一度このあばずれ殺さんと気がおさまらん」

「あたしだって、あんたに言いたいこと山ほどあんだからねえ」
真田が大きく息を吸った。
「後にしろー!!」
迫力負けした二人のセリフが瞬間、途切れる。真田は息きらしながら、
「榊たちと合流するのが先だ。わかったら行動開始い！」
「了解。……後で言いたいことがたっぷりある。覚えとけ」
「そっちこそ忘れんなよ、フン」
「さてと」爆発で破壊された部屋を横切って、沖田が半壊したドアに手をかけた。「お……開くぞ」
「外に出んのか？」
沖田は爆発のショックでロックが壊れたらしいドアを開けて外に首だけ出した。
「ダクト通って元の場所戻る自信あるか？」
「ない」
「んじゃ、こっちから行くしかあるまい？　探偵の作戦が成功してることを祈ってな。行くぞ！」

4

「沖田たち、成功したかな」
榊がつぶやいた。
モノレールのトンネルの上で、
広い基地内で長距離用に使われるリニアモーター式のモノレールである。
すでに二台、貨物用の無人カーゴが通過していた。点検用のハッチだけ開けた横で、平沢が
黙々とバズーカを組み立てている。
「さっきのが、時速いくつだって？」
「四〇くらいだ」
「人間用は六〇は出すってんでしょ。飛び降りるタイミングをドジったら？」
「訊かなくてもわかるだろう」
「……つれない人」
榊をほとんど無視したまま、平沢は軌道に顔を出した。２ｎｄセクションへ一方通行の軌道である。インターコムから盗聴した情報が正しければ、ノブとジルベスターを乗せたモノレールはこの軌道を通るはずだった。
「来た」
平沢がつぶやいた。横から榊が覗きこむ。遠くに二つ目のライトが見えた。

「あれ？」
「この時間に他のリニアカーは通らない」平沢が体勢を立てなおした。「決行だ」
「りょーかい」
時速六〇キロは、秒速では一七メートルに近い。こんな所まできて怪我をしたくないと考えながら、榊は身構えた。流線形のリニアカーがレールの上を滑ってくる。
「アーメン」
榊は平沢に突き飛ばされる感じで飛んだ。続いて平沢も飛び降りる。
「うわ」
車体の天井までガラス張りなのでつかまる所がない。榊は着地と同時に、脚をとられて転倒した。
「おちるおちる」
必死に縁に手をかけて体を止める。一方平沢はひざをついて、持ち込んできたポータブルバズーカを天井のガラス越しにリニアカーにつきたてた。
「さあ止まれ。こちとら気が短いんだ」
上を見てあわてる警備兵と老博士、びっくりしているノブが見える。榊はやっと屋根の上に上がってきた。
「止まんないの？」
「そのつもりがないらしい。そこのカバーはずして中のレバー引けば」

バズーカをあてたまま、平沢は屋根の前部中央にある、赤く縁どりされたプラスチックカバーを顎で指した。

「非常ハッチが手動で開く。早く！」

周囲が六〇キロで流れている中で、榊はカバーを跳ねのけて中のレバーを力まかせに引いた。途端にカバーの周囲五十センチ四方くらいがとれて、榊は後ろへ尻もちをついた。一回転して屋根から落ちそうになるのを、ハッチをほうり出してしがみつく。

「中に降りて停止レバー引いてくれ」バズーカと反対の手でM16をかまえた平沢が指示する。

「あれだ」

「あいな」

榊は中へ飛び降りた。唖然としているノブに、「お待たせ。待った？」とか何とか言いながら、天井の停止レバーを引く。

プシューと音をたててリニアカーが停まった。バズーカを肩にかけた平沢が降りてくる。

「スクエアラインのリニアカー483号が停止しました」

司令室。メインシートのチーフはやっと笑みを浮かべた。

「やはりな。平沢の目的がスターボウ計画の小娘なら、必ず手を打ってくるものと思っていたが」

「チーフ！」

別のオペレーターがヘッドホンを片耳にあてたまま叫んだ。
「その平沢から入電です」
「つなげ」
スクリーンに、ひきつったジルベスターの顔が大映しになった。モノレールからステーションに降りたらしい。
『平沢だな。それとも、レッドバッグとお呼びしようか』
「今のチーフはおまえか」
ジルベスターの背中から、ライフルを突きつけたまま平沢が言った。榊はノブにしがみつかれて何となくもじもじしている。警備兵はリニアカーに閉じこめてきた。
「この博士、特殊セクションのシンクタンクじゃナンバー1だな。行方不明になったりすればかなりのダメージだろう」
『見事な手並みだ、レッドバッグ』スクリーンの向こうのチーフが答えた。『要求を聞こうか』
「まずここから日本まで無着陸で飛べる六人乗り以上の飛行機、それに別行動している二人、いや三人の安全の保証、最後に、この件から全面的に手を引いてもらおうか」
『すぐに用意しよう』チーフが答えた。『飛行機だったな。ただし、行き先はバミューダにしてもらおうか』
「なに？」

「うわあ」
その途端、榊が妙な声をあげた。はっとして平沢が振り向く。
「な、なんの冗談だ、これは」
ノブが、榊のこめかみに小型ピストルを押しつけていた。
「帰る気はなくなったの。じゃましないでくれる。余計なことしないで」
「探偵さん、こいつ、ノブじゃなあい」とっさに榊が叫んだ。「あのメカオンチがＰＰＫ扱えるもんか」
「ワナか!?」
「動かないで」
平沢が片手だけでＭ16ライフルを榊に向けた。ノブがピストルのトリガーにかけた指に力をこめる。目の前と横に銃口をつきつけられた榊は、目を見開いたまま動けない。
二つの銃声がほとんど同時に響いた。
「ひ……」
宙にＰＰＫが舞う。ゆっくりと倒れる榊、平沢に生身の攻撃をかけるべく動き出すピストルを飛ばされたノブ、博士に回し蹴りを食らわせ、くるりとストックを持ち替えてライフルを振りおろす平沢。
一瞬の勝負は、実戦経験の多い者の勝利に終わった。ノブはもろにストックを頭にくらって、ゆっくり倒れ込んだ。平沢はライフルを持ち直してヴィジホンに数発たたきこむ。

「ふえ！」榊は大きく溜め息をついた。「マジで死んだかと思った」
「もらさなかっただけ上等だ。立てるか？」
「え、……あかん」榊は耳を押さえた。「耳が死んでる」
「立て！」
平沢が大声を出した。榊は足をがくがくさせながら立ち上がった。
「こいつら、替え玉だ。ガードマン連中があっさりひっこむはずだな。作戦変更だ」

「現在の状況を整理しよう」
沖田が言った。
「この2ndセクションは、今ギンギンの警備態勢下にある。全体に対人レーダー集音マイク、監視カメラに警備兵いっぱい、そこで我々の任務だが、なんとかこのセクションを脱出して榊たちと合流する。何か質問は？」
「はい先生」真田が手を上げた。「どーやって脱出するつもりですか？」
「お前ならどうする？」
「さあ？」
「俺にもわからんね。これだけがっちりした警備網出しぬく方法は思いつかない」
「じゃ、どーするつもり!?」
先程からののったりした問答にしびれを切らしたつばさが喚く。沖田は、じろりとつばさを見

た。
「黙れ元凶」
「元凶とは何だ！」
「またはじめる」真田が頭を抱えた。「こんなことやっとる間にこわい警備兵が来るぞお」
「わあっとるわい！　くくく……行くぞ」
くるりと背を向けて、沖田が歩き出す。その背につばさが、
「どーすんのさ」
「どーにでもなる！　わかってるのはこのまま黙ってたって間に合わんちゅー事だけだ」
しばらく黙って歩いていた沖田は、やがてつぶやいた。
「正攻法で行こう」
「え？」
「ここから一番楽に上に出る方法だ」
「エレベーターでも使うつもり？」
つばさがそう言うと、沖田はあっさりうなずいた。
「無茶言わないでよ。即、見つかるに決まってるじゃない！　閉じ込められたら……」
「頼む、黙ってくれ」
真田がつばさを押さえにかかった。
「スケベ、どこ触ってんの」

「首筋でござる。沖田、勝算あんの？」
「ある」沖田は言い切った。「考えてもみな、探査装置の目をくらまして上までまっすぐ行ける道だぞ」
「目をくらませるかどーかは疑問だが……きっ、来たァ」
背後にサブマシンガンをかかえた警備兵がぞろぞろとあらわれた。
「逃げろ！」
「エレベーターってどこよ！」
「どこだっていい。おら、置いてくぞ」
どんじりの真田のすぐそばを銃弾がかすめた。真田はあわてて全力疾走する。角を曲がった突き当たりに、エレベーター用のターミナルが見えた。
沖田が走りながら天井にプラスチック爆弾を投げた。点火線の先を抜いて点火した爆弾が、天井にぺたんとはりつく。
「さー、急げ」
ターミナルに出た。円形のホールに、通路とエレベータードアが交互に並んでいる。沖田はそのうち偶然開いていたエレベータードアに飛び込んだ。
一ブロックが四十階層もあるセクションの高速エレベーターである。ナンバー式のキーボードを押すと、三人が乗り込んだエレベーターのドアはさっと閉まって、かなりのスピードで上昇を始めた。

「あれだろ、監視モニター？」天井付近のＴＶカメラらしいメカを見上げた真田が言った。「肩車。壊すんだろ」
「ああ、早いとこやってくれ」
つばさは二人がメカを壊している間、デジタルの階数表示を見ていた。数が減っていく。
「……？」
何かに気がついて、つばさは顔を上げた。
それまで一定していた低い電気音が突然聞こえなくなったかと思うと、エレベーター内の三人は軽い浮遊感を覚えた。
「止まった」つばさが沖田に顔を向ける。「ちょっと、やけに落ち着いてるじゃないの」
「バレて止められるくらい計算済みだよ。これからが本番。どこまで上がった、ん？　地下十階、おー上等。いってみよう」

ACT・6　垂直エクスプレス

1

「しっかし思いつかなかったな、エレベーターの縦坑の中、通るとは」
「だろ」先を行く沖田が答えた。「この中なら探査装置もないし、上まで障害もない。空のエレベーターこじあけてオレたちがいないのがばれるまで、少しは時間がかせげる」
「いないって、ばれたら？」
最後尾でエレベーターの縦坑についている保守点検用のはしごを登ってくるつばさが訊く。
「おまえもせっかちな女だな」沖田は見向きもしない。「自分で心配事のネタばかり増やしてると、早く老けるぞ」
「悪かったわねえ。あんたと心中なんか絶対嫌だからさ」
「とどめくらい責任持ってやるよ。……およ」
胸元のペンライトくらいしか明かりのなかった縦坑に、いきなり、下から明るい光がさした。

「警備兵がエレベーターの上に出てやがる」
銃声がして、何か鋭い音をたてて壁をかすめる。
「うっ撃ってきやがった」
「盲撃ちだ、当たりゃしない」
「うっ上はまだか」
「知るか」沖田は横にずれて道を開けた。「先行ってろ。逆襲してく」
「何を？」
沖田の横まで上がってきた真田が訊く。
「プラスチック爆弾を奴らに落としてやんの」
「巻きぞえ喰わないうち、先行ってる」
とたんに足元に何発か弾着した。ひっと首をすくめたつばさが真田に喚く。
「何止まってんの、早く！」
「お達者でー」
ほいほいと上がっていく真田と、一目だけ沖田の手元を覗きこんだつばさを横目で見ながら、沖田はプラスチックに点火線を接続して下で止まっているエレベーターに投げつけた。
誰かの気配を背後に感じた榊が、びくっとして振り向いた。平沢は振り向きもしない。
「遅かったな」

「るせー」
かなり汚れた姿の沖田ら御一行である。
「おどかすなよ」
「このメンバーで3rdセクションの下から脱出してきたんだ、文句言わんでくれ」
「ところで、おたくらは？」
真田があたりを見回す。2ndセクションの屋根裏――メナシー島の岩盤をくりぬいて造ったブロックの最上階の上、天井裏である。
「失敗」情けない顔で、榊が両手を広げた。「偽物つかまされた。おとりだってさ」
「じゃ、どーすんじゃ!?」
「何の話？」
つばさが榊と真田の話にわりこんでくる。榊は肩をすくめて溜め息をついた。
「小牧のノブちゃん救出作戦」
「しまったな」また基地内通信にわりこんでいた平沢がつぶやいた。「あの娘、博士ともどもシャトルに乗り込んじまった」
「シャトルう？」榊が声を上げる。「スペースシャトル!?」
「そう、スペースシャトルだ」
ヘッドホンに耳を傾けたま平沢が答えた。
「ただし垂直発進式じゃない。シャトルを飛ばす時はいつも予備を準備しとくもんだが、今回は

そちらがメインになった」
「水平発進のシャトルなんてあり？」
沖田が訊くと、平沢はうなずいた。
「ワルキューレってコードネームの化けモンがある。成層圏までジェットで上がり、そこでロケットに点火して大気圏出ようってやつだ」
「スターレイカーって、実用になってたっけ」
「知らないしらない」
「行くぞ」
フードをはずし、平沢が立ち上がった。
「何やんだ、降伏か？」
「アホいえ」平沢は歩き出した。「シャトルを乗っ取る」
「乗っ取るー!?」男三人が声をあわせた。「発進間近のシャトルをハイジャックするってのか？正気かよ！」
「ずつーが……」
榊が頭を押さえた。平沢は構わずに言う。
「あのタイプなら対気速度はフルブースト時でマッハ二〇を超える。ミサイルだって追いつけない」
「そりゃマッハ二〇も出るせるよーな飛行機があれば国立はおろか、八王子の山奥にまで帰れる

でしょーよ。けどなあ」沖田が額に手をあてた。「こっちの神経がついていけンわ。えーかげん疲れた」

2ndセクションの三元図の上を、侵入者を示す赤く点滅する光点が動いている。

「奴らシャトルに手を出すつもりか」

チーフはつぶやいた。

「ワルキューレ07の発進を急がせろ。奴らが狙っているのはあれのはずだ！」

そう命令して、チーフはふと疑問を感じた。

「管制システムを目指すわけでなし、かといってワルキューレ07に直接手を出すつもりもないらしい。奴め、何を考えている？」

CHC（コスミックハイパーキャリア）－73ワルキューレ。全長一〇一・四メートル、最大幅六七・九メートル。その正体は一九六〇年代に開発を打ち切られた超高速大型爆撃機、XB－70バルキリーに他ならない。

わずか二機造られただけで爆撃機としての開発を打ち切られたバルキリーは、二号機が事故を装ってメンフィス計画に渡され飛行試験が続行された。そして大気圏再突入可能な大型戦闘母機、空中ミサイル母艦としての開発が決定された。

そしてこれを発展させた、水平発進型としてはSCF現用の宇宙連絡船として最大、最高性能を持つシャトルがCHC－73ワルキューレである。

寸法も大きくなり、ペイロードは実に三百トンという巨大機だが、その形態は初期型であるバ

ルキリーのスタイルのイメージを残していた。

「間に合うのかよ」

弾丸にひょいと首をひっこめて榊が、基地内通路の交叉点に下げられた大時計を指して喚いた。デジタルは六時ジャスト。

「探偵さんよ」撃ち尽くしたM16のカートリッジを素早く入れ替えながら沖田が喚いた。「お目当ての35滑走路とやらはまだ先か!?」

「かなり近いはずだ」後ろ向きにバズーカをぶっ放した平沢が答えた。「だが時間がない！」

幅十メートルはあろうという主通路（ストリート）で、とっくに壊れたコミュニューターをバリケードにしての銃撃戦である。

「時間がないって……どーすんのさ！」

「まともな道を通るのは時間を食いすぎるな。ならば、こちらで道を造るか」

「何でもいい、早くしてくれ」慣れぬライフルを見よう見まねで撃ってる真田が喚く。「肩が死ぬ！」

「少し伏せてろ」

平沢が、3rdセクションで手に入れたプラスチック爆弾を詰めたズタ袋を、力まかせにほうりなげた。十五メートルほど先に着地する。

「耳と目を塞いでろ。床に穴を開ける」

「えー!?」
「バカ、よせ。こんな近くであんな大量の爆弾……」
沖田が言ってるそばから、平沢はズタ袋めがけてバズーカを発射した。
向こう側に散開していた警備兵が逃げ出す間もなく、すさまじい爆風が通路を駆け抜けた。大爆発のあと、奇妙な静けさがあたりを支配する——。
「……こりゃ、耳が完全に再起不能になる……」
榊が耳鳴りを押さえて立ち上がった。
「で何やったの?」
プラスチック爆弾の爆発のあとに、大穴が開いていた。
「あれが近道だ」平沢が立ち上がってホコリを払った。「急げ……もうシャトルが動き出しておかしくない」
「お先」
榊が飛び出して穴に飛び込んだ。
「うわ!」
炭化した床下の構造物が、飛び降りたショックで壊れて穴が開く。危うく下に落ちそうになった榊は、あわてて手近の鉄骨にしがみついた。
足元にくずれた大穴が開く。落ちていった破片が、その下の床に落ちるまでかかった時間からしてかなり高い。榊は泡を吹いて床の上にはいあがった。

「何だよ、この下にあるの!?」
ひょいと覗きこんだ平沢が、開いた穴を見てニヤリと笑った。
「これだ。35滑走路」
「全長五マイルって滑走路が、地下にあんのか!?」
びっくりして沖田が穴に顔を出す。はるか下方に金属パネルらしい床と、一直線に引かれたラインがゆっくり明滅していた。平沢が言った。
「メナシー島の東の崖に出口が口を開けてるはずだ」
穴の底から無気味な轟音が聞こえてきた。
「まずい」
床に突き出た鉄骨にロープを結びつけた平沢が、穴へロープを垂らすなり、それを伝って穴へ降りた。
地下滑走路のすぐ目の前で、白い巨鳥ワルキューレの機首が空中の平沢をねめつけていた。
「遅かったか」
離陸用アフターバーナーの音をたてて、ワルキューレはゆっくり動き出した。全備重量で二〇〇〇トン近い（その大部分は背負ったブースタータンクの液体燃料）巨体が、平沢に迫ってくる。
「動き出しやがった」
長大な機首が近づいてくる。大気圏外までノブを連れていかれたら、取り返す手はない。

「くそ」平沢はくちびるをかんで、上を見上げた。「後頼むぞ！」
穴からキョトンとした四つの顔が見える。機首が足元に近づいてきた。
「探偵どーすんだよ」
「俺か？　俺はな」平沢は足元に近づいてきたワルキューレの巨大な機体をにらみつけた。「こいつに乗って行く！」
平沢は手を放すと、足元を通過しようとするワルキューレの機首へ飛び降りた。
脱出用についているはずの非常ハッチを捜して後ろへ向きなおる。と、そこへ榊が飛び降りてきた。
「なに!?」
「おいてかれてたまるかい」
「ワンマンプレイはなしだ」
沖田が続けて機首に手をついた。
「待てこの！」「やだ一人なんて！」
真田と、やや遅れてつばさまで飛び降りてくる。平沢は思わず喚いた。
「死ぬつもりか。こいつの離陸速度は時速五〇〇キロに近いんだ！」
「おたくも死ぬつもりで飛び降りたんじゃないでしょ」
沖田が太い機首のまわりを見回す。
「どーすんだ？」

「このバカども！　そこに非常脱出用のハッチがあるだろう」
平沢が真田の足元を指した。
「わきのカバーを開けてレバーを引けば手動で開く。急げ！　風で振り落とされるぞ」
言っている間にもワルキューレは、少しずつ滑走スピードを増していく。真田は、ひざをついて英語の説明文やら矢印やらが書きこまれた分厚いカバーを跳ねあげると、中の取っ手を力一杯引っ張った。ワイヤーロープを引けば手動で開く。急げ！　風で振り落とされるぞ」
連動式のハッチが外側へ口を開けて取っ手が五十センチも伸びると、バションと音がして気圧
「エアロックは!?」
風に声を消されないように沖田が叫ぶ。
「大気圏内専用の脱出用ハッチだ、そんなものない。早くもぐりこめ」
真田がハッチから厚い外装を通って機内へ滑り降りた。暗い、軍用機のようなせまい通路である。
「誰もいない、降りてこーい」
地下滑走路のディテールがかなりの速度で流れていた。乱れる髪を幾度もかきあげながら、降りてきたつばさが息をつく。
「とはー」
続いて沖田が降りてくる。
「ええ風だ」「ハッチ閉じるぞ」

榊と、最後の平沢が内側のハンドルを握って通路へ降りるついでにハッチを閉じた。ハンドルを戻すと機外のカバーもワイヤーを巻きもどして閉じられる。

せまい通路は五人の人間であっという間に一杯になった。

「ここはどこだ？」

「コンピュータールームだ。少し前にエアロック、その先にコクピット。後ろへ行けばカーゴルーム。……ん？」

全員が浮遊感を感じた。つばさと真田をかきわけて通路の先へ行った平沢が、宇宙空間用のエアロックの窓から外を覗く。

「離陸した…」

ワルキューレは、その巨体を朝焼けの空と火山群島の間に躍り出していた。ゆるいループを描いてメナシー島から空へ向かって上昇していく。

「コクピットへ行く。こいつをハイジャックするぞ！」

平沢は前に向かって大股で歩き出した。黒で統一されたせまい通路のドアハンドルに手をかける。ロックははかかっていない。

コンバットマグナムのグリップを左手で握った平沢は、コクピットへのドアを一気に開いた。

黒系のコンソールとスクリーンで埋まったコクピットだった。急な傾斜角を持つフロントスクリーンから、噴煙の中を上昇しているのがわかる。

左にメインパイロット、右にコ・パイ、その後ろにナビケーター、他にオペレーター用シート

が四つある。だがメカに埋まっているコクピットの中から振り向いたのは一人だけだった。
「ここまで来たか」
「ジルベスター博士ですな」
言ってから平沢は、他の人間の気配がまったくしないのに気がついた。罠か？
「パイロットはおらんよ」
オペレーター用シートを回転させて振り向いたジルベスターが、片手を上げた。
「見ての通り、自動操縦だ」
「なに!?」
平沢は最前席のパイロット席へ駆け寄り、覗きこんだ。誰も座っていないシートの前で計器類が作動し、誰も手を触れないフライ・バイ・ファイバーの操縦桿がかすかに動いている。
平沢は気ぬけしたようにシートにもたれた。
「SCFも人手不足ですか」
「厄介な仕事が多いのでね」
「まあ、全部コンピューター仕掛けの方が都合がいい。ワルキューレをハイジャックさせてもらいます」
ジルベスターが、ほおと口を丸くした。
「ワルキューレから入電」

イエローサーチ司令室で、通信係のオペレーターが振り向いた。
「何事だ。――離陸に失敗したか？」
「いえ」
オペレーターは顔色を変えた。
「……平沢から……です」
「なに!?」
「そういうわけだ」ワイヤレスのヘッドホンマイクに平沢が言った。「ワルキューレは今我々の手の中にある。追撃機（チェイサー）でも出したら……」
途端に通信機の向こうから笑い声が聞こえてきた。
『何をするつもりだね』
「何だって？」
英語のわからない榊が、コクピットせましと集まっている一同の中で、唯一人英語ペラペラの沖田に訊いた。
「何するんだってさ」
「このまま日本に帰る」英語で平沢が答えた。「手を出そうとしたら、ハワイかどこかの民間港に強制着陸するからそのつもりで」
『やってみるがいい』
それきり、通信は切れた。平沢はかすかに不吉な予感を感じながら、ヘッドホンを持ってシー

トの背にもたれかけた。
「さて博士、答えてもらいましょう。この機にはあなたと小牧ノブって娘の他に誰が乗ってますか？」
「わしらだけだ」ジルベスターはあっさり答えた。「ノブ・コマキはキャビンで眠っておる」
「おーい榊、ノブちゃん、キャビンにいるってさ」
聞いてた沖田が榊に訳した。
「わ、キャビンてどこ？」
「この下だろ」
途端に榊とつばさは、コクピットの出口へ動き出した。その後ろ姿に沖田が付け加える。
「あと三十分は眠ってるってよ」

2

「自動操縦の解除ができないだと！」
平沢は思わず聞き直した。ジルベスターはパイロット席へ目をやった。
「不可能ではないが、コンピューターのプログラムの解除（ブレイク）と組み直し（セット）にどれほどかかるか考えてみなさい」
「手動に戻すだけでいい」

「パイロットがおらんのでな」ジルベスターは言った。「あれを手動に解除できるのは、衛星軌道上でわしらを待っとるトラクターだけだ」

「は……」

平沢はポケットから煙草を出そうとした。がパッケージが空なのに気づいて横の沖田に手を出す。

「タバコ」

「JPSしかないぞ」

捕まって以来、洋煙草しか手に入らない。沖田が煙草と百円ライターをよこした。

「トラクターって？」

「シャトルだけじゃ大気圏を離脱するのが精一杯でな、月まではとても行けない。だから衛星軌道でタグボートにドッキングして月までひっぱってもらうんだ。通称トラクター」

「くわしいな」とジルベスター。「大したものだ」

「とにかく」平沢は成層圏の深い青空をフロント越しに見上げた。「何とかしよう。このまま月まで連れていかれたら大変だ」

「はあ……」

平沢はくわえ煙草のままパイロット席に腰をおろした。横の席に沖田がもぐりこんでくる。二人の間に首だけ出した真田が、

「ま、なんともゴチャついたメカだこと。よくこんなの使う気になるな」

「ジャンボなんかにくらべりゃ単純（シンプル）だよ。どーすんだ探偵？」
「ブースターに点火して大気圏から出ちまうまで、もう時間がない」
平沢が一通りの計器に目を通す。
「計器は全部正常と……コンピューター突破するしかないか」
全自動にセットされた操縦装置を手動にしない限り、好きな所へ飛ぶことはできない。平沢は、メインパイロット席とコ・パイ席の間のコンピューターディスプレイのスイッチを入れた。作動しない。
「こっちじゃ、らちがあかん」
平沢はメインシートから立った。
「直接、コンピューター室になぐりこもう」
「気をつけてな」前を通りすぎる平沢にジルベスターが声をかけた。「へたに手を出すとブースターごと吹き飛ぶでな」
「粋（いき）な仕掛けだね」
「スターボウ計画がどうかしたのか？」
キーラー司令は、私室のヴィジホンからルナベース司令室のオペレーターに訊き返した。
『いえ、ドクターを乗せたワルキューレ07は現在のところ異常ありません。もうすぐブースターに点火します。が、実はイエローサーチでちょっとした騒ぎがありまして……』

「幽霊でも出たのかね？」
『レッドバグがあそこから脱走し、ワルキューレ07をハイジャックしました。学生が何人かついて来ているようです』
「レッドバグ……平沢か」司令はつぶやいた。「それで？」
『ワルキューレ07は大気圏離脱後、ルナトランスポーターとのドッキングまで自動操縦になっています。今のままでは妨害分子を乗せたシャトルを月に連れて来ることになりますが』
「ブルーサーチは何と言っている？」
『厄介事には手を出したくないそうです。どうしましょう』
「トラクターのメンバーだけで、レッドバグを押さえられるかな？」
『楽な仕事だと言っています。ワルキューレは自動操縦で、思いのままに出来るそうなので』
「ではやってもらおう。保安部に歓迎の準備をするよう言っておけ」
『了解しました』

ワルキューレの客室（キャビン）は、コクピットから出た所にある階段を降りていくとすぐにみつかった。機体の右側、簡単な構造の気密ドアを開けた所に、二座席三列ほどのシートがシャッターの降りた窓ぎわに並んでいた。その真ん中の列に、安全ベルトをつけたノブがぐったりと眠っていた。
「無事だった」

手すりのついた通路側の壁にもたれかかって、榊はつぶやいた。ノブの顔を覗きこんだつばさに、規則正しいノブの寝息が聞こえた。

「よかった」

「いつ起きるって？」

「あと三十分ていってたでしょ」つばさが日本時間のままの腕時計を見た。「朝までには起きるわ」

その時、だしぬけに機体が後ろから蹴とばされたようなショックが、襲いかかった。

「あわ……」

立っていた榊が、体を後ろへもっていかれる。とっさに背もたれにしがみついたつばさが呻いた。

「何、これ？」

「コクピットに戻ってみよう」

いきなり機首を真上に向けて急上昇をしたようなキャビンの中で、手すりを伝って床をはい上がりながら、榊がいった。

「自動操縦やめて狂ったんじゃないよね」

やっとのことでコクピットに戻ると、フロントスクリーン越しの空は真っ黒になっていた。

「何事だよー」

手近のオペレーター用シートにもぐりこんで息をついた榊が訊く。一番前のコ・パイ席の沖田

が顔を後ろに向けた。
「探偵が自動操縦の解除に失敗したらしいな。現在高度五万……五万二千……どんどん上昇している」
「空、出ちゃうじゃないの」
こちらもシートについたつばさが喚くと、沖田は前を向いた。
「その通り。ロケットブースターに点火した」上を指して、「もー衛星軌道の宇宙空間まで一直線だぜ」
「外、出ちゃうの?」
「そー。……ったくどーなるんだよ」

体全体を何か重いものが押さえつけているようだった。まるで氷山の底に押し込められたように、重く、寒い。
果てしなく長く続くように思えた重苦しい時間は、やがてゆっくりと去っていった。遠い昔、どこかで感じたような、支えるもののないゆるやかな浮遊感覚がそれに代わる。逆立ちを長くやった時のように、頭が重くなってきた。血が少し逆流したように、顔が熱い。
ノブは目を覚ました。ゆっくりと現実感が戻ってくる。
スクリーン越しに、今まで見たどんな夜空より鮮やかな星空が見えた。

「現在高度二十七万メートル」仏頂面の沖田が高度計を読んだ。「完全に衛星軌道上だ」
「いや、まいったねこりゃ。わっはっは」
「探偵さんよ」沖田がメインシートに戻って来た探偵を横目で見た。「どうなんだ？　もう一度あそこへ帰れるのか？」
「わからんな」涼しい顔で、平沢が答えた。「宇宙空間は管轄外だ」
視界の上半分に、青い輝きにふちどられた地球が見える。
「すごいの」
シートから前を見つめたまま真田がつぶやいた。
榊が黙ってシートベルトをはずして立ち上がった。無重力になったコクピットの中を、注意して動き出す。
榊はコクピットから出ていった。はっとして後を追いかけようとしたつばさに、沖田が声をかける。
「やめときな。野暮すんじゃないの」
ノブはゆっくりとあたりを見回した。左側にしか窓のない、小さな飛行機の客室のような部屋。
窓ぎわのシートに座っていたノブは、窓の外を見た。明るい室内の反射映像の向こうに、信じられないほどきれいな星空がまたたいている。

その窓に、誰かの顔が映った。
「お目覚め？」
榊が、こともあろうに体を宙に浮かせていた。ノブは思わず悲鳴をあげかけた。
「どこ、ここ」
「宇宙空間。座っていい」
ノブがうなずくと、榊は隣の座席におりて来た。
「宇宙空間……て」
「あの潜水艦で連れこまれた基地から、スペースシャトルで打ち上げられたんだ。――月まで行くらしい」
「つき……」とっさにノブは実感が湧かなかった。「つきって、あのお月様？」
「そう。かぐや姫とうさぎのいる、あの月」
「なんで」
「さあね」
榊は肩をすくめた。ノブはっとして、目をそらした。
「……わたしのために？」
「違うだろ」
違わない――ノブはうつむいた。
「榊くん……あなた、どうしてわたしが狙われるのか、一度も訊かなかったね」

「そうだっけ。そういや一度も訊いてないな」
「先に言っとけばよかったね」
ノブは窓の外に顔を向けた。
「超能力者って、知ってる？」
「ちょーのーりょくしゃあ？」
SFには興味がないと思っていたノブが口にした言葉に、榊はびっくりした。
「エスパーとか、超人とかっていうあれか？　マンガなんかによく出てくる」
「それ」
「知ってるけど」
「あたし、それなの」
「ぶ……」
榊は吹き出した。ノブが悲しそうな顔をしてる横で、こらえきれずに笑い出してしまう。
「知り合いにテレパスがいるってバカは知っているけど、本人がエスパーってのは初めてだ」
「本当(ほんと)よ」
ノブの顔からはほとんど表情が消えていた。
やっと笑いをおさめた榊が、まじめな顔をとりつくろいながら訊く。
「どして？」
「理由なんか知らない！」ノブは目をきつく閉じて喚き出した。「はっきり魔女っていったらわ

かる!?　それとも化け物!?」
「どっちでもいいよ」
途端に目を大きく見開いたノブの平手が飛んできた。派手な音とともに頬をはたかれた榊が座席から吹き飛ぶ。シートベルトをしていなかったらしい。
「……きいたー」
飛ばされた榊がのそのそ席に戻って来る。
「悪かった、ごめん。……で？」
「『で？』って」
ノブが訊き返す。榊は訊き直した。
「だから何だってゆーの？」
「どうしてこんな所来ちゃったか考えればわかるでしょ！　たかが超能力者なんかに付き合うから、こういうことになっちゃったの」
「自分で責任ひっかぶろーっ面(づら)して、それで満足？」
「巻きこみたくないんだってわけ」ぶすっとした顔で榊が肘をついた。「一人で悲劇のヒロイン面して、それで満足？」
「だったら、ほっといたよ！」ノブが声をあげた。「迷惑かけたくなかったの！」
榊も負けじと怒鳴り返した。
「エスパーの超能力コンプレックスなんざ、話の中にしか出てこないと思ってた」

「あっそ」ノブが鼻をならした。「ここに一人、立派なコンプレックス持ちがおりますわ」
「やだね……ったく」
「あなたにはわからない」
ノブが榊から目をそらした。
「あーわーったよ。病気持ちのヒロインてみんな同じこと喚くんだから。わかったよ、超能力者。エスパー。へーへー、認めましょ。で、何が気に入らないんだ？」
おだやかな口調に戻して榊が訊いた。
「力があるってこと」ぽつんとノブがつぶやいた。「他の人にはない力があるってこと」
「それで実際に化け物扱いされたことでもあるのかよー」
「そうなる前に逃げたわ」
「……」
榊は溜め息をついた。
「また逃げるの？　オレにはきみが化け物には見えないんだけども……」
「こんな組織に狙われてるってのは本当の事よ」
「巻きこまれたくないって思ったらほっといたっていったろーが！　お前ホントにエスパーかよ、ったく鈍い」
「ええエスパーです。ろくに力使えないけど、エスパーです」
「もうエスパーでも何でもいいって」

嫌気がさしたって感じで榊はノブに向き直った。ノブが上目づかいに榊を見て、くちびるをかんだ。
「これ以上付き合うと後悔しますよ」
「試してみよ」
「え？」
「後悔するかどーか、試してみようじゃねーの」
ノブが目をそらした。
「本気？」
「本気ですよ。……お付き合い願えますか？」
しばらくの間、ノブは横を向いて肩をこわばらせていた。榊はなんとなく間をもてあましてしまう。しきりに鼻の横をこすったりしていると――突然、ノブが倒れかかってきた。消え入りそうな声で、
「いいの？　……本当にいいの？」
「いいってば」
榊がぎこちなくノブの肩に手を回そうとした時――
「あーあ、泣かせちまいやがんの」
びっくりして顔を上げると、真田がキャビンのドアから覗いていた。
「バカ！　これからだってのに」

ぽかっと真田をなぐって、沖田の顔が出てくる。
「おめーら、覗いてたな！」
「いや、差し入れ」
手すりを伝って真田が来る。ノブがあわてて口を押さえて窓に顔を向けた。
真田はパッケージ入りの錠剤を出した。
「宇宙酔い止めの薬」
「なんだって？」
沖田がついーっと飛んできた。
「無重力の宇宙空間でも心臓が地面にいる時と同じように血を送り出すから、頭に必要以上に血が上るんだと」
「それで頭が重いのか」
「にしても」沖田が笑った。「いやー、榊にしちゃ上出来だったぜ」
「おまえらなあ！」
「一応止めたわ」つばさまで姿をあらわした。「悪趣味だって言ったんだけど」
「結局覗いてやんの、あーあ！」
「しかし、駄々こねてる女の子ってかわいいね」
真っ赤な顔してうつむいているノブの顔を覗きこもうとした沖田が、窓の外に視線を止めた。
「なんだ？」

「悪趣味な事やめろっての」
飛んできたつばさが沖田の頭をどついた。
「イテ、何か来てっぞ」
「え？」
一つの窓に全員がどーっと集まった。ワルキューレと同じ高度で、遠くから白いものが近づいてくる。
「宇宙船かや？」真田が目を細くした。「ま、なんつー不格好な宇宙船だ」
「トラクターとかいうやつだろう」沖田が言った。「強制ドッキングして月へ連れてくつもりだ」

3

宇宙船としてはじめて核融合エンジンを装備したのがＣＣ－１０４ルナトランスポーター、通称トラクターである。宇宙空間専用の大型船で、巨大なエンジンユニットを長い主骨格（ストレッチ）に組み込み、先端に操縦区、その間にドッキングユニットや作業用ユニットを連結した、ほぼ火星より内側の軌道を主な行動範囲とする汎用宇宙船である。
今、ワルキューレは不格好なメカニズムの塊であるトラクターにしっかり抱えこまれた形で、地球から離れようとしていた。
地球から月まで三十八万キロ。夜空に輝く月まで、一秒で地球を七周半する光をもってしても

一秒をこえる距離。その間には、真に、何もない。
鈍いショックとともにゆっくりとトラクターがワルキューレを抱えて動き出そうとした時、ノブは泣き出したいような恐怖に襲われて肘かけの上の榊の腕を握りしめた。
「動き出した」
沖田がつぶやいた。
「ほんとかよ」窓の外をながめている真田がいった。「動いているように見えないぜ」
「ただでさえ九十分で地球一周しているはずなんだけどね」
沖田はキャビンの座席から離れた。
「コクピットへ行こうぜ。あっちの方が少しは変化がある」
行こうとした榊の腕をノブが押さえた。小さい声で、
「ね、ベルトのはずし方わかんない」

「動いてんのかよー」
チューブ入りのジュースをぷらぷらさせながら、コ・パイ席で計器を見ていた真田が計器盤をたたいた。
「外、全然変わんないでしょか」
「もっともだ」
わざわざ換気装置のそばまで行ってタバコを吸っている平沢がうなずいた。

「あそこに行くだけだからな」
上四分の一を占領しているトラクターの船体の向こうに見える三日月を指す。コンピューターディスプレイを覗きこんだ沖田が、
「それでも時速二万キロ以上出てんだぜ」
「時速二万……」榊は目を丸くした。「景色が動かないからスピード感がまるっきりないや」
視界の半分以上に、クレーターだらけの白い月が見えるようになって、ワルキューレとドッキングしたトラクターは機首を地球に向けた。
遥か彼方に青い地球が見える。コンソールのディスプレイを見た沖田が不思議そうにつぶやいた。
「パックで飛んでるのか」
「これから減速するでな」
ジルベスターが、平沢相手のコンピューターチェスの片手間に教えてくれた。
「ルナベースは月の裏側のヘヴィサイドクレーターにある。いつもならトラクターからパイロットが降りてくるが、この分ではポートに着陸するまで自動操縦じゃろう」
ジルベスターの言葉通り、地球が月の影に入ってから、ワルキューレはトラクターから切り離された。ブースターで減速を繰り返しながら、ゆっくり月面へ降下していく。
「さびしい所だなー」榊が外を見ながらいう。「話には聞いていたけれど、草も生えてない」

「生えてるかパカ」
沖田がつまんなそうに頬杖をついた。
「まったく何て組織だよ。本当に月基地なんか造ってやんのか」
「五百人規模のがある。戦闘用の基地だが」
「現在は千二百人おるよ。まだ増設中だがね」
平沢の説明をジルベスターが訂正した。
「アメリカもロシアも目じゃねェな」と沖田。「どこらへんまで手を広げてるんだ」
「二年前には、火星基地の開発ははじまっていたな」
平沢が記憶をたぐる。
「レッドサーチなら、もう稼働をはじめとる」ジルベスターがキーボードに次の手を打ち込みながら言った。「もっともここからでは長旅だがね」
「小惑星帯（アステロイド）にステーションを造るって話はどうなった？」
チェス盤の映ったディスプレイをにらみながら平沢が訊いた。
「苦労しとるようだ。火星から先、タイムラグがひどくなるしのう」
「広すぎるんだよ、太陽系っての」
榊は星空を見上げた。宇宙は一日中、夜。
「見えてきた」
真田がシートから浮かび上がった。

「あれ？」
山並みの向こうに、何かが光っていた。山の影の暗闇から大きなクレーターの中央に向けて、空港の着陸灯のようなライトの列がある。その先に、特大のヘリポートのような着陸地点を示す同心円が見えた。
「月の上に建物ないの？」
「施設はすべて地下だ」
平沢を劣勢に追い込んだジルベスターが、フロントスクリーンに目を向けた。
「地上には必要最低限のものしか出とらんよ。通信アンテナとレーダードームくらいなものだ」
ワルキューレがゆるやかにヘリポートに着陸すると、ヘリポートは地下へ降下しはじめた。体の重さが少しは戻ってくる。
「〝二〇〇一年〟にこんなシーンあったな」
「今年は二〇〇一年じゃねェ」
エレベーター式のヘリポートが、しばらくすると停まった。頭上の穴が閉じていく。
ヘリポートのハッチが閉じられると、デッキは再び降下をはじめた。厚い気密壁を通りすぎると、眼下に広大な格納庫のような広場が見えてきた。
「ひええ……」
沖田は声をあげた。榊がふっと溜め息をつく。

「NASAのシャトルくらいしか知ってるのない。全然知らんのばっかりだ」
天井からフックで下げられていたり、地上に駐機している宇宙船らしいものがごっそりある。NASAのスペースシャトルのようなスタイルの機体や、同じワルキューレ型らしいのも二機ほどあったが、大部分は純宇宙船らしい不格好なものだった。リフティングボディの大型戦闘機らしいのまである。
はじを占領している、とてつもなくでかいモノレールのような軌道を見た沖田が、顔色を変えた。先を眼で追うと、軌道は格納庫の壁の宇宙船専用みたいな巨大なエアロックの気密ドアの中へ延びている。
「探偵さんよ」沖田はこわばった声で訊いた。「この基地はマスドライバーまで実用に使ってるのか？」
「マスドライバー？」ディスプレイのチェス盤をにらみつけたまま平沢が言った。「ああ、加速用のやつか。あるはずだぜ」
「何だマスドライバーって？」
真田が訊いた。
「月の重力圏の脱出速度まで宇宙船を加速してほうり出す、ジェットコースターみたいなもんだ。こいつがあると、エンジンがなくても月から出られるんだが、あんな規模だと、かなり大きい宇宙船でも飛ばせる」
やがてヘリポートデッキは、格納庫の床と同じ高さまで降りて止まった。

「ここが終点らしいね」
「見ろよ、警備兵がごっそり出迎えに来てるぜ」
「負けましたよ、博士」
ディスプレイのチェス盤から顔を上げた平沢が両手を上げた。シートから立ち上がる。
「せっかくの盛大なお出迎えだ。出ていかなきゃ悪いぜ」
平沢はエアロックへ、地球の六分の一しかない重力を意識してゆっくり歩き出した。
「へーへ、行きますか」

六分の一という重力に歩くのにさえ苦労しながら、一同はわいわいと騒ぎつつ月基地に降り立った。主格納庫から、応接用のような豪華な調度品を揃えた一室へ通される。
機能一点張りの基地内にあるとは思えない応接間である。地球から持ち込んだらしいペルシャ織りの絨緞（じゅうたん）、天井からはきゃしゃなシャンデリアまで下がっている。
「はーあ」
いかにも高価そうなソファに乱暴に腰をおろした真田が、二、三度跳ねかえって落ち着いた。
「地球を遥か何十万キロか。俺たちゃ、いったいどーなるんだー」
「さァな」沖田は腕を組んで入ってきたローズウッドのドアにもたれた。ぐいっと平沢に目を向ける。「だがいずれにせよ、こーなったら地球の底まであのアホに付き合うしかあるまい」
そこらへんをもの珍しそうにながめていた榊が肩をすくめる。

「好きだね、おたくも」
「はは、わかった？」
ドアが開いて一人の人物が風のように入ってきたのは、その時だった。
「待たせたな」
「キーラー！」軍服風の白いスーツを身につけた男を見るなり平沢が立ち上がった。「貴様がこの司令官だったのか！」
「最前線へようこそ」キーラー司令官は口だけで笑って片手を上げた。「元気そうだな、ミスター平沢」
「はん、出世したな」
それだけ言うと平沢は腰を落とした。
「二年前と同じ質問をもう一度繰り返そう」
キーラーは部屋の一方のサイドボードによりかかった。
「今度は佐官待遇で、SCFに入るつもりはないかね？」
「今はまだ契約期間中だ」平沢はぶすっとして答えた。「それに、もしこの仕事が終わっても、貴様たちと手を組むつもりはない」
「残念だよ」さほど残念でもなさそうにキーラーはいった。「君ほどの人材が得られんとは。さて……」
キーラーは榊ら五人に向き直った。

「ＳＣＦが何のためにこれだけの設備を持っているのか、聞きたくないかね？」
「ぜひ聞かせていただきたいもんだ」
沖田が身を乗り出した。
「ついでに、なぜこんな組織が極秘の存在なのかも」
「よろしい。好奇心は若者の特権だ」
キーラーはポケットコンピューターのようなものを取り出して、ボタンを押した。キーラーが背にしていた二百号ぐらいの大きな嵐の海辺の風景画が、瞬時にして大型ディスプレイに変わる。
「こんな写真を見たことはないかね」
キーラーはもう一度ボタンを押した。若いアメリカ人らしい夫婦が青空をバックにしたスナップ写真が出る。
「次はこれだ」
グランドキャニオンの写真。夕暮れらしく地平線から手前の割れ目（クラック）まで見事な赤銅色に染めあげられている。
次いで、アクロバット飛行中らしい米空軍の戦闘機が映った。沖田がつぶやいた。
「ファントム……そうか」
その戦闘機の背後に何か光る飛行物体が映っていた。
「ＵＦＯ」と榊。「……ＴＶスペシャルでもはじまるの？」

「そう、UFO、未確認飛行物体だ」
バックの写真を切り替えながら、キーラーは続けた。偶然に、あるいは意図的に写されたらしいUFOの写真が続く。
「この空飛ぶ円盤（フライング・ソーサー）の目撃数は第二次大戦後いきなり増えている。その理由を考えたことはあるかね？」
榊が少し身を引いた。
「第二次大戦前にも目撃されたのが、表に出てきただけ……じゃないの？」
キーラーは口をゆがめて軽く首を振った。
「なぜ、彼らが一九四五年以降になって急に飛来するようになったか明だ。生きた〝宇宙人〟とはまだ会ったことがないのでね。しかし、本当の理由は今もって不いる」
バックの写真が、原爆のキノコ雲の白黒写真になって止まった。
「人類が核エネルギーの生成に成功したことが、彼らを呼び寄せる結果になった、とね」
キーラーは再び写真を切り替えた。ソ連最初の有人宇宙船ボストークの写真が映る。
「彼らの最初の影があらわれたのは一九六〇年、公式に人類最初の宇宙飛行士とされているガガーリンの一年前だ。彼は最初の宇宙飛行士ではなかったのだよ。確かに最初に宇宙から生還した人間ではあるがね。
人類最初の宇宙飛行はガガーリンの一年前、男女二人乗りのカプセルによって行われている。

だが突入に失敗してな。十年前まで地球を回っていた。今は静かの海で眠っているが、彼らが最初の犠牲者だ」

「証拠はあるのか？」

沖田がほんのわずか顔を下げて訊く。

「宇宙人の標本が必要かね？　それともUFOの実物大モックアップ、今までの戦死者の名簿（リスト）を見るか？」

「話を続けな」平沢が手をあげて、うーんと背を伸ばした。「少しは新しい宣伝材料を聞かせてもらえるんじゃないかと期待してるんだが」

「よかろう。アメリカのUFO調査機関であるコンドン委員会とソビエトの特別委員会は、一九六八年のほぼ同時期に、UFOの飛来目的についてまったく同じ結論を得た」

「地球侵略かよ」うんざりした顔の沖田が頭を抱えた。「週一のペースで怪獣が攻めてきたりするってんじゃねェだろうな」

「その方が楽かもしれん」

キーラーは歯をみせて笑った。

「だが、我々には地球を守ってくれるスーパーマンはいない。委員会の得たUFOの飛来目的は、こうだ。彼らは地球人の地球外進出を妨害するため、どこかも知れぬ太陽系からここまで飛んで来ている」

「地球外進出の妨害？」

「宇宙開発の進展を阻もうとしてるのだ。計画への妨害工作から始まって、宇宙船を故障させたりするグレムリンだよ。例をあげればキリがないが、宇宙計画が七〇年代以降、著しい遅れを見せ始めているのは知っているだろう」

キーラーは、またバックの写真を切り替えはじめた。

「アポロ計画の早期打ち切り、ソユーズの失敗続出、スペースシャトルの大幅な遅れ、未だに開始のめどすらたたぬ外惑星有人探査計画（プロボーズ・プロジェクト）。――なぜ彼らが地球人の宇宙計画を妨害するのか、それは不明だ。彼らが単一種族なのか、数種類の異星人なのかもわかっておらん。わかっているのは、彼らは我々人類を地球に封じ込めようとしているということだけだ」

「だから戦ってるわけ」榊が唖然とした顔のままつぶやいた。「あんなすごい潜水艦や、基地や、こんな月基地まで造って……」

「これだけの装備を用いても、まだ彼らと戦うには不十分なのだ。だからノブ・コマキ……君に、わざわざここまで来てもらった」

キーラーは、榊の後ろに隠れるようにしているノブに視線を放った。

「君のような能力は貴重だ。ぜひ我々に協力してほしい」

榊の後ろで、ノブが体を硬くする気配があった。

「質問していいか？」沖田が手を上げた。「その宇宙人とやらは、なぜ地球の宇宙開発を妨害するんだ？」

「わからん」とキーラー。「それも生きている宇宙人に会ったら訊いてみたい。だが、だいたい

の理由は推測されている。もしも猛獣がオリを破ってしまったら、人はどうするかね？」
「棒で突っついたりしながらオリの中へ追い込もうとする……なるほどね、地球人類は宇宙人にとっては野蛮きわまりない猛獣ってわけか」
「地球人てのは自滅のネタには困ってないからな」平沢が言った。ぱっと両手を広げて、「早い話、偶発核戦争一発でおしまいだ」
「それでも、我々は宇宙をあきらめるわけにはいかんのだ」
キーラーがスクリーンのコントローラーをポケットに入れながら、強い口調で言った。
しばらく古い有人カプセルごと映っていた地球の写真が、元の風景画に戻る。
「地球だけでは、我々には狭すぎる」
「ナポレオンもヒットラーも、手を広げすぎて自滅したんだぜ」
平沢の軽口を今度は無視したキーラーが、もういちどノブに目を向けた。
「ぜひ協力してほしい。人類の未来のためにも」
「くっさー」
つばさがそっぽ向く。
「どーぞ」榊が体を横にずらした。「先約、忘れんなよ」
ノブは顔をあげて気弱に微笑んだ。
「残念ですけど、お断りします」
キーラーはわずかに目を細めただけだった。

しばらくの沈黙の後、平沢がソファから立ち上がった。
「ではそういうことで、帰ろうか」
「帰れると思っているのかね？」
「思ってないさ。貴様が目的のためには手段を選ばない人間だってことは骨身にしみてわかっているからね」
「ならば話が早い。ノブ・コマキ、よければ理由を聞かせてくれませんかね？　我々は君の力を必要としているのだ」
「そんなこと知らないよ！」ノブは両耳を押さえて叫んだ。「わたし好きでこんなに生まれたんじゃない！　ＵＦＯや宇宙人なんか興味ない」
「我々が戦っている理由は説明した」
「司令官さん、おたく何かカンちがいしている」
榊がキーラーのセリフをさえぎった。
「誰相手に戦争してるのか――宇宙人相手にやっているのはわかってる。だけどね、おたくたち、オレらにも宣戦布告してるんだ」
「今までさんざん追いかけられたからねえ。今さら本当の敵はどーのこーのいったって、それはないぜ司令官」と沖田。「俺たちにとっちゃ、どっかから飛んでくる訳のわかんないのより、おまえらが目の前の敵なんだよ」
「さあどうするキーラー」平沢が面白そうに言った。「前にこう言ってたな、我々の敵は宇宙人

だが、地球人の中にも敵がいるようだ、と。どうやら貴様、また敵をふやしたようだぜ」
「交渉は決裂か」
キーラーは不気味な笑みを浮かべた。
「残念だ。だが、これで君たちの運命も決まった」
「で、今度は脅迫か」沖田が言った。「さっさと実力行使の用意をすれば？」
「洗脳をB級以上の超能力者におこなった例がないのでな、不必要な廃人は作りたくなかったが、仕方あるまい」
キーラーが気障（きざ）に指を鳴らした。途端にドアが開き、慣れた身のこなしで警備兵が多数部屋に飛び込んできて、あっという間に一同を囲んだ。
「連れていけ！」

ACT・7　月面サバイバル

1

「出してくれ！」
閉じこめられた部屋のドアを両手でたたきながら榊が叫んだ。
「オレはルパンじゃなあい！」
「ったくワンパターンなんだから」壁際に座って頭の後ろで指を組んだ沖田が言った。「閉じこめりゃいいと思ってやがる。これで何度目だ？」
「潜水艦と地下基地で……三度目だわ」
真田が指折り数えたら、ドアに背を向けた榊とつばさがすかさず応じる。
「オレ四度目」「あたしまだ二度目」
ルナベースの地下深く、拘禁用らしい殺風景な部屋である。応接間での話が決裂してすぐ、ノブを除く全員がほうりこまれた。

「おーい探偵」沖田が気のない声をかけた。「もう何か残ってないのか？」
「ないね」
今ごろになって、ツタンカーメンヘリコプターに置いてきた装備のことを考えながら平沢は答えた。
「イエローサーチで使い果たした。まさかルナベースくんだりまで来るとは知らなかったのでね」
「俺だって知るか」
「ただ一つ希望が持てるのは」平沢が例によって天井に取り付けられている監視カメラを見上げた。「ここほど地球から離れた基地なら、基地内部への侵入者対策なんてろくにしてないはずなんだが……」
「どーだか」
空気が抜けるような音とともにドアが開いたのはその時だった。ドアにもたれていた榊は後ろ向きに外へ出たところを、白兵戦用フル装備の黒い警備兵に腕をつかまれた。
「どうやらお迎えだぜ」
言いながら沖田が一挙動で立ち上がった。
「どうなるんだよ、ったく……」
「ぞっとしないね、宇宙服なしで散歩に出るとは」

どこともしれぬ通路の中を護送されながら沖田がつぶやいた。
結局キーラー司令は一番安上がりな始末を命じたらしい。宇宙服なしで真空の月面上へ――。
「探偵、なんとかしろ」
「そうするか」
背後から、消音よりはパワーダウン目的らしいサイレンサー付きの小型マシンガンH&K－MP5をつきつけられたまま、平沢が言った。
「中の構造はわかってんのか？」
「わからんな。地球外は管轄外だ」
「じゃ、どーすんだよ」
「一つだけ方法がある。運を天に任せるんだ」
「あのな……」
「天の上にいるんだから運はいいはずだ」
「だんだん希望が持てなくなってきた」榊が天井を振り仰いだ。「遺言くらい書かせてくれるんだろうねえ」
「ねえ？」ワンテンポくらいずれてる感じでつばさが真田に訊いた。「あたしたち、本当に死ぬの？」
真田は悲しそうに首を振った。
「ぼくたちはね、星になるんだ」

「きっざー」

大窓の外に、白い静かな月の砂漠が広がっている。すぐそばに山脈がそびえているため、丸い地平線は一部分しか見えない。平沢を除く四人は、声もなく黒い空の下の砂漠をみつめていた。No.8と書かれたエアロックのある、一方には宇宙服がズラリと一ダースほどかけてある準備室である。

「行け！」

警備兵の一人が銃口を軽くエアロックに振った。二重ドアの窓の向こうには月面の風景が続いている。

「最後の一服もなしか？」

平沢は肩をすくめて歩き出した。

「先行ってるぜ」

ヘヴィサイドクレーター地下五十メートルの司令室で第八エアロックのモニター映像を見ていたキーラーは、異常を告げる電子ブザーに司令席のコンソールから頭を上げた。

「ダイアナ五号と六号が重力の異常偏移をキャッチしました」

月のまわりと、月軌道より外側の超高々度を回る監視衛星ダイアナからの通信をうけたオペレーターが告げた。

「異常偏移？」
「今管制局でもキャッチしました」
ヘッドホンに手をあてた別のオペレーターが叫んだ。
「ヘヴィサイドクレーター上空約百キロの地点に、異常な重力変化があります！」
「何事だ？」
まさかレッドバグが、と考えかけて、キーラーは第八エアロックの映像に目をおとした。平沢がエアロックに入ろうとしている。
「まさかな」
次の瞬間、悲鳴のようなオペレーターの声が響いた。
「基地上空で空間がゆがんでいます。重力偏移、急速増加」
「レーダーに異常反応！」
キーラーの席にもあるレーダースクリーンに異常の文字が出ると同時にレーダー手が叫んだ。
「敵ＵＦＯの反応多数！」
「基地上空に直接出現したのか!?」
まるで核爆発のような地震がルナベースを襲ったのは、その時だった。
月には地震はほとんどないが存在しないのである。それに、ナマズもいない。内核が冷えきった月には地震のもとであるマントル対流そのもの

「月震（ムーン・クエイク）!?」

職業的訓練をうけたはずの警備兵が思わず口走った。だがその異常さを気にする以前に、平沢はそれを絶好の隙とみた。

エアロックのドアに手をかけたまま回し蹴りで背につきつけられていた機関銃を跳ねあげると同時に、横の警備兵の横っ面を跳ねとばし、反動を反対側の兵へ持っていってハンマーパンチを脳天にたたき落とす。

「オラ死ねい！」

とっさに身をかがめた沖田が両側の警備兵に正拳をくらわす。跳ねあげたマシンガンを追ってジャンプした平沢は、そのまま空中から残りの警備兵を狙い撃ちして、降りてくる前に反動で壁に背中をぶつけた。

「ろくな役には立たんな。反動が大きすぎる」

「拍手ー」

とっさに窓に張りついた榊と真田が手をたたいた。沖田が一緒になって手をたたきながらいった。

「今の地震で命拾いしたぜ」

「ちょっと待て」榊が妙な顔であたりを見回した。「地震か今の？」

「地震じゃろ……月だから月震かや」

「あれ見て」窓の外を見たつばさが大声をあげて一方を指した。「あそこ！」

「あら……」
クレーターだらけの砂漠の一画に、キノコ雲のような爆発煙が上がっていた。ただでさえ重力の少ないところへホコリのような砂塵なので、砂煙だか、爆発煙だかが広がりすぎ、何が何だかよくわからない。
「事故か？」
あきらかに非常事態を告げるらしい電子サイレンが鳴りはじめた。スピーカーが早口の英語で何か喚きはじめる。
「非常事態……敵飛行物体が奇襲？」日本語に訳した沖田も首をかしげる。「至急迎撃用意」
「本来の敵が攻めてきたようだな」
警備兵から武器をはずしながら平沢が言った。

「ルナベースへの直接攻撃だと!?」サイレンを鳴らしながらもキーラーは問い返した。「前例がないぞ。こんな重力源のそばへ直接ワープアウトしてきたとでもいうのか」
UFOが、超光速航法を使うらしいことはわかっていた。今までの観測で、それが瞬時に消滅したり出現したりする、空間を歪曲（わいきょく）させるワープ航法らしいことも、重力源――この場合大型天体――のそばではめったに使われぬ航法らしいことも。
それが、月面上百キロという異常な至近距離に、危険を承知の上で跳んで来たらしい。
「そのようです」

ディスプレイにかじりついていた男性オペレーターが答えた。サブスクリーンの一つに月面上に広がる大爆発が出る。

「今の地震は攻撃じゃありません。ワープアウトに失敗した敵機が墜落したんです。奴ら本気でこの基地をたたくつもりだ」

「上空機数二十八……三十、どんどん増加します」

「全基地戦闘態勢」

告げたキーラーは、1/6Gという重力を考慮して設計されたきゃしゃなシートに腰を落ちつけた。司令室の照明が消えて、計器とディスプレイの明かりだけになる。ふと思い出して平沢たちのいた第八エアロックの映像に目をおとすと、映像はブラックアウトしていた。

「やられたか？」

UFO――流星のように輝く正体不明の飛行体。それが、ヘヴィサイドクレーターの上空に次々と出現し、一部は降下をはじめていた。

クレーターの所々に開いた発射口から、メカむき出しの形をした不格好な宇宙戦闘機CF－38ナイトホークが迎撃のため次々に上昇していく。白い推進炎が星空に鮮やかにいくつもの尾をひいて白い発光体へ接近する。

「どーやら本物の戦争らしいや」

ほっそりとした機体にアンバランスなほど大きなエンジンをつけたナイトホークが、雁形編隊

をいくつも組んでUFO群へ突入していく。機関銃で監視モニターを破壊した平沢が、窓ごしに上空を見上げた。

「お、始まったぞ」

それまでただのクレーターだと思っていた所が次々に開き、大出力のレーザー砲らしいメカが砲身を上空へふりたてる。急降下してきたUFOの一機が鮮やかなビームを放って、そのうちの一つを破壊した。残りのレーザー砲が素早くUFOに向けられるが、真空中でレーザービームが見えないので攻撃しているのかはわからない。

「本場物のスターウォーズだ」

バーニアもなしに上昇していくUFOを見送りながら、榊がつぶやいた。意外なほど近くのクレーターに白熱したビームが一瞬だけ立ち、音のない大爆発が震動だけを伝えてくる。

「こわいねェ」

爆圧で吹き飛ばされた砂が窓にあたる音を聞きながら、沖田が言った。

「ビームだの核だの、ぶっけっこすんだろ？　やだねェ」

「早いところズラかろう」真田が上がってきたエレベーターのドアに行きかけた。「こんな小っさいの一発で吹き飛んじまう」

「いいチャンスだ」

平沢がつぶやき、真田に振り向いた。

「やめな。また基地の中戻る気か」

「どーすんの？」
沖田が、窓の反対側へ動き出した平沢を目で追いながら訊いた。
「外に出る」
「なに!?」「冗談でしょ！」「はぁ？」「しーん」
「早く宇宙服着ろ」
「正気かよ」沖田が声をあげた。「とんでもないのがブッ飛んでる中へ出ていくつもりか。気違い沙汰だ！」
「無理に来なくてもいいが」平沢は宇宙服を点検している。「基地の中に戻っても、今度見つかったら一発で殺されるぞ」
「そらそーでしょーけどねー」
「だからって、外出てくっての？」
戦場と化した月面を見ながら榊が浮かない声を出した。
「モビルスーツでも着るんなら別だけどさあ。宇宙服じゃ、ビームでもかすったら蒸発するよ」
「勝手にしな」
「……」
四人は顔を見合わせた。つばさが低い声で、
「どーすんのよー」
「やっぱあの探偵に付き合うっきゃないんでないかい」

暗い声で真田が言った。沖田は肩をすくめて、平沢に向き直った。
「了解(ラジャー)、付き合うよ」
「なら早く着ろ」
最後の宇宙服を点検しながら平沢が言った。
「着方なんて知らないわよ」
「とにかくサイズを合わせろ。LMSで間に合うはずだ。どれでもいい」
仕方なく各自、自分に合いそうな宇宙服へ動き出した。
「まずヘルメット。使い方だけでも覚えろ。通信器は耳の部分、マイクもヘッドホンも組み込んである。バンドは合わせてあるから触るな。サンバイザーはおろしておくこと。今ここは昼、へたにバイザー上げると失明する」
注意文とうろ覚えの知識で、平沢がざっと説明した。
「本当はフードでもかぶらないとまずいんだが、この際なしだ」
ヘルメットをかぶると、髪をかきあげたりできなくなる。このため通常は頭をおおうフードをつけて髪を押さえる。
「メガネはいいのか？」
沖田が訊いた。
「はずれても直せんぞ」
「わーってる。行動時間は？」

「三時間だ。酸素はもっとあるが、昼間はクーラーのバッテリーが保たん。着る順はまず体を中へもぐりこませ、各部を締めたら最後にメット。何か質問は？」
「はい先生」真田が手を上げた。「外出てからどーすんの？」
「着ながら説明する」
言いながら平沢はシャツに手をかけた。
「えー、服脱ぐのー」つばさがびっくりする。「このまんま着ちゃだめ？」
「かまわん。下に余分なもの着てると動きが鈍くなるんでね」
六分の一の重力と分厚い宇宙服のため、着るのはむずかしかった。
悪戦苦闘しつつ、互いに協力してなんとかもぐりこむ。
「バックパックはしっかり背負え。出るぞ」
全員がもこもこした宇宙服を着終わったのを見て、一通り点検をし終えた平沢がいった。
「何か言い残すことは？」
平沢が、警備兵からの武器で寄せ集めのゲリラ戦くらいはできるようになった一同を見渡す。
「宇宙では遺言を言っているヒマはないぞ」
「自分は生き残れるつもりらしいな」
沖田は肩をすくめた。榊が沖田をこづいた。
「余計なことしてないで早くいこう」
「わかった。では全員ヘルメットのバイザーをおろし、シールしろ。ああ、それとこっちから指

示しない限り、発砲は厳禁する」
手順に従ってサンバイザーをおろすと、シールドが真っ暗になって互いの顔が見えなくなった。こんなんで大丈夫かいなと榊が一人で心配していると、そばのLサイズが肩をたたいた。何か言っているらしい。
榊が聞こえない、のジェスチャーをしたら、そいつは榊のメットの横に手を伸ばした。
『無線のスイッチ、入れろっての』
『全員聞こえるか？　左手をあげてみろ』
平沢の声に従って全員が手を上げた。
『よろしい。では外出だ』
エアロックの中を強い風が吹いた――と思ったら、外のドアが開いていた。途端に無線に耳障りな雑音が飛び込んできた。
『ひえ』
『こりゃ離れると聞こえなくなるぜ』
『爆発には気をつけろ！』
外に出た平沢が喚いた。
月面上空では、暗黒の宇宙空間をバックにおそろしいほど美しいレザリアムが展開されていた。軌跡を引いて飛び交う宇宙機群、白熱したまぶしい粒子ビームと目に見えないレーザービーム、それに時折激しい光を伴って開く小型の核爆発の花火――。

その度に、無線はすさまじい電磁波をキャッチして忠実に再生する。
「だあーっうるさい！」
月面をぽんぽん跳ねながら沖田が喚く。
「こんなんじゃ、ライフルもSMGも役に立たんぞ！　あの爆発に小指一本つっこみゃおシャカだ！」

2

どことも知れぬ個室に、たった一人でノブは閉じこめられていた。プラスチックのようなベッドに腰をおろしたノブは、今、生まれてはじめて自分から超能力を使おうとしていた。
今までに、思い通りに超能力が使えたことなどない。予想外の突発的な状況に、まるで発作のように出てくるだけで、たまに自分からその力を使おうと思っても使えなかった。
だがノブは、必死になってその力を使おうとしていた。
聞こえてくる早口の英語放送と時折部屋を揺らす不気味な震動で、なにかとんでもないことが起こっているのはわかる。きつく目を閉じて榊やつばさ、他の三人の事などを思っていたノブは、頭を押さえると、そのままベッドに倒れた。
「……使えやしないじゃない、バカ！」

また不気味な震動が戦闘態勢に入って照明の消えた暗い司令室を揺らした。五十をこえる数のUFOは、地球でいうところの一撃離脱戦法（ヒットアンドアウェイ）という攻撃で、ルナベースの地上施設、そして地下に埋められた施設にまで確実な打撃を与えている。

「ブルーサーチからの援軍は？」

計器ライトにのみ照らされて浮かび上がったキーラーは、幽鬼のような表情のまま訊ねた。

「こんな状態で地球に奇襲をかけられたら、地上部隊だけでは保（も）たんぞ」

「ナイトホークとスターライナーが五編隊ずつ出撃したようです」オペレーターが聞き取りにくい通信を必死に聞き分けている。「ですが、最大加速でも二時間はかかります」

ルナベースの上空は完全な乱戦状態になっていた。双方合わせて百機以上の宇宙機が入り乱れてドッグファイトを演じているのである。

「今までの撃墜は、こちらの損害と五分か……」戦況を知らせるディスプレイに目をはしらせたキーラーがつぶやいた。「となれば、地上施設の分丸損だな」

「司令！」

一人のオペレーターが回線をつないだ。

「エメラルドセクションから、ドクター・ジルベスターの通信が入っています。お出になりますか？」

「つなげ」

キーラーはインカムのマイクをとった。ディスプレイの一つに出たドクターに、かみつくよう

な口調で喋り出す。
「何事だこんな時に!?」
『ナイトホークかXCI－40をこちらへ回してくれんかね』
「なに」
『あるのか、ないのか？』
ジルベスターは通話の合間に指示を飛ばしているらしい。キーラーは別の回線を回しながらジルベスターに喚き返した。
「理由は!?　――管制センター、ナイトホークかXCI－40ですぐ飛べるのは何機だ」
『ナイトホーク二機、XCI－40は五機が稼働可能ですが、あれはまだテスト中の……』
『スターボウの訓練生を出してみようと思う』
管制センターと同時に返ってきたジルベスターの答えに、キーラーは一瞬絶句した。
「使えるのか!?」
『武器装備はナイトホークが二〇パーセント、XCI－40は五四パーセントです』
『すでに百時間の飛行訓練を済ませている者が四人いる』
「実戦経験は」
『もちろんゼロだ』
「話にならん」
『すいません』

『出撃許可を出すのかね。出さんのかね？』
「わかったよ博士（ドクター）、君の勝ちだ。――XCI－40をすぐに出撃準備、四機でいい、エメラルドセクションへまわせ。パイロット？　余計な心配はするな！」
『感謝するよ、司令』
言ってジルベスターは通信を切ると、やっと集まった四人の訓練生に向き直った。南米、アメリカ、インド各一名ずつの男に、残る一名はスペインのジプシーだった少女である。
「聞いての通りだ。出てくれ」

『うわ！』
無線の雑音がひときわ激しくなったと思った途端、すぐ目の前に火柱が立った。一番体重の軽いつばさと、岩にしがみつきそこねた真田が土砂とともに宇宙に吹き飛ばされる。
『ひええ、落ちない』
『勝手にあわててろ、そのうち落ちる』ずいぶんと上に飛ばされた二つの小さな人影を沖田が見上げた。『着地には気をつけろ』
『なんて不便な所』つばさが空中からゆっくり落ちてくる。『ここじゃ飛び降り自殺もできないの？』
『そのおかげで助かるんだ』と平沢。『感謝するんだな』
『うわっうわっ』

もうもうたる土煙の中に真田が落ちてきた。
『なにが重力六分の一や！』
『どこまで行くんだ？』
のろのろとしか晴れない砂塵の中からジャンプした沖田がまわりを見回す。
『砂とクレーターしかねェぞ！』
『ん、伏せろ！』平沢が怒鳴った。『何か出てくる！』

『40―二号機出撃準備完了』
カタパルトに乗った不格好な迎撃用宇宙戦闘機ＸＣＩ－40に、主任メカニックが伝えた。
『第二エンジンが不安定だ、気をつけろ』
『さすがテスト機』
つぶやいてパイロットのマイク・ウォーレンは、三本のスロットルの左右二本だけに手をかけた。
『発進ＯＫ。ゲーム場までは高度五百で飛ぶ』
『命と引き換えにしても壊すなよ。残りのＸＣＩ？　まだ装備中だ、ごちゃごちゃぬかさねえで待ってろ。よーしＸＣＩ－40―二号、発進、カウントはぬきだ、勝手に出てけ！』
『了解』
言ってマイクはＸＣＩ－40を発進させた。

地下カタパルトから月面に飛び出す。いつもの三分の二のエンジンしか全開していないので加速Gは大したことはない。土煙の上スレスレを飛ぶような感じで、マイクは戦場に向かった。

『うわ！』

すさまじい電波障害を残して、すぐ頭の上を地球側らしい戦闘機がぶっ飛んでいった。

『なんだありゃ？』

『ホコリでよく見えんかった』

『発進場所は確認した』

伏せていた平沢が立ち上がった。

『小型船用の射出口だ。中へ入る』

『ちょっと待て、バカ！』沖田が喚いた。『何考えてんだこのやろ』

『スターボウ計画は、エメラルドセクションでやってんだ！』

負けじと平沢が喚き返した。下を指して、

『この下だよ。当然あの娘もここにいるはずだろう！』

『あんなのが飛び出してくる所から入るっての』榊が頭を抱えた。『わーん、もう何も言わない。オレは人生あきらめよう』

『その方がいい』

『ここらへんのはずだが……』

破壊されたようなクレーターまでたどりついた平沢が、あたりを調べ出す。少し遅れて沖田が飛んで来た。

『あーっ、もうやだ』

『同じーく』次に来た真田がよろけて転ぶ。『どーこが六分の一の重力だ。動きにくいったらありゃしねえ』

やや遅れて、はーはー息をきらした榊とつばさが来る。こちらはもう愚痴を吐く余力もない。

『で、射出口ってどこだよ』

『ここらへんのはずなんだが』と平沢。『カムフラージュしてあるのかな』

『な、なんだァ？』

遠くから近づいてくるような震動音に、沖田は思わずヘルメットごしに耳に手をあてた。

『妙な雑音だな』

平沢が言うまでもなく、そのノイズはどんどん上がっていった。あっという間に最高潮に達する。

『あ、あ――』

榊が妙な声をあげた。その指差す方向を見た沖田は思わず息を呑んだ。

素早い動きで、クレーターの一部が持ち上がったところだった。アームで持ち上げられた岩石の張りついたパネルの下に、レールのようなものがあるトンネルが続いている。

『うわあ』

急に雑音が大きくなったと思うと、その中から不格好な小型機が斜めに飛び出してきた。三つのメインノズルから噴射炎が尾をひいている。

一番そばの榊が吹き飛ばされた。沖田がとっさに受け止める。背中でうなっていたクーラーのモーターが、小型機の排気熱でいきなり出力を上げた。

目の前で、あっという間に射出口が閉まった。

『何だ今の？』

『閉まり終わるまで八秒か』平沢のつぶやきが聞こえた。『間に合うかギリギリの線だな』

『まさかこの中に入るってんじゃないでしょうねえ、平沢千明さん』

かみしめるような口調で沖田が訊く。平沢はあっさりとうなずいた。

『次のやつが飛び出したら、すぐ飛び込む。用意しろ』

『あのな、火ィ噴いて飛び出してくるんだぞ。離れてなきゃヤケドしちまうし、それじゃ間に合わん』

『ヤケドくらいで済みゃいいけど』

『勝手にしろ』

言ってるそばからまた発射口のハッチが開き始めた。平沢が身を低くしてかまえる。

『SCFの宇宙服の耐熱性能信じる？』

榊が訊いた。沖田は肩をすくめた。

『ただでさえ、月面二百度だぜ。オーバーヒートする方に賭けるよ、俺は』

『用意』
すでに一度聞いているパターンの雑音が飛び込んできた。騒音レベルの音と熱をまきちらし、不恰好きわまりない宇宙戦闘機が飛び出してきた。
『スタート！』
平沢が飛び出した。熱の急上昇を感知した背のクーラーがうなりを上げる。あわてて残りの四人も駆け出す。
まるで夢の中で走っているように、じれったいほど前に進まない。それでも一番に飛び込んだ平沢に続き、男三人は次々に転がりこんできた。だが最後のつばさが飛び込んで来る最中に、パネルは閉じはじめた。
『このバカ！』
とっさに沖田が射出口内へつばさをひきずり込む。ついでにリニアモーター式らしいカタパルトのレールへたたきつけた。
『やー、運が良かったなー』
『こんのやろぉ』
頭をヘルメットの中でぶつけたらしいつばさが、ゆらゆらと立ち上がる。
『やってろ！』下方へ続く射出口の出口へ動き出した真田が言った。『もー止めない』
『次のが来る前に終点にたどりつかんと、バーベキューになるぞ』
先を進んでる平沢が言うのが聞こえた。

幅の広いカタパルトのレールが中央にあり、天井に薄暗い照明が点々と続いている。その金属製の壁は焼け焦げていた。

『急げよー』平沢が言った。『カタパルトからブースト全開で来る』

トンネルの先に、明るい光が見える。五人は、リニアモーターの振動音が、雑音のまじらなくなった無線にいつ聞こえてくるか気にしながら、跳ねるように飛んでいった。

『40—五号発進準備完了。いつでも飛び出せ！』

その時、XCI－40に乗った四人目のパイロット、ノエル・ボーがその黒い瞳を見開いた。

『進路上に誰かいます』

小柄なスペインの少女は叫んだ。

『なに』

『人です。四人……いえ、五人！』

目の前にぽっかりと口を開けた射出口から宇宙服が五つ、ばらばらに飛び降りた。

『今、こっちに出ました』

『なら出ていけ！』

主任の野太い声がノエルのヘッドホンをびりびり震わせる。

『進路はクリアーだ。先に出た連中が苦労してるぞ』

『了解、あとはお願いします』

ノエルはXCI－40を発進させた。
カタパルトの終着点に載っていた、エンジンにコクピットをつけたような大型宇宙機が、いきなり加速されて射出口に消えた。
『ふはー、タイムラグ十秒ってとこか』
沖田が溜め息をついた。
『んで、ここどこだ？』
『エメラルドセクションの小型機用ポート』
まるで飛行機工場をさらにゴチャつかせたような、とてつもなく広い空間を平沢はさっそく動き出した。機体移動用のプレートやクレーン、整備中らしい宇宙機などの間を飛び越えていく。
『エアロックから中へ入れるはずだ』
『ここまだ真空なのかよ』
『倉庫みたいなもんだからな』
せまいエアロックの中に、空気が吹きこまれた。外圧と音が戻ってくる。
器用な手つきでイン側のドアを開けた平沢が、中へ飛び込んでOKサインを出した。
『メットとっていいぞ。異常なしだ、今のところはな』
汚れた作業準備室から、ヘルメットをバックパックごとはずした五人があたりを見回して通路へ出た。
「こんな格好でうろつくのかよ」

ずいぶん長い間、生(なま)の声を聞いていなかったような錯覚を覚えながら、沖田が言った。
「防弾くらいは期待できるぜ」
「動きにくいんだごわごわして。ん？」
通路のドアから、二人ほどの人影が飛び出してきた。まずい、と沖田が片手でＭＰ５の銃口を上げかける。と、平沢が沖田を押しとどめた。英語で喚く。
「ＡＥ－35の修理終わったぜ。どうした？」
「逃げ込んできたんだとさ」
片方の黒人がすれちがいざま答えた。
「外に出て災難にあったらしい」
駆け抜けた二人はそのまま通路を折れていった。

愛想のない白い照明をベッドから見上げていたノブは、目を閉じた。
もう、何をする気もない。ノブはゆっくりと首を振った。
左側で、ドアの開く音がした。
「やっと見つけた。おい、いたよ！」
ノブはのろのろと声のした方へ首を回した。夢か幻だと思った。
「お助けに参りました。お姫さま」
榊がうやうやしく胸元に手をあてて礼をする。

「うそ……」
ノブは跳ねるようにベッドから飛び起きた。
「うは！」
首ったまに抱きついてきたノブを支えきれずに、榊が通路へよろけ出る。
「ホントね。夢じゃないよね」
「盛り上がっている最中で悪いけどさ、榊」
駆けてきた沖田が声をかける。
「……見ないフリするくらいの気をきかせてほしかった」
「帰ってからゆっくりな」
ノブを抱き上げている榊に沖田がニヤニヤしながら言った。後からきた真田が、
「いや、うらやましいこって」
「にははは」
「おー見つけたか」
片手にSMG、片手にバズーカ砲を持った平沢が通路の向こうから来た。つばさが反対側から飛んで来る。泣き出しそうな顔でみんなの顔を見たノブが、
「どうしたの、その格好？」
「来年のニューモード」宇宙服姿のつばさがくるりと回ってみせた。
「あ、バカなことしてしまった」

「いろいろあってね」
「で、探偵」沖田が平沢に向き直った。「メンバー揃ったぜ。どーすんだ？」
「ダイヤモンドセクションに戻る」
「あん？」
歩き出した平沢に、沖田が訊き直した。
「どこだァ？」
「来た所だ。いいか、この基地がUFOの奇襲とかであわててるうちに勝負をつける。地下レールかコミューターでダイヤモンドセクションに戻って、主格納庫（メインハンガー）になぐりこみをかけるんだ」
「あんな所襲ってどーすんだよ！」
コミューターが行き交うストリートに出た平沢に、沖田が喚く。大型のエンジンを積んだトレーラーや、戦闘機の残骸を載せたプレートが、すごいスピードで走り回っている。
「大人数が乗れるシャトルを揃えているのは、ルナベースの中じゃあそこだけだ。なるべくスピードの出る、大気圏突入のできるシャトルを探せ」
「できると思う？」榊が真田に訊いた。「今頃、あのでかい格納庫、上のスターウォーズで大騒ぎになってると思うんだけど」
「探すだけならできるんでないかえ」と真田。「ただ、あの探偵のことだから……」
「他に自力で地球に戻る方法はない」
平沢が、予備のコミューターのある倉庫へ入っていった。非常時なのでドアは開きっ放しであ

る。
「シャトルをかっぱらうんだ。他に何か手があるか!?」
「やっぱり……」
榊と真田が他人事のようにそっぽを向いた。

「敵機、イカルス方面で二機撃墜」
「ヘヴィサイド上空、ナイトホーク58が消えました。アローヘッド、戦闘続行中」
「戦況はどうかね？」
司令室にジルベスターが入ってきた。大型のディスプレイで壁が埋められ、計器のライトに人影だけがいくつも浮かび上がっている。
「大分持ちなおした」
ディスプレイから目を離さずにキーラーが答えた。
「ドクターの出してくれたXCI－40がよくやってくれている。UFOが増援部隊でも送りこんでこなければ、ブルーサーチからの援軍が来るまで保つだろう」
「XCI－40は全機健在かね？」
「四機とも活躍している」
キーラーが、ジルベスターにも見えるようにディスプレイの一つをスクリーンに出した。
「大したものだ……パイロットもすごいが、実戦性能がこれほどとは思わなかった」

「はじめからエスパー用に作られた機体ではないが」とジルベスター。「感応装置がうまくいっているようだ。これでフライトデータが取れればまた改良ができるが、しかし……」

エスパーは本来戦争に使うものではない、と言いかけて、ジルベスターはやめた。少なくとも今言うべきことではない。

「二号ラインに異常発生！」

突然、オペレーターの一人が叫んだ。

「――二号ライン!?」

ダイヤモンドセクションからエメラルド、イカルス管制センターまでを一直線につなぐルナベース最大の主通路（メインストリート）である。

「何が起きたのだ」

「コミューターが二台、破壊行為を繰り返しながら、ダイヤモンドセクションへ暴走してきます！」

「映像、出ます」

サブスクリーンの一つに、二号ラインの映像が出た。

大型のトレーラーやリフターの間を縫うようにして、二台のコミューターが気違いのように走っていた。自動（オート）ならコンピューター制御で危険はないのだが、手動（マニュアル）のままとばしているらしい。

片方の運転者をみとめた時、キーラーは一瞬、我を忘れた。

「平沢……生きていたのか……」

3

「やるじゃないか、過激派学生」
「車が同じなら負けないぞー。にしてもスピードの出ない車だ」
「ならとばすなよォ！」必死になって後部座席にしがみついている榊が叫ぶ。「せめてまともに走れー」
「るせー。トロい分動きまわってカバーするっきゃねェんだ」
「まっ前、ぶつかる！」
タンクローリーみたいな大型車がのろのろと走っている。
沖田はコンソールの停止信号が点滅しているのも無視して、小型のコミュータターを反対車線に突出させた。
低圧タイヤがずるずる滑る。車体の下についている電磁石が路面に車を押さえていなければ、あっという間に横転してしまうだろう。
「ったく、エレカーってなトロいんだから！」
スロットルは全開のままである。ミッドシップに積まれたモーターは悲鳴をあげているが、スピードはろくに伸びない。
「くっ、くるー！」

反対車線の正面から迫ってくる、焼けただれた宇宙機を載せた無人トレーラーをみて、榊が悲鳴をあげた。ノブはとっくの昔にシートにしがみついて目をきつく閉じている。

「喚いてねーでぶっ放せ」

「ひえーい」

フロントウインドーの上に慣れない手つきでAR18ライフルを押さえつけた榊が、訳のわからぬ声をあげながら引き金を引いた。

「落ちんじゃねェぞ」

喚きざま、沖田が急ハンドルをきってやっと追い越したタンクローリーの前に出た。ライフル弾を何発かくらったトレーラーは、ゆっくりレーンをはずれて対向車線からコミューターの横へずれ込んできて、後続と衝突事故をおこす。はじかれた小型のプレーターが六分の一の重力下でスローモーションのように飛び散った。

「探偵！」沖田が、タンクローリーの向こう側から出てきた平沢のコミューターに車を寄せた。

「目的地はまだか!?」

無人運行を基本としているらしく、左側通行の地下ハイウェイには所々に簡単なブロックナンバーが表示してあるだけで現在位置がわからない。

はしゃいでいるつばさとバズーカを持った真田を後ろに乗せている平沢が叫び返した。

「次のジャンクション入れ」

「確かか」

「行きゃあ、わかる」
平沢が空荷のトラックを追い越して、沖田の前を抜けて右へ車を寄せていく。沖田らの頭上を越えるように、真田が後続のタンクローリーにバズーカを発射した。
「請求書でも回されたらコトだな」
背後で起きた無人タンクの爆発炎をバックミラーで見ながら、沖田がつぶやいた。
「まさか保険はないだろーし」
先行する平沢のコミューターが、黄色信号の点滅するジャンクション脇の細い通路に、減速もせずにつっこんだ。

「侵入者、メインハンガーに向かっています」
3D式の基地見取り図と、侵入者を示す赤い輝点を重ねたディスプレイから目を離さずに、オペレーターが伝えた。
「人数は六名」
「一人多いな」
眉をひそめたキーラーがコンソールに目を落とした時、また別の情報がディスプレイに出てきた。――エメラルドセクションB－17より、ノブ・コマキ行方不明、現在捜索中。
ジルベスターが笑い出した。
「まったく、とんでもない奴らだな」

「笑っていていいのかねドクター？」キーラーはジルベスターを見もしない。「せっかく連れてきた生徒が帰ってしまうぞ」
「ははは」
キーラーは戦況を示すメインスクリーンを見上げた。新しく回せるような人員の余裕はどこにもない。
キーラーはインカムをつないだ。
「主格納庫（メインハンガー）の全員に伝える。ゲリラ六名が基地にもぐりこみ、使用を許可する。殺せ」
「いいのかね」ジルベスターは驚いた。「殺してしまっても」
「殺して死ぬような奴らなら、もう何十回も死んでいるはずだ」
キーラーはインカムを切った。
「捕まるならまだ幸運だ」

「そーら乗り移れ！」
「冗談でしょー」
本来徒歩か、使っても自転車程度の小さな通路を、ボディをガタガタにした二台のコミュータ
ーが並走している。平沢が後席でもたもたしているつばさに叫んだ。
「早くせんと心中だぞ、ほれ」

後ろ手に隣を走るコミューターにつばさをつきとばす。
「あん！」
悲鳴とともに後部座席につばさが飛び込んできた。沖田がフルスロットルのまま、
「あのまんま乗っててくれたらうれしかったけどねェ」
「るっせー」
ハンドルの下に手をもぐりこませて何かやっていた平沢が、ハンドルから手を離した。
「よーしいけー！」
四人乗りのシートはとっくに定員オーバーなので、ボンネットに平沢が飛んだ。フロントグラスに手をかけたのを見て、沖田は急ブレーキをかけて車をスピンターンさせた。コミューターは曲がりきらずに壁を走ってから床に戻り、逆方向へすたこら逃げ出す。
「乱暴な運転する奴だな」
「探偵ほどでは」
言ってる間に、無人コミューターが走っていった方向で大爆発が起きた。爆風が背後からコミューターをたたく。
「さー、つかまってろ」
言うなり、沖田は減速もせずに車をターンさせた。ろくな荷重がないので横転しかける車の反対側に、あわてた榊たちがヨットのように身を乗り出してバランスをとる。
「なんつー運転しにくい所だ」

あっという間にリヤタイヤがホイルスピンをはじめる。沖田は一度スロットルを戻し、リヤタイヤにグリップを取り戻させてからモーターを全開にした。

爆発炎の中を飛ばしていく。

「覚悟しとけー」

コミューターに仕掛けた爆薬で吹き飛ばされた気密ドアから、壁ぎわのキャットウォークの手すりを突き破って、コミューターが主格納庫のド真ん中、地上二十メートルに躍り出た。

「ドジ。もっと下じゃねえか！」

「喚いてる間に飛び降りろ。巻きぞえくらうぞ」

六分の一の重力のため、そのまますぐに飛んでいきそうな車から、六人は次々に飛び降りた。

「早く！」

コミューターは、ワルキューレ型の上を飛び越えて、その向こうのタワーに激突した。

六人の人影は、ちょうど真下のリフトに載せられていた中型の長い主骨格を持つ宇宙船の上に飛び降りていく。うんざりするほど長い滞空時間のあと、意外に大きなショックとともに、六人は次々に長い構造物（ストレッチ）に着地する。

「早く降りろ！」

もう一段下の床へジャンプした平沢が叫ぶ。

「的（まと）にされるぞ！」

「ひえーい」

真田がバズーカを抱いて転げ落ちるようにストレッチからジャンプする。
「どれかっぱらうんだ!?」
ざっと見ただけで、中・大型とりまぜて五十機以上もが入っていそうなとてつもなく広い格納庫を見回しながら、沖田が訊いた。平沢が親指で、ある方向を指す。
「来る時に見たマスドライバー覚えてるな？」
「ああ、あのバカでかいやつ」
「あそこにＮＡＳＡ型のシャトルが載っている。先行って乗ってろ」
「誰があんなの動かすんだよ」
「コントロール室行ってセットしてくる。わかったら早く行け！」
沖田の所へ集まってきた榊やノブと入れ違いに、平沢はマスドライバーとは反対の方向へ駆け出した。
「あのやろ」小声でつぶやいてから沖田は平沢の後ろ姿へ叫んだ。「帰るのは一緒だぞ！」
「当然だ、バカ！」
平沢が怒鳴り返した。
「さて、行くか」
「どこへ？」
「こっちだ！」
沖田は駆け出した。

「あいつら二手に分かれたぞ」
「かまわねえから、人数の多い方狙え！」

整備用の大型車やパイプなどを飛び越えて走る。ばか広い格納庫の中で、一番端にあるマスドライバー――月面離脱用加速装置まで、あとどれだけあるのかはわからない。
「狙われてんじゃないか？」肩にバズーカをかついで脇を跳ねて走る真田が、空中で後ろ向いたりしながらいった。「気配が悪い」
「まさか」ＭＰ５片手の沖田は考えもせずに聞き流した。「これだけメカがぎっしり置いてあるんだ。飛び道具じゃまず狙われねェ」
「……にしても人が少なすぎるぞ」
「すぐ上で戦争やってんだ、大型の船ちんたら出してるわけには……」
かすかに聞こえ始めた機械音に顔を上げた沖田は目を見張った。いくつもの関節を持つ巨大な多用途クレーンが、天井に張りめぐらされた移動用のレールを動いている。
「よけろ！」沖田は後ろからくる榊と女二人に叫んだ。「そこの下へ滑りこめ！」
着陸脚を出して直接床に降りている小型のムーンバスの下に、沖田は自分から滑り込んだ。
「なんだあ」
「急げ！」

クレーンは素早い動きで、どん尻のつばさをそのフックにひっかけようとした。
「キャアー！」
珍しく女らしい悲鳴をあげて、つばさがムーンバスの下腹に飛び込んできた。獲物に逃げられた大型クレーンは、素早く関節を縮めてバスの上を通過した。
「えらいもん持ち出してきやがったなー」
ひょいと天井を見上げた沖田がつぶやく。

「H－12のムーンバスの下だ」
主格納庫のコントロール室に、クレーンの上から直接操作していた男が伝えた。
「あと二つ三つ動けるアームがあるだろう、トーチでも持ち出せ！」
「今リックとジョンがそっちに行っている」
コントロール室の男がインカムに叫んだ。
「見張ってろ！」
「了解！」
答えた男は天井のレールのすぐ下についている操作席から、下方のムーンバスを見下ろした。クレーンを動かすだけならコントロール室からもできるが、人間を追いかけるようなデリケートな操作は、それぞれのクレーンの根元にある、視界のいい操作席から行うことになる。
「くそめ……」

沖田はＭＰ５の残弾数を見た。十五発――一連射すれば終わりである。
「真田、バズーカ何発残っている？」
「こん中の一発だけ」
真田が筒身をたたいた。
「榊は？」
榊はマガジンをはずして沖田によこした。三十発入りマガジンの中に残りはわずか七、八発だけ。
「使うんならどーぞ」榊は自分のＭＰ５を床に置いた。「どーもノーコンでいけない」
「ほんじゃまありがたく。では行きますか」
「あのクレーンどーすんのよ！」
「俺が先に出てってなんとか黙らせる。その間に先行ってろ、ん？」
頭の上のムーンバスが動いたような気がして、沖田はムーンバスの腹を見上げた。
「まさか」
ムーンバスは音もなく上昇を始めていた。あっという間に十メートルも上昇して前へ動き出す。そのころになって、沖田はやっとクレーンの音に気がついた。
「作戦たててる間もねえのかよ」
マガジンを片手に持ったまま、沖田は駆け出した。クレーンによって持ち上げられたムーンバスの横から、別のアームがあらわれて追ってくる。

「くそやろー！」
地面に転がった沖田は、天井を走るクレーンの根元にむけてセミオートにしたＭＰ５を五、六発ぶっ放した。
「うはあ！」
二本目のアームがかま首をもたげたかと思うと、フックを後ろに回転させて反対側から赤い光線を走らせる。
「なんだありゃ!?」
頭上から榊たちを狙うべく持ち上がったアームを、肩ごしに見て榊が訊く。
「溶断かなんかに使うレーザーだ」
横っ飛びした沖田が、アームの先のレーザーに照準を定める。
「なんてスピードだ、ったく！」
必死に走る人間以上の速度で、レーザーを備えたアームが迫ってくる。
「くたばれィ」
反動で床にたたきつけられながら、斜め上方から迫ってくるアームに残りの弾丸をたたきこむ。命中したのか、スパークした部品をまきちらしながらフックを回転させて、レーザーも発射せずにクレーンは頭上を抜けていった。
「残り八発か」
マガジンを落とした沖田が走り出しながら、榊のマガジンをぶち入れた。ムーンバスを持ち上

げていたクレーンが、横からなぐり飛ばすような勢いで飛んでくる。
「ひえ」
首をすくめたその外を、風圧を巻きおこしてムーンバスが通り過ぎる。
「あっ、新手が来た」
救助カプセルを飛び越えたその空中で、榊が声をあげた。榊めがけて狙いすましたようにアームが正面から迫ってくる。ノブが悲鳴をあげた。
とっさに体をひねった榊の横を、フックをガチガチ開閉させながらクレーンが通過して榊を跳ね飛ばす。反射的に追おうとしたノブの足元に火柱が立った。
「！」
頭上から、火炎放射器みたいなトーチを持ったアームがノブを狙っている。ノブはかまわず、飛び出そうとした。
「バカ、逃げろ！」
遠くの宇宙船の上にたたきつけられた榊が叫ぶ。ノブを追うようにアームが動く。
「うわ！」
宇宙船と修理台の間の細い隙間を駆けていた真田の目の前に、フックが突き立てられた。勢いあまってフックにぶつかった真田は、とっさに左側の宇宙船の下にもぐりこんだ。フックは宇宙船を跳ね飛ばして真田を追いかける。
「わあー」

「このやろー！」ジャンプした沖田が、つばさをたたきつぶそうとしたクレーンの根元に残弾すべてをたたきこむ。「そいつは俺が殺すんだ！」
効果はなかった。横へ転がったつばさを追って、強力なクレーンが障害物を跳ね飛ばしていく。
「逃げろっての！」
喚いた榊は、ノブの後ろからクレーンが迫るのを見て、絶句した。まるで鮫の顎のように左右に開いたフックが、ノブをくわえこもうとしている。
真田はクレーンで大きく跳ね上げられた。宙に飛んだ真田めがけて、フックがまるでタカのように迫ってくる。沖田が叫ぶ。
「真田、バズーカ！」
真田が空中で後ろを向いて、バズーカをフックめがけて発射した。命中。真田は反動と弾圧でさらに吹き飛ばされる。爆発がクレーンを包んだ。
――だが、一瞬の後、爆煙の中からゆがみ一つみせずに爆煙をひいてあらわれたフックは、空中で真田を見事につかんだ。
「くそ！」
沖田が弾丸のなくなったＭＰ５を床にたたきつけた。もう一つのフックがまわりに遮蔽物がなくなったつばさに向かって急降下する。
沖田は片目を閉じた。

フックの動きが急にスローモーションになった。錯覚かと思った。

『何もたもたしてんだ、学生ども』

格納庫内に響きわたった平沢の声に、沖田は思わず天井を見上げた。スローモーションになったフックが、つばさの寸前で完全に静止した。

『早くシャトルへ乗れ』

主格納庫のコントロール室で、なぐりたおした二、三人の男を脇に見ながら平沢がマイクに言った。

「今クレーンのエネルギーを切った。つかまれてるのは誰だ？手動で開く、今のうち早くシャトルへ行け」

言い終わるなり平沢は、そこらへんにマイクをほうり出して、マスドライバー用のコントロールパネルに歩み寄った。

ACT・8　連絡船エスケープ

1

ガイドレールの幅だけで二十メートルはありそうな巨大なリニア式加速レールの上に、一応は見たことのあるNASA・エンタープライズ型STSオービターと同型のシャトルが載っていた。機体に書かれた文字にシャングリラとある。

「やっぱ、でかいな」

全長三十七メートルのシャトルを見上げた榊がつぶやいた。機首のサイドハッチは開いている。

沖田は軽々とマスドライバーの上に飛び上がった。加速用の台の上に載ったシャトルのサイドハッチめがけて、もう一度ジャンプする。

「ごめんくださーい」

沖田が中へ声をかけている間に、輪をかけて身軽な真田がシャトルの機首の上に飛び上がっ

た。
反応はない。フロントガラスから見えるコクピットにも、人影は見えない。
沖田は真田に中を指さして、明かりの消えたシャトルの中へ踏み込んだ。
空気が動いた、と思う間もなく暗がりから誰かがなぐりかかってきた。軽くかわしてみぞおちにパンチをくらわして外にほうり出す。
「一人だけか？」
出てきたところへ上からウェスタンラリアートをかけて、犠牲者をマスドライバーにたたきつけた真田が入ってきた。
「らしいな」
沖田が、サイドハッチのあるミッドデッキから、コクピットのある上のフライトデッキへの梯子を登り出す。
三つのディスプレイを組み込んだコクピットに顔を出す。発進準備中に戦闘が始まったのか、計器類は生きていた。中央のディスプレイに出ている文字を読んだ沖田は、思わず額に手をあてた。
「マスドライバー最終ロック完了、発進五分前だと!?」
「主格納庫のマスドライバーが稼働を始めました」
「もうそこまでいったか……」

司令席のキーラーは腕を組んだ。
「こちらからエネルギーをカットできるか？」
「緊急停止機構がすべて破壊されています。五時間後発進予定のシャングリラは、現在のままですと五分後に動き出します！」
「主格納庫より報告」
別のオペレーターが告げた。
「コントロール室で銃撃戦。相手は……一人、平沢一人でコントロール室にたてこもっています」
「独断専行したか。よろしい、あと五分だけでも平沢をそこに釘付けにしておけ」
「行かせてもらうよ」
ジルベスターがドアに歩き出した。
「どこへ行く？」
「メインハンガーだ。どうも気になるでな」
ジルベスターは片手をあげて暗い司令室から出ていった。

沖田は無線に接続されたヘッドホンのマイクに叫んだ。
「探偵、こら探偵！　ちあきちゃーん、聞こえたら素直に返事をしなさい」
「なにやっとんじゃ？」

基本的に機長席とパイロット席、オペレーター席二つの四人分しかない狭いコクピットに、残り四人が無理やり入って来る。
「探偵の奴、マスドライバーセットしちまったんだよ」
沖田が中央のディスプレイを示した。
「見ろ、あと四分で発進だ。早いとこ応答しやがれ！」
『このクソ忙しい時に無線（コール）なんか入れるんじゃねえ！』
銃撃のBGMとともに平沢の怒鳴り声が返ってきた。
「探偵。今どこにいんだよ。もーろくに時間ねェぞ」
「わかってる！」
コンピューターブロックを移動して作ったバリケードの後ろでライフルを抱えた平沢が、ワイヤレスインカムにかみついた。
「今コントロール室だ」
『まだそんな所でもたついてやんのかよ』
「るせー！　じゃまなの片付けたらすぐそちらへ帰る」
平沢はインカムを投げ捨てると、ライフルを構え直した。AR18の銃口をドアの方向に向けて、バリケードから横っ飛びに飛び出す。
「うわー」
一つしかないコントロール室の入り口で構えていた警備兵が、SMGを乱射した。平沢は主格

納庫を見渡せる床までの大窓に足をついて、あわててバリケードに戻る。
窓の遥か彼方に、主格納庫の反対側にあるマスドライバー上のシャトルが小さく見える。
「くそ……時間がない」

シャトルのサイドハッチからマスドライバーの上に飛び降りた沖田が、首だけ出した真田に顔を上げた。
「助けに行くんだよ。探偵のいるコントロール室ってのはあれだ。直線で二キロはある」
沖田は格納庫の反対側の天井近くにあるガラス張りの展望室を腕で示した。
「あんなとこまで……どーやって!?」
沖田は床へ飛び降りた。
「空飛ぶもんなら、目の前にいくらでも転がっとろーが」
「バカこけ、宇宙空間じゃないぞここは」
「知るか！　榊！」
「はいよ」
真田の横から榊が顔出した。
「こっちの点検は引き受けた。急げよ、時間になるとこいつ勝手に動き出すから」
「後頼んだぞ」
沖田は手近にあった、強力そうなブースターを装備した小さな救助ポッドに走った。

「ミサイル!?」
主格納庫からコントロール室へ火を噴いて飛んでくる影を見た平沢は、とっさにバリケードの陰へ転げこんだ。
ガラスごと窓枠を破って、丸っこい影が突っ込んできた。派手な音と共にガラスの破片が散らばる。
「何やってんだ探偵！」
沖田は球型ポッドのフロントハッチを蹴り開けた。かろうじて衝突のショックに耐えたハッチは、あえなくはずれて床へ落ちた。
「学生!?」
「早く乗……る場所はないから、上にでもつかまれ！　逆噴射かけて抜けるぞ！」
いきなりコントロール室に飛び込んできた宇宙空間用のポッドに警備兵が度胆を抜かれて反応が鈍いうちに、平沢は前半分のハッチがはずれてコクピットがオープンになった救命ポッドの上に飛び乗った。
「しっかりつかまってろよー」
沖田がスロットレバーを逆進へ全開にする。ポッドは半分ひしゃげたノズルから、化合点火によるブースターの噴射炎を噴き出して、のろのろとバックをはじめた。
「くそ……くいこんでやがる……探偵バックだ、せーの」

「それ！」
沖田はシートへ、平沢はポッド後部の大きすぎるようなブースターユニットに体当たりした。
金属同士がこすれる重い音とともに、ポッドがやっとバックで抜け出す。
「そーれ、上昇」
落ち始めたポッドを、上昇用のバーニアで浮かせた沖田が、そのまま一八〇度ターンしてロケットを全開にした。
はじかれたような加速で、ポッドは格納庫の空間に飛び出した。

「う、動き出した」
前方の宇宙船用エアロックの隔壁が開くのと、マスドライバーの上に載ったシャトルが動き出すのとが同時だった。
「大丈夫だ！」ミッドデッキのサイドハッチから首を出して外を見た榊がフライトデッキの真田に喚いた。「今コントロール室から離れた……は？」
別なところから、警備兵らしい団体がわらわらと駆け込んできた。
「おーい見送りだぜー」榊がのんびりと手を振った。「じゃあにー」

「待てい！」
ジルベスターは思わず声をかけた。コクピットにノブの顔が見える。

ノブは動き出したシャトルの中から手を振った。シャトルは宇宙船用のエアロック区画に吸い込まれていった。

「やっやばい」

格納庫側の気密隔壁がゆっくり両側から閉じ始める。沖田はとっくに全開になっているポッドのロケットスロットルをさらに押した。

格納庫の中に白い噴射煙をひいて、閉じていく隔壁めがけて、ポッドがループを描く。

「ポッドごと突っ込むのは間に合わん」ブースターの上の平沢が叫んだ。「衝突寸前にポッド捨てて体だけ飛び込め！」

「あいよ」

黒煙をひいて、両側から閉じかけた隔壁の間にポッドが突っ込み、分厚い隔壁につぶされるように爆発した。弾き飛ばされた残骸が、シャトルのなくなったマスドライバーの上に降り注ぐ。

「ふはー、間一髪だぜ」

線状の光が、ぴたりと閉じて見えなくなった。宇宙船用のバカでかいエアロックの淡い照明の中へほうり出された平沢と沖田は、前の隔壁に飛び降りてから床へ足をついた。

「急げ！　すぐ真空になるぞ」

左右の特大のダクトからもう聞こえ始めた空気のぬける音を気にしながら、平沢がシャトルのサイドハッチへ走る。耳がつーんと痛くなってくる。

転げるようにして、サイドハッチからシャトルに飛び込む。待ち構えていた榊が素早くハッチ

を閉じる。
「やったね！」
「まだだ。助かったぜ、学生」
沖田に軽く手を上げてから、平沢が息をきらしながら上のフライトデッキへ上がっていった。
エアロックの空気が全部抜けたのか、前方の隔壁がゆっくり開いていくところだった。
真田とつばさの間から、平沢は軽く飛んで左側の機長席に入った。
両側の、淡いオレンジの照明が白いシャトルの機体をそめて遥か先まで続いている。
「上じゃまだ戦争やってるはずだ」宇宙服の手袋ごしに、平沢は操縦桿を握った。「覚悟しとけ」
シャトルを載せたプレートごと、月面重力の脱出速度である秒速二・三キロまで加速するリニアモーター型のマスドライバーが動き出した。岩肌がむき出しのトンネルの先は見えない。
「うわ！」
加速Gがかかり、六分の一の重力に慣れた体があっという間に後壁におしつけられる。地下トンネルの照明が、すさまじい勢いで流れ出した。
中央の一点から、すべてが後ろへ流れていく。月面離脱速度秒速二・三キロ、時速に直せば八三〇〇キロ。
月のクレーターの上で、非現実的な美しい光が乱舞していた。核の炎、ビーム、スラスターの光。

攻撃的な死の光の舞うその下で、白いクレーターがゆっくりと口を開いていた。暗いトンネル――マスドライバーの射出口である。

わずかな光しかないトンネルから、黒い空の戦場へ、シャトル〝シャングリラ〟はすさまじい速度で飛び出した。

「うわ！」

メインエンジンに点火もしないうちに、コントロールを失ったらしいＵＦＯが正面から突っ込んできた。とっさに側面のバーニアを全開にして左へ逃げる。

「戦闘空域抜けるまで、しばらく振り回すぞ」

平沢がフライバイフライバーのスティックを操りながら叫ぶ。

「どこでもいい、シートに体縛りつけとけ！」

「シャングリラ発進しました」

司令室中央で苦い顔をしているキーラーにオペレーターが伝えた。

「地球へ向かっているようです」

「わかっている」

キーラーは戦況を示すディスプレイに目を落とした。戦闘はほぼ最終段階に来ている。残存している敵ＵＦＯは二十機ほど、一部は退却をはじめているらしい。

「ブルーサーチからの援軍は？」

「軌道に乗りました。あと五分で戦闘域に達します」
コースは飛び出したシャングリラの反対側である。
「すぐ追撃機(チェイサー)を出すわけにはいかんな」
出撃可能な戦闘機はすべて出払っている。今からシャングリラを追わせても、月の重力圏を離れていくらもしないうちに燃料切れで漂流をはじめるのはわかりきっている。
「まあいい……」
シャングリラと同型のエンタープライズ型の飛行性能表をディスプレイに出したキーラーは、口元に笑みを浮かべた。
「高機動型とはいえ、しょせんはカーゴリフター。後から追撃機を出しても地球圏までに楽に追いつける。待っておれ、平沢め」

2

月の影から、青い光が一筋さした。
「お、見ろ」
月面上空三〇〇〇キロ、月の裏から表側へぬけるような軌道をとっていたシャトルのコクピットで、平沢がフロントグラスへ顔を上げた。
「地球が出るぞ」

眼下には、月の夜の部分が星空を闇で半円に隠している。その闇の地平線に一点、青い光がきらめくと、ゆっくりと小さな地球が昇りはじめた。
「きれい…」
月の影から姿をあらわしてくる地球光に、狭いコクピットに集まった一同は声もなく見とれた。
「さ、とばすぞ」
平沢はメインロケットに点火した。軽い加速Gがかかる。
「帰りはトラクターいらないわけ？」
真田が訊いた。
「月の重力圏からはもう出ている。戻るだけなら大した推力（スラスト）は必要ない。手持ちのタンクとロケットで充分間に合う」
「こいつも、ただのシャトルじゃねェな」
コクピットの後ろのコンピューターパネルにとりついていた沖田が言った。
「ペイロード室全部を燃料タンクが占領してるってのはわかるとして、姿勢制御ノズルの出力がバカみたいに高くなってる」
「ＳＣＦの宇宙船だからな」
月の重力でわずかずつ軌道を変えながら、平沢が事もなげに言った。
「外観はＮＡＳＡと同じでも、中身は別物と思った方がいい」

機体に張られたタイルは装甲セラミック、エンジン出力はメイン、サブともに強化されており、大気圏突入可能速度も、オリジナルより遥かに大きい。

しかし、このタイプがNASAのものと最も違うのは、オリジナルの姿勢制御システムに追加された高機動バーニア・システムである。さすがに宇宙戦闘機ほどの空中格闘戦（ドッグファイト）などできないが、それでも原型と比較した機動性能は桁（けた）が違っている。

「バケモンだね」

「軍用機だからね」

月を後ろにして、平沢は加速を開始した。正面に見える地球はほぼ全面に太陽光をうけた〝満地球〟の状態で輝いている。

「地球まで、ひとっ飛びだ」

「どれくらいかかるの？」

「ブースターのパワーがかなりあるから」平沢はコンソールのコンピューターキーを押した。

「減速時間を入れて、大気圏突入まで十二時間てところか」

「来る時よりずいぶん速いな」

「月より地球の重力の方が大きいからね」

平沢はシートベルトを引っ張り出して、念入りに自分の体へかけはじめた。

「地球の衛星軌道に乗るまでは自動操縦（オートパイロット）にしておいた。ヘタにさわるなよ。騒ぎが起きたらおこしてくれ」

体を少し横にして、平沢は目を閉じた。
「タフなやっちゃなー」真田が舌を巻く。「よく眠れるもんだ」
「俺たちも今のうちに休んどこう」
沖田が、軽く床を蹴ってミッドデッキへのハッチへ飛んだ。頭から入る前にちらっと地球をみる。
「――三十八万キロね……遠すぎんだよ」

月面での戦闘は、ブルーサーチからの援軍が到着したことによって終わりつつあった。すでに大部分のUFOは月面上空から撤退しつつあり、残りも月から逃げる軌道へ入ろうとしている。
傷ついた宇宙機が次々に各セクションへ帰還を始めていた。
『今から地球へ飛べだ!?』
エメラルドセクションに戻って来たスターボウ部隊のマイク・ウォーレンは、思わずキーラーに怒鳴り返した。
『理由は！』
『すぐ再出撃できる無傷の機が、君のXCI－40―二号機と、ノエルの五号機しかない。他はすべて修理が必要でな』
キーラーでなく、ジルベスターが無線で答えた。マイクのXCIはパイロットが降りるのも待たずにメカニックによってエンジンの冷却と燃料、弾薬の補給が開始されている。

『……了解』マイクはふてくされて答えた。『つまりその飛び出していったシャングリラとかいうシャトル墜とせばいいんですか』

『撃墜は困る』

『撃墜を許可する』

インカムから、ジルベスターとキーラーが同時に言った。

『どっちですか』

『撃墜を許可する』

ジルベスターは黙った。キーラーは続けた。

『とりあえずシャングリラの推進機を破壊して動けなくすればよいが、最悪の場合、撃墜を許可する』

『了解。で、相棒はノエルちゃんだけですか？』

『ブルーサーチに増援を頼んだ。向こうで合流してくれ』

『あら邪魔が入る。そりゃ残念』

マイクは二機おいた隣の台に降着しているXCI－40の五号機を見た。黙ってはいるが、彼女にも無線はつながっているはずである。

『よろしくなー』

『よろしくね』

涼やかなノエルの声が返ってきた。

『ところで司令、相手のシャングリラってのは高速型のカーゴリフターですね』
『そうだ』
『そっちで計算して下さい。どれくらいで追いつけます』
『今計算した』ジルベスターが答えた。『再出撃してから最短コースをとったとして、約三十五万キロ、静止軌道の内側で追いつくことになる』
『――長旅ですな』
マイクは溜め息をついた。

宇宙空間での旅は、おおむね単調である。ましてや地球・月間のささやかな飛行ともなると、外の風景を見て退屈をまぎらわすわけにはいかない。やってもいいが、わずかずつ地球が大きくなり、いつの間にか月が遠ざかるだけで、景色は単調きわまりない。
太陽光によるシャトルの一面のみの過熱を避けるために、シャトルはほぼ五分に一回のわりで機体を回転させている。そのために五分に一度は太陽が見えたり、星空が回っていったりするが、自分が動いているようにはまったく見えないのである。
ルナベースでの騒ぎで疲れていた一同は、月から離脱してすぐミッドデッキで昼寝をはじめた。
無重力で体を固定せずに眠りはじめたので寝返りを打った拍子に天井まで飛んでいって頭ぶつけて戻って来たり、おかしな悪夢にうなされたりしながら、しばらくして目を覚ます。

ロアーデッキやロッカーをひっかきまわして探し出した宇宙食でわいわいと食事をすませると、とりあえずやることがなくなった。そこで一同は無重力なのをいいことに水滴をふわふわ飛ばしたりして騒ぎ出した。

「ほーれ行ったぞー」

沖田が余ったチューブからしぼり出した、直径十センチほどのぶよぶよした水滴をふーっと吹いた。水の塊はまるで生きているように伸びたり縮んだりしながら動き出す。

「何、遊んでる」

フライトデッキから平沢が顔を出した。

「おー探偵、飲む？」

沖田が空中にチューブからコーヒーをしぼり出した。コーヒーの塊がぶよぶよと漂い出す。

「完全に遊んでるな」

すーっと息を吸ってコーヒーを空中から飲み尽くした平沢が顔をしかめた。

「ろくなコーヒー積んでないな。――それより、どーやら敵さん追いかけて来たようだぜ」

「なにィ!?」

ACT・9　スターウォーズ

1

レーダースクリーンの隅に、赤い点が表れている。うんざりするほどゆっくりと、だが確実に距離を詰めてきているらしい。

「あと一時間もすれば追いつかれる」

平沢がのんびり正面に見える地球をながめながら言った。月を出た時は遥か彼方にあった地球が、今は満天を圧するばかりに大きくなっている。

「最後の最後まで……」

沖田がくちびるをかんだ。

「探偵、加速して振りきれないか？」

「これ以上スピード上げると燃料が減速に足りなくなる。オーバースピードでつっこんだら地面につく前に燃え尽きるぞ」

「対空ミサイルくらいないのか？　一応これ軍用機なんだろう」
「軍用といっても輸送連絡艇だからな」
「ないの？」
真田が恐るおそる訊く。平沢はディスプレイのキーボードを何回かたたいた。
「――兵装ゼロ。ミサイルランチャーはペイロード・ベイの内側にあることはあるが、肝心のミサイルが一本もない。困ったもんだ」
「どーすんだよ」
平沢がディスプレイを見上げた。近づいてくるのは二機、推定接触時間は五十七分後――。
「時間さえ稼げればこっちのもんだ。なんとかだまくらかしてみるさ」
「応答しろ、こちらＳＣＦ連絡艇（シャトル）シャングリラ……聞こえてるはずだ、返事しろこの！」
応答はない。さきほどから全周波数で呼びかけているのだが、追尾している二機の宇宙機からも、他の何からも応答はなかった。
「完全に無視してやがる」
平沢はヘッドホンマイクを軽くほうった。
「ＳＣＦの無線だけでも盗聴できないのか？」
オペレーター席で通信パネルを熱心にいじっていた沖田が、ヘッドホンを片耳からはずして訊いた。

「ムダだろうな」
平沢はシートに座りなおして、体をシートベルトで固定しはじめた。
「基地間の通信ならかなりの暗号変換がかけられているはずだ。レーザー通信なら受信のしようがないし、聞けたところで意味がわからなけりゃ雑音でしかない」
「とすると逃げの一手でござるか」真田がしかつめらしく腕を組んだ。「性に合わんの」
「今までだってひたすら逃げまわってきたよーなもんだろが」と榊。「今さら……」
「事情がのみこめたら戦闘態勢ー！」
命令口調で平沢が両手をたたいた。
「いつ攻撃してくるかわからん」
「わあ」
平沢の言葉が終わらないうちに、白い鮮やかな光が束となってコクピットの上をかすめた。一直線に地球に吸い込まれる。
「もう始めやがった。学生、ノブが訳のわからない顔で消えた光線の行方を見つめている。
「約一万……うえ」
即答した沖田が頭を抱えた。
「二手に分かれてスピード上げやがった」
「間に合う!?」
榊は正面に大きく見える地球から目を離さない。

「あと少しだってのに」
「小型の出してきた」
一瞬にしていくつかに分裂したようなレーダーの点に、沖田が声を上げた。素早くレーダーを立体レンジに切り替える。
「ミサイルだ。二つ、右上から来る」
「つかまってろ」
平沢が機体右側のロケットを全開にした。シャトルが左へ横滑りする。
「うわ！」
沖田がシートごと振り回されている間に、立っていた四人は右側の壁へ一度たたきつけられた。
「つかまるなり座るなり、早くしろ！　ケガするぞ」
目視できるような近距離を、人工衛星にブースターをつけたような不格好なミサイルが追い越していった。
「ホーミングじゃねーだろーな」地球に吸い込まれるようなミサイルの炎を目で追う平沢がつぶやく。「反転なんぞしてきたら、いつまでもよけられないぞ」
「第二波発射。同じだ、右から来る！」
とっさに真田がパイロット席にもぐりこんできた。つばさが予備シートにつき、榊がグリップに手をかける。

平沢は今度は三秒ほどサイドブースターをふかした。体を持っていかれそうになったノブの腕を榊がつかまえる。
「戦闘機接近、来るぞ！」
マイクは、ブースターをふかして、ミサイルを回避するシャトルの左翼へ狙いを定めた。
「発射（ファイア）！」
XCI－40の両翼に装備された粒子ビーム砲が火の束を噴き出す。それがシャトルの左翼に命中して軽いショックをあたえると同時に、マイクは急降下する感じでシャトルの左側を抜けていった。
上から下へ、大型の宇宙戦闘機が飛んでいった。同時に左側からのショックが機体をゆらす。
「左側の翼に命中したわ」目の前のディスプレイに破損個所がワイヤーフレーム映像で示されるのを見たつばさが叫ぶ。「大丈夫!?」
「こいつは頑丈だ。あんな出力の弱いビームなら、エンジンにでもくらわない限り心配はないが――やられた」
ジャイロ式の姿勢計を見た平沢が舌を鳴らした。
「機体の回転を止められた」
「もう一度右から来る！」

沖田が顔を上げて天井の窓を見た。
「くそ！」平沢はまたサイドブースターを全開にしてシャトルを横滑りさせた。「奴ら、シャトルを軌道からはずすつもりだ！」
「なに!?」
「右からしか攻撃してこないだろう。左側にだけよけさせていけば、最後には突入の軌道からはずれる。そいつを狙ってやがんだ」
「また来たぞ。また右だ！」
「そーは、いくか」
平沢は左側のブースターを全開にした。
「バカ、ぶつかる！」
「るせー。元の軌道に戻るにゃこれしかないんだ」
「うわ！」
右へ加速Gがかかる。それまでにブースターの噴射によってシャトルに加えられた左への加速ベクトルが消えて元の軌道に戻り始めると同時に、ミサイルは左翼をかすめるような至近距離を飛んでいった。
「とはー、ぎっりぎり」
「戦闘機来るぞ！」沖田が声を上げた。「右へ、うえ、何考えてんだこいつ！」
機体の右を見たつばさが悲鳴をあげた。

まるで猫のように、武骨な宇宙戦闘機がその機首をシャトルにむけたまま滑りこんできた。高機動バーニアを軽くふかして、横向きのままで地球に向かって飛ぶシャトルとスピードを合わせる。

「つ、捕まった……」

シャトルの横腹にぴたりと機首をむけて静止したグロテスクなスタイルの宇宙戦闘機に、真田がかすれた声を出した。

「大した腕だな」ちらっと横を見た平沢が言った。「こんなに簡単に接近（ランデブー）できるとは、厄介なパイロットだ」

宇宙空間では、一度ブースターをふかすと、もしブースターを止めても宇宙船は止まらない。地球上のように空気抵抗がないためである。

一度ブースターをふかせば、宇宙船は永遠にふかした方向へ飛び続ける。もし止めるには反対方向にブースターを完全に同じエネルギー分だけ噴射しなければならない。もし違う方向へさらに別のブースターをふかしたりすると、宇宙船は二つのブースターを合わせた方向へ永遠に飛んでいってしまう。だから宇宙空間での戦闘は恐ろしくむずかしい。

「うわっ、もう一機来た！」

急降下してきた二機目の戦闘機が、シャトルの真正面にブースターを下向きにふかして止まった。機体が安定しないうちにそのまま一八〇度ターンして機首をシャトルに正対させる。

「あ……」

「っという間に包囲されたな」
沖田がレーダーパネルに肘をついた。
「ダイアナ二号、三号及び静かの海の観測センターからの映像です」
戦闘態勢を解除され、通常の間接照明に照らされたルナベースの司令室の大スクリーンに、XCI-40に右と前を押さえられたシャングリラの映像が出た。シャングリラのみをアップで映しているスクリーンは、XCIからの直接映像である。
「遠軌道に乗ったところでエンジンを破壊しろ」
キーラーは伝えた。三十万キロ以上離れた場所の超望遠映像だが、空気がないので映像がぼやけることはない。
「追ってトラクターを出す」
「どーするんだよ」
正面と側面から戦闘機のミサイルとビームに狙われたシャトルのコクピットで、沖田がディスプレイを覗きこんだ。
「いーかげん逆噴射しねェと、軌道に乗れねェぞ」
「こちらから動き出すしかなさそうだ」
平沢は一度目を閉じてから、操縦装置に手を伸ばした。

「逆襲に出るぞ」
「どーすんだよ」
「シャトルの機体強度を信じるのさ」
言うなり平沢は機体を右側で構えている宇宙機めがけて横転させた。
『――！』
悲鳴のような声をあげて、ノエルは宇宙機を急降下させた。ＸＣＩの上部ノズルをかすめるようにスピンしながら、シャトルは推進機を全開にした。
「うはー」
「つかまってろ！」振り回されるシャトルのコクピットの中で平沢が叫ぶ。「とにかく大気圏まで行く！」
「できればシャトルの破片だけ突入なんてことにならないよーに」
「してたまるか！」
『カーゴリフターで逃げきるって？』マイクは苦笑した。『しかたない、エンジン壊すか。ノエル、何遊んでんだよ』
『あんなムチャするなんて思わなかった』
機体を立て直したノエルが頭を振った。
『あーびっくりした』
『攻撃かけるぞ！』

「ミサイル来た。四発！」
機のスピンが止まらないのでころころ変わるレーダーレンジの読み取りに苦労しながら沖田がいった。
「戦闘用に切り替えろ！　範囲（レンジ）が地球と月を規準にして固定される！」
指示しながら、平沢はスピンを止めつつ急降下に移った。
「相対速度12キロ／（パー）セク。ぶつかるぞ！」
「るせー！」
いきなりブースターをふかして急上昇させる。むなしくシャトルの下を通り過ぎた四発のミサイルは、そのままバーニアをふかしてシャトルを追ってきた。
「追尾（ホーミング）式だぜ」
見やすくなった三次元レーダースクリーンを、沖田が軽くたたいた。
「宇宙空間でホーミングミサイルに追われるとは思わなかった」
「何秒でぶつかる」
「あと三十秒で軌道交叉」
「減速サインが出た」
パイロット席の真田が、軌道図の出たディスプレイを見て言った。単純なワイヤーフレーム映像なので、英語が読み取れなくても意味はなんとかわかる。
「速度八〇〇パーセントオーバー。うわ！」

平沢はいきなり前後のバーニアでシャトルを一八〇度ターンさせた。正面に見えた地球が瞬時にして星ごと流れ去り、月が視界に滑り込んでくる。同時にスラスターを全開。最大五Gの減速Gが予告もなしにコクピットの六人に襲いかかった。

「……なにこれ……」

シートにおしつけられたつばさが喘(あえ)ぐ。

「ぶつかる……」

Gに対抗して目を開けた沖田が、声をかすれさせた。正面から球型に近い形のミサイルが急に迫ってくる。

「うりゃあ！」

気合もろとも平沢はシャトルをエアポケットに落ちたように降下させた。ミサイルが上を通過する。

「……何してんだよ！」

「減速」

急にスラスターを切って無重力に戻ったシャトルの中で、平沢が言った。

「敵機は!?」

「大分地球側にいる」沖田は重力で集まった血を戻すように頭を振った。「後方七十キロ」

「モニターって、便利なものがあったな」

平沢はやっと思い出して、コンソールの三面のディスプレイを実景に切り替えた。中央に後

ろ、左右はそれぞれ側面の映像を映し出す。中央、地球光の中に影になって見える二機の宇宙機が、一瞬輝いた。

「ビームか!?」

とっさに平沢はシャトルを横滑りさせた。

右翼と胴体の間を、二条のビームがかすめていく。

『よくあのデカ物を振り回すなあ』マイクはビームをよけたシャトルの後ろ姿に感心した。『たいしたもんだよ』

『いつまでバーニアの推進剤(プロペラント)が保(も)つかしら』

いたずらっぽい声で、ノエルが言った。

『あんなムチャなアクロバット飛行続けてれば、減速用の燃料まで使いきるぞ』

『次、いってみる?』

『いってみよう』

二機のXCIはさっと左右に分かれた。

「交叉(クロス)してくるぞ!」

「十字攻撃かよ」平沢はシャトルを反転させながら肩をすくめた。「さすがトップパイロット。えい、反応の悪いシャトルだ!」

急上昇から左へ滑らせて、片方のXCIに脇腹をぶつけるような角度で突っ込む。がXCI-40はわずかにバーニアをふかしただけで軽くシャトルをかわすと、そのままターンしてビームの

照準を合わせた。
『ムダが多いよ、どシロートめ。にしてもちょこまか動きおって。ノエル、ミサイルまかせたぞ！』
マイクはパワーをおとしたビームを発射した。背面姿勢から急降下したシャトルへ伸びていくビームは腹をかすめただけだった。
「ミサイルくる」沖田が喚いた。「上から！」
「るせー！」
下降を止めながら平沢はシャトルを横滑りさせようとした。ほとんど正面から発射された二機目のＸＣＩのミサイルが、急速に近づいてくる。
「この、行け！」
バーニアを全開にする。かなり横Ｇがかかるが、宇宙空間専用のミサイルはわずかに軌道を修正して正面からシャトルにぶつかってくる。
「うわ……」
とっさに頭をかばう真田の後ろで、つばさが悲鳴を上げた。榊に支えられたノブが体を硬くしてしがみつく。
爆発した。閃光とともに衝撃音がコクピットをふるわせる。
「直撃じゃない」再び機首を地球と反対の方向へ振りながら平沢が言った。「命中寸前に全開で逆噴射をかけた。しかしさすがにミサイルだぜ、破損したか!?」

「一応してないみたい」
無重力に流れる髪をかきあげながら、つばさが答えた。
「そーれブレーキ」
平沢が、バックで飛ぶシャトルのメインスラスターを開いた。今度は三Gくらいの減速Gがかかる。
「戦闘機回りこんで来る！」
沖田が叫ぶ。
「いーかげん、死にそーな気がしてきた」
印を切った真田が念仏を唱え始める。
「やかあしい！」
平沢が加速するような勢いでブースターを全開にした。三G減速を続けたまま、シャトルが左へ滑っていく。
「戻れ、正面だ！」
「なに!?」
左右から、星が動くように戦闘機が突入してきた。とっさに平沢はバーニアを逆転させた。
「うわ！」
一機目は機体をひねって左へ抜けていった。二機目が正面の近距離からビームを発射する。反射的に平沢がスラスターを切る。

機首がすさまじい光に包まれる。思わず目をそらすものの、熱として感じられるほど強い光がフロントグラス一杯に照射された。
「やられちゃった……」
鈍い衝撃の後、つばさが頭をとんとんとたたいた。
「どこだ!?」
「前の番号七番目のばーに……なーのずる」
「逆噴射ブレーキ用か」
「あらららー」沖田が声をあげた。「こりゃーあかん」
「今度は何だ！」
「新手」
沖田は天窓に顔をあげた。
「地球の反対側から」
「ブルーサーチからか」平沢は舌を鳴らした。「機数は!?」
「七、八機。ブルーサーチって何だ？」
「月の反対側の軌道にある、ＳＣＦの機動衛星だ。ルナベースと地球圏の防衛を二分している。八機かよ、まいったね。ＳＣＦの奴ら、防衛態勢ほうり出してこっちに戦力回して来やがったよ」

2

「ブルーサーチのナイトホーク八機、XCI－40と合流します」
オペレーターがキーラーに伝えた。メインスクリーンの実景にはXCIの攻撃をよけ続けるシャトルと、接近してくる八機のナイトホーク型戦闘機が映っている。
「チェックメイトだ、レッドバグ」
キーラーはシャトルの操縦をしているはずの平沢を思い浮かべて、口元に笑みを浮かべた。

「あーったく！」
見事に統制されたナイトホークの八機編隊が、わずかずつタイミングをずらしてシャトルに襲いかかった。
「カーゴリフターに、んな攻撃かけんじゃねーっての」
シャトルをスピンさせながら、構造材が悲鳴をあげるような乱暴な操縦で、四機目と五機目の間に割り込んで何とか攻撃を避ける。
「しぬー」「ぎゃー」
次々に加重のかかる方向が変わるのに、平沢以外の全員から抗議の声があがる。
「次来る」レーダーパネルにしがみついたまま沖田が言った。「両側からはじめの二機、はさみ

うちだ」
「見事なタッグプレイだ」
シャトルの両翼から、はさみうちをするようにXCIが迫る。対する平沢は姿勢制御ノズルをふかしてスピンを止めると同時に、シャトルを急上昇させた。回転が止まりきらないうちに、シャトルが弾かれたように上に飛ぶ。その下をXCIがジャックナイフのようにかすめた。
「今度は後ろに来る！」
横一線に並んだ八機のナイトホークが、シャトルの後方に回り込んでくる。
「だあーっしつこい」
シャトルの上昇を止めながら、平沢は地球の上で急ターンをかけた。機首をあげて突入してくる八機編隊に正対しながら、ブースト全開で減速ブレーキをかける。
「来る！」
「るせー！」
平沢は順不動で上下左右のバーニアをバラバラにふかした。シャトルが嵐の中の木の葉のように不安定に舞って八機の波状攻撃を回避する。
「今度は後ろから」
後方で、通りすぎたナイトホークとすれ違いにXCIが迫る。バーニアのレバーに手をかけた平沢はしかし、歯を食いしばった。
「よけねーのか!?」

ビーム砲を斉射しながら、あっさりと二機のXCIがシャトルを追い越していった。鈍いショックが機に伝わる。

「胴体やられたわ」つばさがパネルに手をあてて破損個所を数える。「左右のばーなーがあわせて五……七つやられちゃった」

「くそ！」平沢が首を振った。「限界だ」

「あ？」

「燃料不足だよ！」

平沢が燃料計をはじいた。

「これ以上回避行動してたら、減速しきれなくなる」

「どーゆーこと!?」

つばさがいきり立つ。

「ガスがたんねーんだと」

沖田が大仰に足を組んだ。

「宇宙空間じゃ旋回一つにも燃料食うんだ。もう残ってないのか？」

「突入寸前まで減速する分、ギリギリしかな。まだ、四〇〇パーセントもスピードオーバーだ」

平沢はダッシュボードのコンピューターキイをたたいた。

「それでも危ないくらいだ。これ以上余分な燃料使うとスピードオーバーで確実に大気圏突入で燃え尽きる」

「すぐそこじゃんか、地球！」
機首は地球の反対側を向いているが、実景を映した三つのディスプレイには、後方にはもちろん、左右のモニターにまで地球が見えている。地球のすぐ上にいる感覚である。地図通りの南北米大陸の太平洋岸の夜がすぐ下に見えている。
「余分なもん捨てて、軽くしたらどうだ？」
「一度よけて、それでおしまいだ」
平沢は沖田に、両手を上げて見せた。
「どーすんだよ」
「降伏するか……」
「パス！」「パス二！」「同じく！」
男三人が続けざまにいった。
「ならばこのまま回避行動を続けて大気圏内で燃え尽きて、真っ白な灰になるか……」
「真っ白な灰……意外と古いのね、探偵」
「でなければ回避行動とらずに減速だけして、ビームが来よーがミサイルがぶつかろうが黙ってるか」
「動きが止まったな」
司令室のスクリーンの中でメインノズルを地球に向けたまま静止した（ように見える）シャト

ルを見上げたジルベスターがいった。
「燃料を使いきる前に気がついたか」キーラーはコンソールを軽く指でたたいている。「攻撃を続けろ」
『了解』
マイクはビームのトリガーに指をかけた。
『とりあえずバーニア・システムからつぶしてこう』
『お先に』
ノエルがゆるやかな弧を描いて、地球をバックにしているシャトルへ飛んでいった。
閃光とともに、コクピットに軽い衝撃が伝わった。
「前部ばーなーの十番台全滅」
苦い顔をしたつばさが、頭に手をやる拍子に肘で何かのスイッチを入れた。
「……ん？」
スピーカーから、スローな歌が流れ出した。
「なんだ？」
「どっかのFMの電波だろう」
平沢がコクピットからチューニングする。変調していた曲が、時折バンアレン帯の影響でひずむものの、きれいに聞こえるようになった。
「月の河（ムーン・リバー）とは粋（いき）だね」

平沢は腰をずらして頭の上で手を組んだ。
「オーストラリアあたりの局（ステーション）だろーが、ステキな選曲してくれるぜ」
「まったく」沖田が肩をすくめた。「地球の上でこんな古いの聞くとは」
メカだらけのコクピットで古いメロディーを聞いているうちに、榊はふと、ある事を思いついた。
「ね、ちょっと耳貸して」
ノブを指招きする。なにというようにノブが首をかしげて耳を出した。
榊が何事かささやく。聞き終わらないうちにノブは声をあげた。
「うそー、やだ、できっこない！」
「なんだ？」沖田がシートを回して榊とノブの方を向く。「子供でも作るのか？」
とたんに飛んできたつばさが沖田の横っ面を張り飛ばす。
「何考えてんのよスケベ！」
「言っていい？」
榊がノブに訊いた。ノブは口をとがらす。
「あのね、サイコキネシスでこのシャトル動かせないかって」
「さいこきねしすとは何ぞや？」
真田がこれもシートごと後ろに向き直った。ノブが体の前で両手を振る。
「使おうと思ってできたことなんかないもん。できっこない」

「念力だねんりき。ここ無重力だから指一本分の力で動くんだけど……」
「重さがなくたって、質量はあるぜ」沖田がくるーっとシートを回して背を向けた。「できんのかよ」
「だめ、できない」
ノブが力一杯首を振る。
「月の基地の中でだって使って逃げようと思ったのにできなかったもん」
「できるんならやってくれ」
平沢がシートに座りなおした。
「次の攻撃は!?」
「……八機編隊、来るぜ」
「ブレーキングだけでいつまでよけられるか」
後ろから来た八機編隊が波状にミサイルを発射すると同時に、平沢は再びシャトルのメインノズルを全開にした。
「うげ」「むぎゅ」
五Gの加重におしつぶされそうになる。こちらが後ろ向きに減速しているために相対速度を上げながら、きれいに八機編隊がフライパスしていった。急激にGが消える。
ムーン・リバーが終わって、ゆったりした女の声のDJが入った。
「月特集か」

沖田がつぶやいた後、フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーンが始まった。
「やるっきゃない」
榊が力説する。
「だめ、絶対だめ」
「できる。お前しかいないんだよ、この宇宙船動かせるの」
「わたしがメカオンチなの知ってるくせにい」
「メカオンチ関係ない。力入れてこのシャトル動かすの！」
「……」
ノブがうらめしそうな顔をして榊の顔を見上げた。うつむいて目を閉じる。榊が訊く。
「方向は？」
「上やってくれ」平沢が計器類から目を離さずに天井を指した。「できるだけ景気良くな」
「上だって」
ノブが握りしめた両手を額にあてた。皆の呼吸の音だけがやけに大きく聞こえる。
「だめ」ノブは髪を乱して大きく首を振った。「できない……だめ……」
「真後ろから来たぞ」沖田がレーダーパネルに片腕をあてたまま言った。「メインノズル狙ってやがる」
「もう一度！」
榊が軽くノブの肩をたたいた。ノブがもう一度目を閉じる。脇で榊が力んでいるのがわかる。

ノブは、見えないシャトルの下に力を加えようと心を集中させた。
「ミサイル接近！」
きつく目を閉じて思いっきり力を振りしぼる。――が何も起きない。
「だめよ」小刻みに首を振って、ノブはがっくりと肩を落とした。「使えない」
「……」
しばらく頭のあちこちに手をあてて何か考えていた榊が、いきなりノブのおとがいに手をあてて上を向かせた。
「おまじない」
相手が目を閉じるのも待たずに一瞬のキス。見ていた沖田がひょうと口笛を吹いた。
「……」
目を一杯に見開いたノブに、榊が真っ赤な顔をして上を指してみせた。
「さ、も一度」
一瞬、ノブは舞い上がるようなうれしそうな顔をした。うつむいて目を閉じる。
「命中まであと五秒」沖田がニヤニヤしながら榊の背をぽんとたたいた。「このォ！」
「は……」
榊が笑い顔をひきつらせる。
「……三、二、一……うわ！」
コクピットに急激なGがかかった。

「！」
ジルベスターは自分の目を疑った。スクリーンの中のシャトルが、ブースターをふかさずに急に上昇したのである。
波状の噴射煙をひきながら、その下をミサイルが通り過ぎた。
「司令、今のは？」
「わからん」一瞬絶句してから、キーラーは首を振った。「何が起きたのだ!?」

『どんな手品使ってやがんだ』
ブースターもなしに動き出したシャトルに、マイクは目を見張った。
『ＥＳＰ、だわ』ノエルが声をこわばらせる。『中に乗ってるエスパーが動かしたのよ』
『そんなことが……』
できるのかどうか考えるより先に、パイロットとしての訓練がマイクにＸＣＩを突入させていた。
『ならハンディはなしだ。ノエル、来い！』
「二機来るぜ」沖田が平沢に告げた。「今度は速い！」
「奴ら本気になったな。減速かけるぞ」
五、六回全開でブースターをふかす。二機のＸＣＩは急角度でシャトルめがけて突入してく

る。
「左行ってくれ」
沖田の横からレーダーパネルを覗いた榊が、グリップにつかまったまま体を硬くしているノブにいった。ノブがかすかにうなずく。
「間に合わん！」
沖田の声と同時に、背面にくらったビームの衝撃が、コクピットを震動させる。
「機体の上やられたわ」
「かまうこたない！」
半Gくらいで減速をかけっぱなしにしながら、平沢が喚く。沖田が、
「残り八機来るぞ。えーい、一機だと思って」

「ESP……そうか」
ジルベスターの声はふるえていた。スクリーンのシャトルは、バーニアもブースターもなしに宇宙空間で舞っている。
「どうしたねドクター？」
「ノブ・コマキですよ」
ジルベスターがゆらりと司令官ボックスにもたれた。
「潜在能力があれだけ強い彼女なら、無重力の中の船を動かすことくらい造作もないでしょう。

彼女がサイコキネシスで、あのシャトルを振り回しているんです」
「そんなことができるエスパーがいるのか？」
キーラーはスクリーンから目を離さない。
「我がＳＣＦには一人もおりませんな」
「仕方がない。――こちらルナベース、指令変更、シャングリラを破壊せよ」

3

戦場は、どんどん下がっていた。すでに高度は二百キロを大きく割っている。すぐ下に、インド洋セイシェル諸島が夜と昼の間で白い雲に見え隠れしながら、ぽつんと浮かんでいる。
「くそめ」
十機の宇宙戦闘機が、間断なくシャトルを襲い続ける。ビーム直撃の軽いショックに体を振られながら、平沢が軌道指示パネルをたたいた。
「衛星軌道に乗って突入ポイント探すような悠長なことしてられん。直接大気圏に突っ込むぞ」
「なんまんだぶなんまんだぶ」
「お前の家、法華経じゃなかったのか？」
コ・パイ席で念仏を唱える真田に、沖田がレーダー読み取る片手間に訊く。
「うるせーってんだ、学生ども！」

「あいよ、次、左」
蒼ざめた顔にじっとり冷や汗をにじませて、ノブはぼんやりと頭をめぐらした。来るのがわかる。
「五機！　ばっらばらに突っ込んできやがる！」
尾部を朝のインド洋の大海原に向けたまま、ビームの波状攻撃をかわす。メインノズルからは、散発的な噴射がまだ続いていた。
「被害状況は!?」
目前の大気圏突入準備のためにいくつものスイッチを切り替えながら、平沢が目をちらりとつばさの前のスクリーンに走らせる。切り替えられたスイッチやダイヤルには確認のライトがつかないものもいくつかあった。
「点滅している白の×印だ」
「全部で……」
「場所ごとに！」
「えーと……前の方が一、二、三、四……上の方が三の四五（よんごー）……七じゃなくて八……」
「あー！」
聞いてじれったくなった沖田が、声をあげた。
「もういい。点滅してないでかい赤の×印は」
平沢も同様だったらしい。つばさは即答した。

「屋根に一つ」
「他には!?」
「今のところはなし」
「戦闘機どもに変化は？」
「また来るぜ。上から二手に分かれて」
「見えたよ」平沢はげんなりと溜め息をついた。「あいつら、いつまでくらいついてくるつもりだ。あんなので大気圏突入できるはずないんだが」
宇宙空間の真空中をのみ飛び回るように作られた宇宙戦闘機には、空気抵抗のことは考えられていない。
『機体温度二〇パーセント上昇……』
ノエルのか細い声が聞こえた。
『わかってる』
マイクは地球光の中にシルエットになって浮かぶシャトルを見た。地球が、とてつもなく大きく見える。
すでに宇宙戦闘機の規定(カタログ)最低衛星高度一六〇キロを割っている。成層圏超高度の、普段なら問題にならないようなかすかな大気が、大きな空気抵抗となって戦闘機群を苦しめていた。
急降下をかける度に、機体の先端部が赤熱する。はじめから耐熱装備が充分に施してあるシャトルならともかく、戦闘機はもう限界に近い。

『そろそろ限界か……』
マイクはつぶやいた。
『ナイトホーク、離脱せよ。先に上がれ』
ＸＣＩより前に開発されたナイトホークは、徹底した軽量化のため機体強度が少し弱い。点灯したワーニングランプの数はＸＣＩの倍になっているはずである。
了解のサインを出したナイトホークは、シャトルに最後のビーム攻撃をかけていった。離脱して、ばらばらに地球圏から上昇していく。
『マイク』
いささか情けない声で、ノエルはマイクに呼びかけた。
『こっちも限界、機体も、あたしも。こんな地球のすぐ上でドッグファイトなんて、神経切れちゃいそう』
『ここまでしぶといとは司令部も教えてくれなかったからな。よし、エンジンつぶして終わりにしよう』
マイクは、噴射を繰り返しながらＸＣＩより速い速度で降下していくシャトルを見た。もう飛行能力はろくに残っていないはずだが、宇宙空間ではそれは大した支障にならない。
『奴（シャングリラ）のケツに残り全弾ぶちこんで逃げ出せ』
『残り全部？』
『そー、全部だ。先行きな、後からすぐ追う』

『了解、サンクス』
ノエルはXCIを突入させた。超高速のスピードに、かすかな大気がうなり声をあげて抵抗する。機体温度さらに上昇――。
『これで最後なんだから！』
「残りの燃料全部で減速かけるぞ！」平沢はスロットルに手をかけた。「降下スピードが速すぎる」
「どーぞ」沖田は大分見にくくなったレーダーから目をあげた。「これで最後だろーねェ本当に」
「バカ来るぞ！」
横からレーダーパネルを覗きこんでいた榊が声をあげた。
「後ろから二機！」
青い海と、その上に光る渦を巻いた細い雲をバックにして二機の戦闘機が噴射炎を全開にして上昇してくる。
「吹き飛べー！」
平沢はスロットルを一気に全開にした。五Gの加重が一度に体にかかる。
「ノブ、下行って、下！」
噴射煙の中で、二機のXCIがミサイルを発射したようだった。
「うわ」「ぐえ」
後ろから蹴とばされたような衝撃が、シャトルを激しく震動させる。だしぬけにロケット音が

とぎれ、無重力が戻ってきた。
シャトルをかすめるような急角度で、黒い星空へ二機のＸＣＩが垂直上昇していった。
「後ろの、やられちゃった」
つばさは苦しそうに息をつきながら頭を抱えた。
「ロケット、全滅」
「終わりだね!?」
榊が、Ｇがかかった時そのままの姿勢で体を硬直させていたノブを抱き起こした。
「もういい、これで全部終わった」
うつろな目で榊の声を聞いたノブが、ふっと力を抜いて榊に倒れ込むように浮き上がった。
「スピードが高すぎる……七〇パーセントオーバーだ」平沢がつぶやいた。「完璧に燃料切れで、ブースターも全滅？」
「こんなやられたまんま突入して、大丈夫か!?」
「点検しているヒマはない。赤の×は上部とケツだけか？」
「今のところ……」つばさは自信なさそうに言った。「まだ増えそうな感じするけど」
レーダーパネルから離れた沖田が、つばさの前のパネルを覗きこんだ。スクリーンのシャトル三面図には、見事に×印がならんでいる。
「これはすごい。リーチ一発ツモ国士無双とゆーか全取り換えのロイヤルストレートフラッシュとゆーか」

平沢はフラップを二、三度動かしてみた。少し反応が鈍いが作動する。
大気圏超高層部のかすかな空気抵抗をつかまえて、平沢はシャトルの姿勢を立て直した。
「大丈夫なんかえ？」
真田がコ・パイ席であぐらをかきなおした。
「念仏でも唱えてろ」
下からつきあげるような衝撃の後、星空が突然ネオンのような光のトンネルになった。ガツンという感じでラジオから流れていたスローバラードが途切れる。
「ブラック・アウト」
沖田がいったとたん、コクピット内に何かの警報が鳴り出した。
「んだ!?」
「スピードが高すぎると」
平沢は警報（アラート）の文字を出して点滅しているＣＲＴの一つを顎（あご）で指した。
「んなこたわかってんだ、黙っとれ！」
「機械に喚いても、うわ」
あっちこっちで警報やらサイレンやらが鳴り出す。
「なんだァ!?」
「前縁異常過熱、スタビライザー故障と……えい学生、席に戻れ！」
大気圏突入時のプラズマ化した空気が、シャトルのまわりで燃えさかっている。光る空が、一

段と輝きを増した。
「地上まで保つのか!?」
レーダー席に戻った沖田は、あっちこっちに点灯しはじめた赤いワーニングランプを気にしながら訊いた。
「祈れ！」
平沢は叫んだ。機体が不気味な震動をはじめた。
「シャングリラ、インドネシア上空で大気圏に突入しました」
オペレーターが言った。スクリーンには炎の塊となって地球へ落ちていくシャトルが陽炎にゆれて映っている。
キーラーはマイクをとった。
「こちらキーラーだ。全セクション に今回の作戦の終了を伝える。司令室は非常態勢解除」
ジルベスターは、何もいわずにキーラーに片手をあげて出ていった。
オペレーターが自分の担当のブロックのメカをオフにして、司令室から次々に出ていく。
スクリーンが一つずつ消えていく。最後にキーラーの司令席の計器盤だけが残って、キーラーの顔を照らしている。
ただ一人、司令室で消えたメインスクリーンを見上げていたキーラーは、やがて笑い出した。

プラズマ化した大気圏上層部の薄い空気がシャトルを包んでいる。規定速度を遥かに超えたスピードで、傷だらけのシャトルは北太平洋へ落下していった。

不気味な震動とともに、わずかずつ重力が戻ってくる。

「なんなの、これー？」

じわじわとシートに押しつけられるような感覚に、つばさが声をあげた。

「減速してるんだ！」

ほとんど用をなしていない操縦桿をおさえつけた平沢が喚いた。

「三Gか四Gはかかる。耐えな」

コクピットはさながら最高潮に達したディスコのようだった。すべての窓が、空気の密度が高くなるにつれて輝きを増し、警告灯や危険表示灯がありったけ派手に点滅している。BGMはうるさいくらい鳴っている、どれがどれだかもわからない警報。

「機首前部で、二〇〇〇度C突破！」

沖田はやけくそに喚いた。

「さらに上昇。とっくにレッドゾーンだぜー」

「わあっとるわ！」

やかましく鳴る警報と、機体と空気との擦過音に消されないような大声で平沢が怒鳴り返す。

減速によるGがじりじり増加する。同時にシャトルの震動も激しくなっていく。

「機体が分解するぞ」

「させてたまるか！」
機体の警告灯はとっくにつきっ放しになっている。プラズマ化した炎に包まれてシャトルがいつバラバラになってもおかしくない。
榊は自分の体が燃えていくような錯覚に襲われた。操縦室の温度が上がっているような気がする。
「えーい、うるさい！」
金切り声をあげる警報に平沢が喚いた。
「破損個所がどんどん増えてる！」
「あたりまえだ！」
あちこちから爆発でもするような音が聞こえだした。
「……大丈夫、まだ保つ」
窓の外の光が、少しずつ弱りはじめた。どこからか、かすかに聞き覚えのあるメロディーが聞こえてきた。
光が、蒼みを帯びはじめる。
「なんだ？」
「ムーン・ライト・セレナーデ」
平沢がつぶやいた。
「やったぜ、ブラックアウトを切り抜けた！」

光が、消えていく。見慣れた空がゆっくりと窓の外に広がる。
「やったー！」
歓声があがった。丸い地平線が青い光を発し、その下に所々白い雲におおわれた日本列島が幾分かすんで横たわっている。
「地図って、正しいんだなー」
東北地方から近畿までが目で見える。榊は感心したようにつぶやいた。
無動力でグライダーのように滑空していくシャトルの機首の下に、点々と富士火山帯に沿って、小笠原諸島が顔を出している。
関東平野の一画で、作られたような整った形の富士山が頭に雪をかぶっている。
「さーてと」平沢がポンと両手を打ち合わせた。「羽田空港にでも強行着陸してやるか」

関東、相模湾——江の島沖。
青い空の一画から黒い煙の尾をひいて、焼け焦げだらけのズタボロになったシャトルが降下してきた。
「スピードが落ちすぎたな。この調子じゃ、陸につくまでに墜落しちまう……」
何でもなさそうにつぶやいた平沢に、沖田が仰天した。
「このバカ！　どーして陸まで保たねェんだよ！」
「大気圏突入の前からガス欠になってんだ。着水するぞ、つかまれ！」

平沢は操縦桿をひいた。濃い藍の海面に、派手に白い波しぶきをたててシャトルが着水する。
「う、うわあー」
着水のショックと、急激な水のブレーキで全員が前へほうり出された。シート二つに六人が折り重なる。
「……着水と墜落の区別くらいつけてほしいよ、ったく」
榊が、波に乗ってゆっくりローリングをはじめたシャトルから外を見た。
「しかし、やっと懐かしの我が地球に」
「やったね！」「わぁお」
「ほれほれ」
平沢が人間をかき分けて立ち上がった。無重力に慣れた体が目まいを起こしそうになるのを必死で耐える。
「早く逃げ出さんと潜水艦でも出てくるぞー」

平日、それも九月も終わりに近い時期なので、江の島の海岸にはサーファーくらいしかいなかった。
シャトルからゴムボートで漕いできた一同が、浜辺に降り立つ。
宇宙服と引き換えにもらってきた作業服姿の榊がノブの手をとって浜に降り立った。
榊は空を見上げた。ノブは気づかずに先へ歩いていく。

雲一つない晴れ渡った空に、太陽がぎらぎらと輝いている。後ろからかったるそーに歩いてきた沖田も空を見上げた。

「どした、榊？」

「いや、あそこから戻って来たんだなと思って……」

真田も空を見上げた。

「何やってんの！」

先を歩いていたつばさが振り向いて、浜の上でぼけっと空を見上げている三人に叫んだ。

つられてノブも振り向く。

「置いてくわよ。今からなら午後の授業間に合うんだから」

「タフだね、あいつ……」

言いながら男たちは歩き出した。

「五時間目何だった？」

「えーと、今日何曜日だっけ？」

「……やばい。世界史だ！」

三人は顔を見合わせた。

「レポート！」

「まっ、間に合わん。早いとこ帰ろう、こら探偵！」

沖田が後ろからくる平沢に向き直った。

「なにちんたらしてんだ。学校遅れる！」

4

江の島に着水したシャトル〝シャングリラ〟は、現場に急行したＳＣＦ太平洋艦隊潜水艦カサンドラによって即刻回収された。

電車で学校に向かう一同と別れて途中下車した沖田は、無事ほうっておかれた７５０ＳＳで国立に戻ってきた。途中、川崎街道で震動のためキックペダルがとんだそうである。

世界史のレポートは、榊、真田、沖田ともに不合格となり、再提出を命じられた。

なお、この事件のためＳＣＦの極東地区におけるスターボウ計画は事実上、一時中止された。

THE MAKING OF 妖精作戦

七八年夏、超能力ネタの学園ものを書こうと思いつく。
七八年十二月九日、転校してきた女の子が実は超能力者であるという安易なパターンを、臆面もなく使ってしまう。
七九年春、話の収拾がつかなくなってきたのでほうり出す。
某年某月、謎の敵巨大組織を〝悪〟でない組織にしようと思いつく。
八一年九月、第二稿書きはじめる。このころまでにいくつか同人誌連載の話があったが、すべてつぶれる。
八一年某月、SCFの設定を作る。後日、某NTVにおいて「第三の選択」が放映されてぶっ飛ぶ。
某月某日、スペースシャトルとしてXB-70を出そうと企てる。成層圏までジェットで上がり、ロケットに点火して大気圏離脱する大型シャトルクルーザー。後日、某GORO誌においてすっぱ抜かれたNASA次期シャトル、スターレイカーを見てぶっ飛ぶ。ははは……。
八二年四月、第二稿完成する。行きあたりばったり成り行きまかせで書いたので、予定枚数はオーバーするわストーリーはミスするわでえらい出来だった。

八四年四月二十二日、第三稿完成する。

八四年秋、本来ならばこの本が出ているところだが、突如として東京湾にゴジラが出現し阿蘇からラドンが飛び立ち、スターウォーズがうる星やつらして時をかける少女してしまい、日本中がわやくちゃになっているはずである。まことに残念である。

八九年夏、NHK・FMでラジオドラマ化される。作業に一切タッチしなかったため、本放送で愛娘のストリップを見る気分（想像）を味わう。どういう気分かって？　見たいんだけど、見てられないんだよ。

九四年夏、編集部より、新装版のための本文チェックを命じられ、昔のラブレターを一〇年後の真っ昼間に添削するような気分を味わう。

九四年秋、再出撃。どーなることやら。

『妖精作戦』完

一〇年目のあとがき

「もう一〇年以上昔だ。オレは一人で売り出そうとやっきになってる青二才だった」

（『ルパン三世・カリオストロの城』より）

あのころの風景で覚えていることは少ない。

あのころの気分なら、はっきりと思い出せる。いきがって、バカやって、焦って、現状を肯定する勇気も未来を信じる度胸もなかった一〇年前。あの頃を青春なんて言葉で飾れるのは、引退して養老院に入ってからだろう。

かっこつけて回想なんてできない。

サボりたおした大学にいつまでもいられるわけもなく、かといって未来に対するビジョンもなかった。

作家志望だと口にするのは授業中に居眠りするより簡単だが、その確率の低さも解っていた。なにせ年間デビューする新人作家の数は、東大入学者より、アイドルよりも少ない。

自分が書いた小説が本屋に並ぶ。まともに考えれば起こるはずのない奇跡のような未来を、そ

れでも捨てずに信じられたのは、多分に欲求不満と根拠のない自惚れのせいだった。

ほんの三年前まで現役で高校生だったから、それがどういう人種で何が好きで何を考えているか、肌で知っていた。学生なんぞ十数年以上も昔に卒業したはずのプロ作家に勝てるとしたら、それだけかもしれない。

文章や情景描写で保たせるほど文章力に自信がなかったし、とろい話は嫌いだったので、展開も出来る限り早くした。当初、編集部に持ち込みした時、ラストの宇宙戦無しで五〇〇枚あった原稿を四〇〇枚に濃縮した。ネタ出しにも、カットにも全力を注いだ。当時は、全ページ、全シーンの実写のカット割りが見えていたはずである。

技術も文章力も上がっているはずの今、あの頃とくらべて失ったものがあるとすれば、うるさいほどの熱気と緊張感だろう。

ところで、同業他者である作家やマンガ家の方々は、自作の寿命をどれくらいに考えているのだろう。

最短、買ってくれれば読まれなくてもいい、読み終わったら網棚にでも置いてってくれ、から、永遠と豪語する人まで千差万別だとは思うけど、聞いてまわった事はない。

笹本は、素直に、自分が作家であり続けられるうちは読んでほしいと思っていた。しかし、これには重大な落とし穴がある。

言葉が生き物であるのと同様に、話も生物（なまもの）である。たとえ内容が充分に面白くても、文体や表

現が古くて読みにくくなれば、娯楽作品としての価値は半減する。

そして、一般人の平均寿命。笹本が何歳まで作家業を続けるのかは不明だが、死ぬまで話を書き続けたとすれば、デビュー作に至っては約半世紀もの耐用年数を要求することになる。無茶としか言いようがない。

山のような設定を作るだけ作っておきながら、話の展開を優先したために舌足らずな所だらけの作品だが、何度も読みなおしてほしいと思って書いた、それは確かである。しかし、一度世の中に発表してしまった以上、もはや作品は作者のものでなく読者のものであり、それをどう読んでどう思うかは読者であるあなたの自由である。

最初の一〇年目の判定、吉と出るか凶と出るか。そして、一〇年前に書いた作品が一〇年後の読者にどう受けとられるか。

……逃げちゃおーかしら。

一〇年目の夏　　笹本祐一

ISBN4-257-76697-2

C0193 ¥524E

9784257766971

19201930052 40

定価：本体524円＋税

断固、決行あるのみ！ 超国家組織に誘拐された同級生の超能力少女・小牧ノブを救出しようと、こともあろうに、横須賀沖に停泊中の米海軍の原潜カサンドラに潜入を図る三人の高校生がいた。

超弩級原潜から硫黄海域の海底基地へ、そしてスペース・シャトル、ルナ・ベースへと、高校生とタフガイ私立探偵が繰り広げる天衣無縫の追跡アクション劇！